令和８年５月29日
教育課程部会
外国語ワーキンググループ
参考資料１

外国語ワーキンググループ
参考資料・データ

1. 現行の学習指導要領等

H29-30改訂における主な改善事項

小３～４年で外国語活動、５～６年での教科化、中学校も授業を英語で実施、高校卒業時の習得単語レベル4000～5000程度に

CEFR※

B２（英検準１級等）

B１（英検２級等）

A２（英検準２級等）

A１（英検３級等）

旧学習指導要領（H20･21改訂）

・学年が上がるにつれて意欲に課題
・学校種間の接続が不十分

高等学校

英検準2級程度以上の生徒
40.2%（目標50%）*H30

・学習意欲、発信力に課題
・言語活動が十分でない

中学校

年間140単位時間（週4コマ程度）

英検3級程度以上の生徒
42.6%（目標50%）*H30

・小学校の学習経験が十分に生かしきれていない
・言語活動が十分でない

小学校

年間35単位時間（週1コマ程度）活動

・音声を中心に英語に慣れ親しんでいる
・中学校入学時の学習意欲が向上

高校卒業レベル
旧: 3,000語程度
新: 4,000 ～ 5,000語程度

高等学校で
旧: 1,800語程度
新: 1,800 ～ 2,500語程度

中学校で
旧:1,200語程度
新:1,600 ～ 1,800語程度

小学校で
新: 600 ～ 700語程度

学習指導要領（H29･30改訂）

小学校2020（令和2）年度、中学校2021（令和3)年度から全面実施、
高等学校2022年度（令和4年度)入学者より学年進行で実施

小・中・高等学校を通じた5つの領域別（「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り・発表]」「書くこと」）の言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成

高等学校

・**5領域を総合的に扱う科目**群（英語コミュニケーションⅠ,Ⅱ,Ⅲ）、ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄやﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ等を通して**発信力を高める科目**群（論理・表現Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ）を設定
・授業は外国語で行うことを基本（前回改訂より）

中学校

年間140単位時間（週4コマ程度）

・外国語で**自分自身の考えや気持ちなどを伝え合う対話的な活動**を重視
・具体的な課題を設定するなどして、学習した語彙、表現などを**実際に活用する言語活動を充実**
・**授業は外国語**で行うことを基本

小学校

5･6年（教科） 年間70単位時間（**週2コマ**程度）

・音声に十分慣れ親しんだ上で、段階的に「読むこと」「書くこと」を加える
・指導の系統性を確保

（15分程度の短時間学習の活用等を含めた弾力的な時間割編成も可能）

3･4年（活動） 年間35単位時間（**週1コマ**程度）

・「聞くこと」「話すこと（やり取り・発表）」を中心
・外国語に慣れ親しませ、学習への動機付けを高める

改善のためのPDCAサイクル　高校生のための学びの基礎診断

【2019年度～】

改善のためのPDCAサイクル　全国学力・学習状況調査

※「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」に関する調査を実施

【2019年度～】

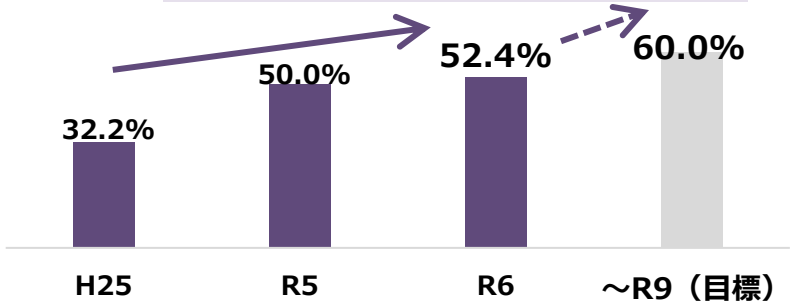
※CEFR：欧州評議会（Council of Europe）が示す、外国語の学習や教授等のためのヨーロッパ共通参照枠を言う。英検との対照は日本英語検定協会が公表するデータによる。

一定の英語力を有する中高生の割合は向上

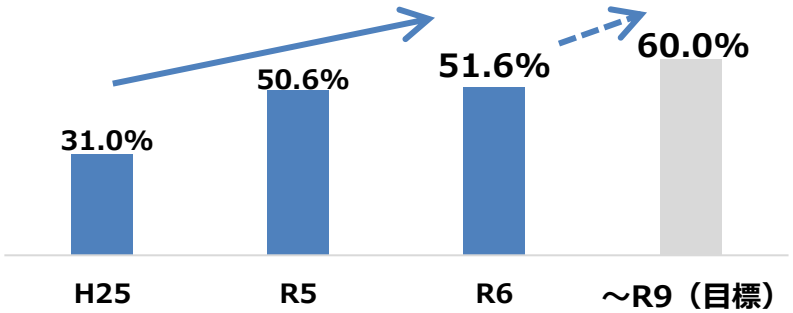
生徒

中学校

CEFR A1（英検３級相当）以上

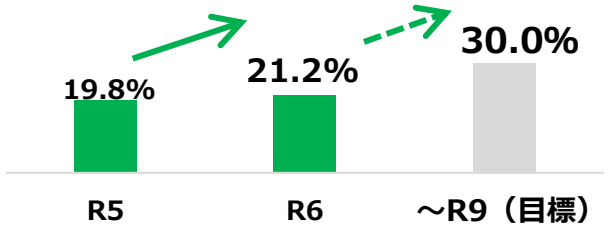


CEFR A2（英検準２級相当）以上



高等学校

CEFR B1（英検２級相当）以上

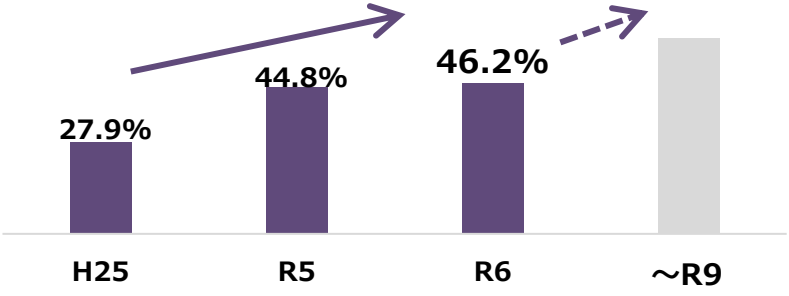


※「第４期教育振興基本計画」(R5~R9)では、
中学校卒業段階でCEFR A1レベル相当以上、高等学校卒業段階でCEFR A2レベル相当以上を達成した**中高生**の割合**６割**以上、CEFR **B1**レベル相当以上を達成した**高校生**の割合**３割**以上を目標としている。

教師

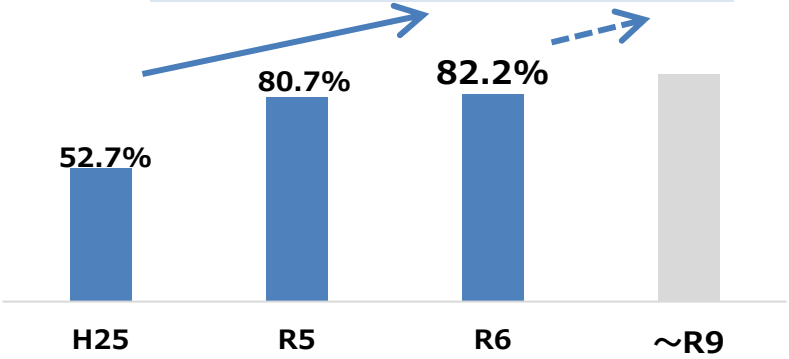
中学校

CEFR B2（英検準１級相当）以上

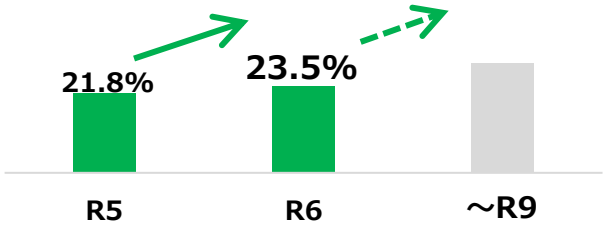


高等学校

CEFR B2（英検準１級相当）以上



CEFR C１（英検１級相当）以上

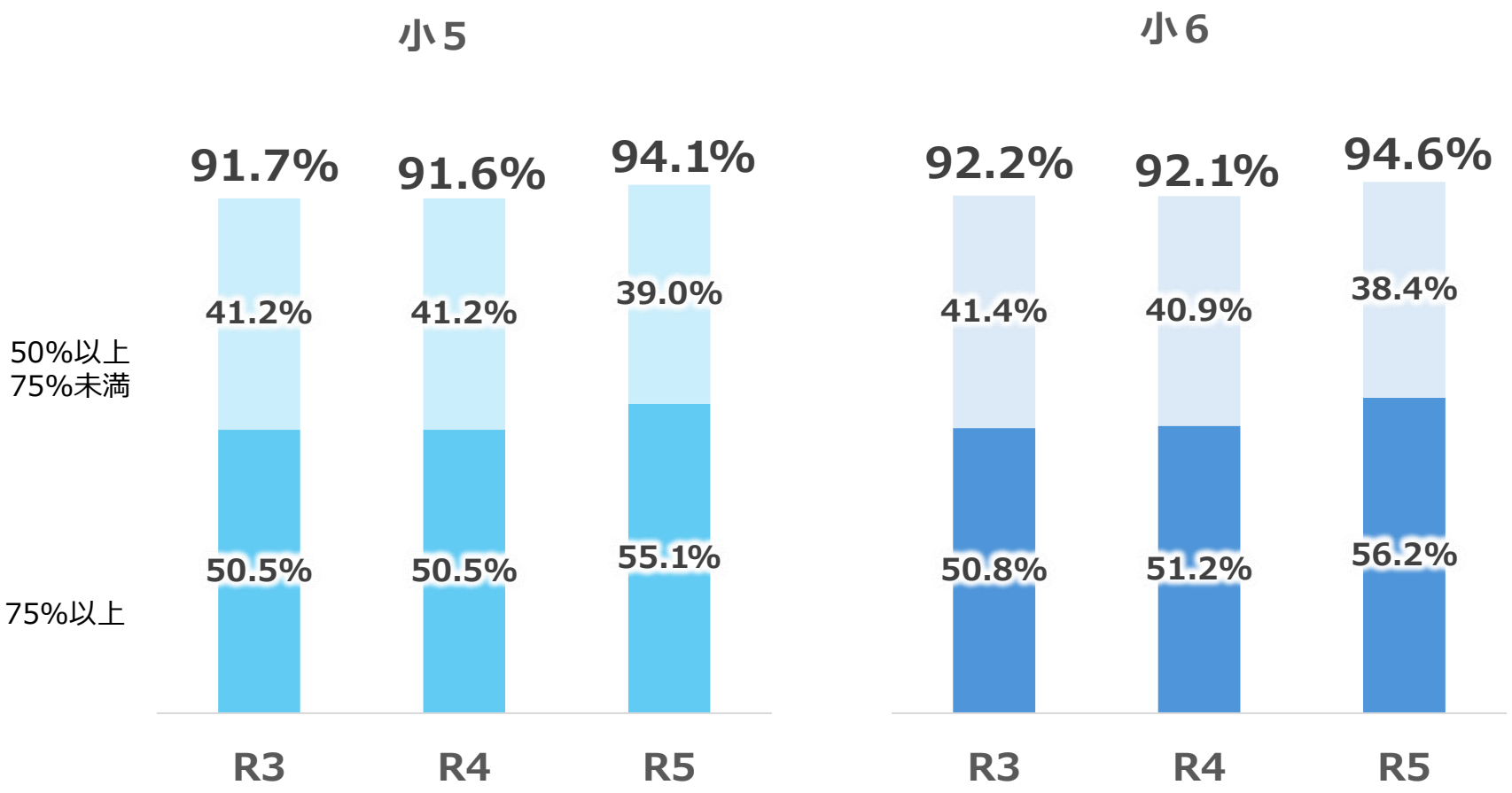


（出典）令和６年度英語教育実施状況調査

2. 活動を中心とした指導

小学校
英語教育
実施状況調査

児童の英語による言語活動時間の割合



※調査対象は公立小学校、義務教育学校の前期課程（H28~）　（R4より特別支援学校及び特別支援学級は対象外とする旨、明示）
※R3までは学級単位、R4からは学校単位で回答。
※調査基準日は12月１日現在（H25のみ12月２日現在）
※R4までは１単位時間の授業に占める割合、R5からは１年間の授業を通して占める割合を回答。
※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、
　R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」
※割合の合計は、小数点第２位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

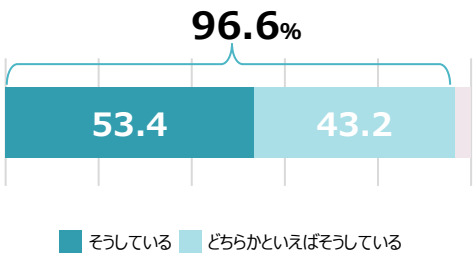
（出典）英語教育実施状況調査より作成。

小学校
R4学習指導要領
実施状況調査

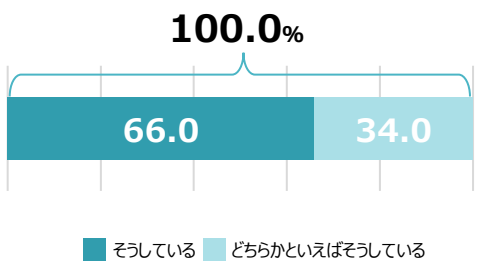
言語活動中心の授業が定着しつつある

教師への調査では、言語活動の状況について**肯定的な回答の割合が高く、**
言語活動中心の授業が実施されている傾向にあるといえる

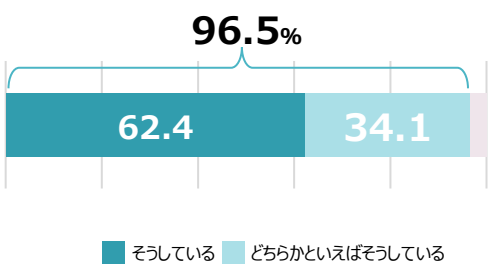
Q 英語の授業で、児童が指導者や友達の考えや気持ちなどを聞く活動をしている



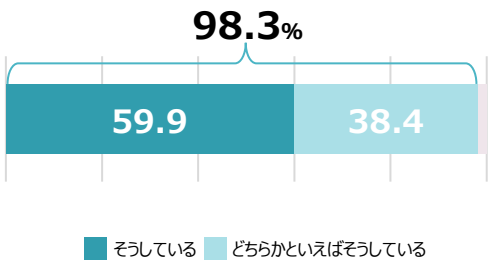
Q 英語の授業で、児童が互いの考えや気持ちなどを伝え合ったり発表したりする活動をしている



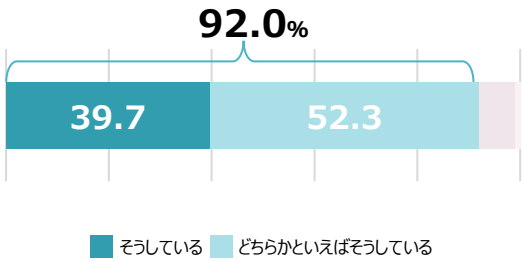
Q 英語の授業で、児童がイラストなどをヒントにしながら、英語で書かれている単語や文を読む活動をしている



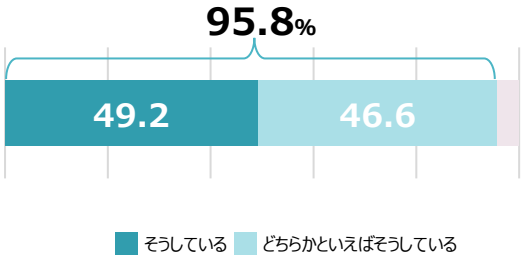
Q 英語の授業で、児童が例文や単語を参考にしながら、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動をしている



Q 英語の授業で、まずは言語活動に取り組ませ、出てきた課題を共有し、指導したり児童に練習させたりした後、再度言語活動に取り組ませるなど、「言語活動を通して」指導することを意識している



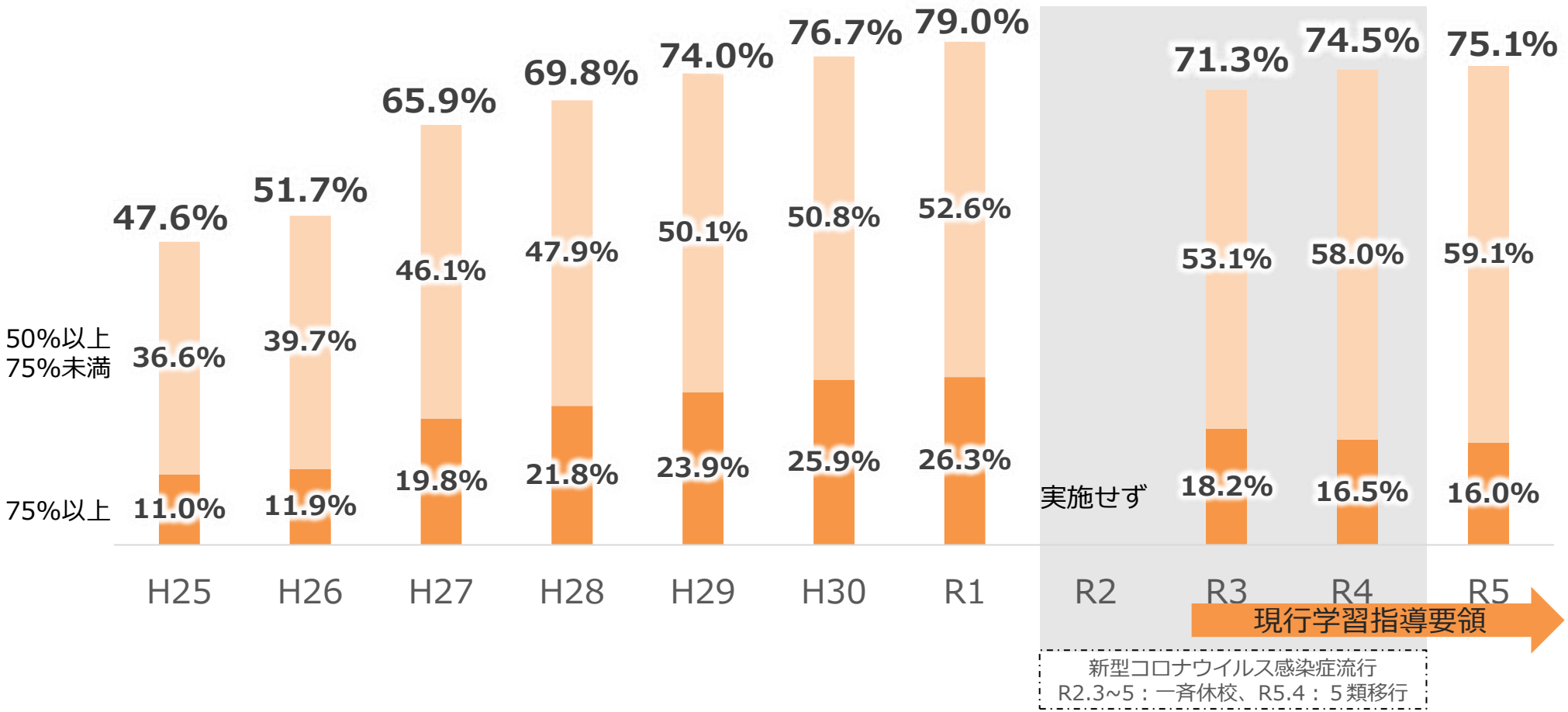
Q 単元を通じて、授業の中心が言語活動となるよう単元計画を立てている



（出典）令和４年度小学校学習指導要領実施状況調査　教師オンライン質問調査

中学校
英語教育
実施状況調査

生徒の英語による言語活動時間の割合



※調査対象は公立中学校、義務教育学校の後期課程（H28~）及び中等教育学校の前期課程（R4より特別支援学校及び特別支援学級、R6より夜間学級は対象外である旨、明示）
※R3までは担当教員ごと、R4からは学校単位で回答。H28~30は臨時的任用の者、H25~H30は非常勤講師は除くとの指示あり。
※調査基準日は12月１日現在（H25のみ12月２日現在）
※～R4は１単位時間の授業に占める割合、R5~は１年間の授業を通して占める割合を回答。
※「言語活動」に関する項目に記載の定義について、調査年度により具体例は異なっている。
※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」
※割合の合計は、小数点第２位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

（出典）英語教育実施状況調査より作成。

中学校
R5学習指導要領
実施状況調査

言語活動中心の授業に一定の進捗

暫定値

教師への調査では、言語活動の状況について**肯定的な回答の割合が高く、**
言語活動中心の授業が実施されている傾向にあるといえる

Q 英語の授業では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定し、それらを生徒が理解し、外国語で表現し伝え合うことを大切にしている

中１	93.4%
中２	92.5%
中３	88.7%

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

Q 英語の授業で、まずは言語活動に取り組ませ、出てきた課題を共有し、指導したり生徒に練習させたりした後、再度、言語活動に取り組ませるなど、「言語活動を通して」指導することを意識している

中１	83.1%
中２	87.1%
中３	73.1%

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

Q 生徒の英語による言語活動が授業の中心となるようにしている

中１	74.2%	＋2.6ポイント（前回比較）
中２	77.0%	＋9.1ポイント（前回比較）
中３	71.9%	＋5.4ポイント（前回比較）

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

Q 英語の授業では、言語材料の定着を図るため、意味のある文脈の中でコミュニケーションを通して繰り返し活用し定着が図ることができるよう指導している

中１	91.9%
中２	88.7%
中３	87.7%

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

Q 英語の授業では、文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導している

中１	94.5%	＋3.6ポイント（前回比較）
中２	97.6%	＋4.6ポイント（前回比較）
中３	96.4%	＋4.6ポイント（前回比較）

※「そうしている」、「どちらかといえばそうしている」という肯定的な回答の割合

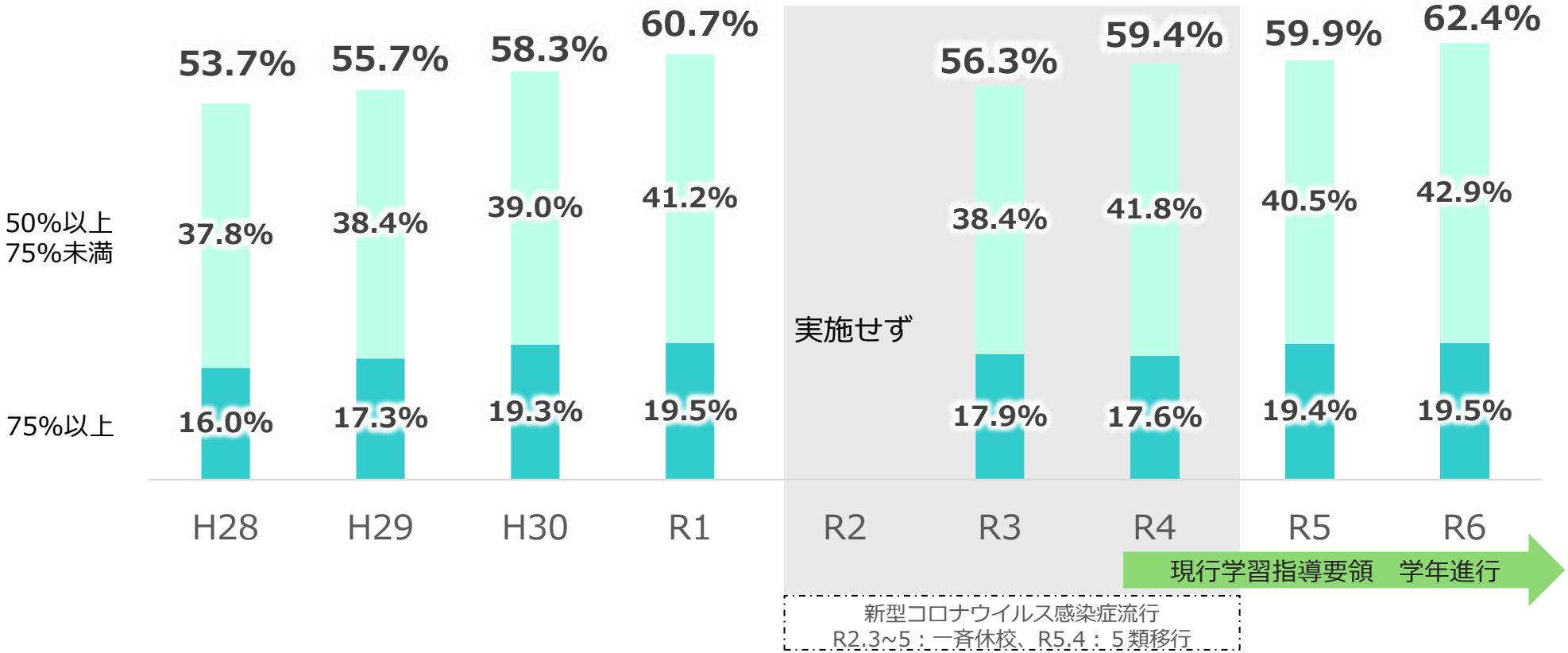
文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導していることがうかがわれる

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査 教師質問調査

高校
英語教育
実施状況調査

生徒の英語による言語活動時間の割合
（コミュニケーション英語Ⅰ、英語コミュニケーションⅠ）

【普通科＋その他の専門学科及び総合学科】



※調査対象は公立高等学校及び中等教育学校の後期課程（定時制及び通信制の課程は対象外。R4より特別支援学校は対象外である旨、明示）
※R3までは担当教員ごとに、R4からは学科単位で回答。H28~30は臨時的任用の者、非常勤講師は除くとの指示あり。
※調査基準日は12月１日現在
※R4までは１単位時間の授業に占める割合、R5からは１年間の授業を通して占める割合を回答。
※「言語活動」に関する項目に記載の定義について、調査年度により具体例は異なっている。
※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」
※現行CSの年次進行のため、R4は高１について、R5は高１・２について回答。
※割合の合計は、小数点第２位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

（出典）英語教育実施状況調査より作成。

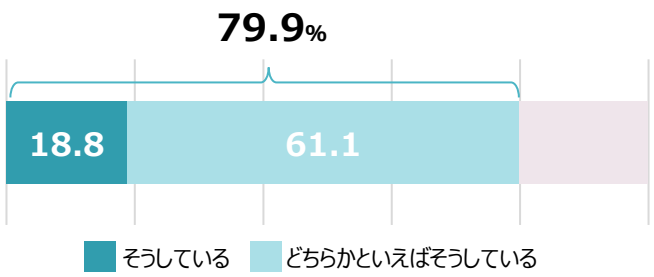
高校
R6学習指導要領
実施状況調査

言語活動中心の授業に一定の進捗
（英語コミュニケーションⅠ）

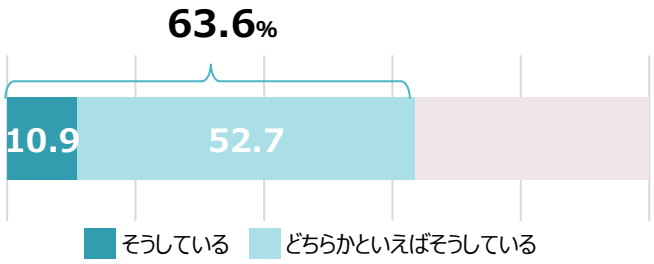
暫定値

教師への調査では、言語活動の状況について**肯定的な回答の割合が高く**、
言語活動中心の授業が実施されている傾向にあるといえる

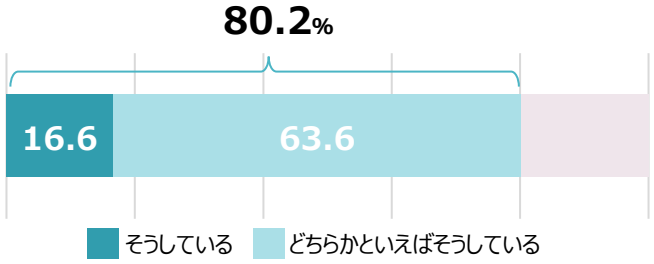
Q コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定し、それらを生徒が理解し、外国語で表現し伝え合うことを大切にしている



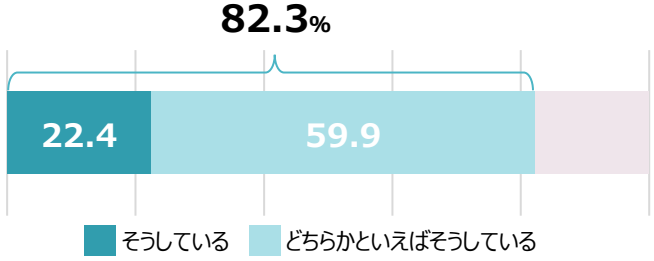
Q 生徒の英語による言語活動が授業の中心となるようにしている



Q 外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を行っている



Q 文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ用語や用法の区別などが指導の中心とならないように配慮し、実際に活用できるよう言語活動と効果的に関連付けて指導している

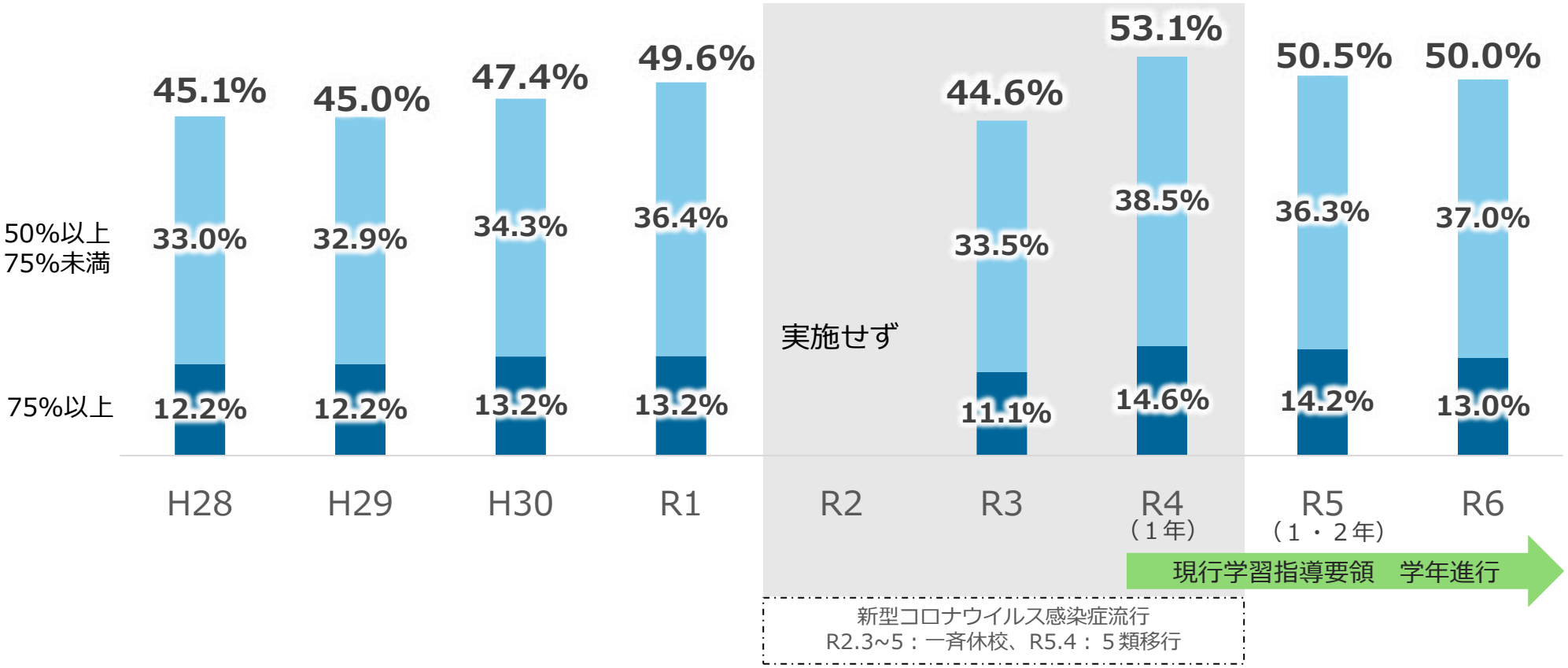


（出典）令和６年度高等学校学習指導要領実施状況調査　教師質問調査

高校
英語教育
実施状況調査

生徒の英語による言語活動時間の割合
（英語表現Ⅰ、論理･表現Ⅰ）

【普通科＋その他の専門学科及び総合学科】



※調査対象は公立高等学校及び中等教育学校の後期課程（定時制及び通信制の課程は対象外。R4より特別支援学校は対象外である旨、明示）
※R3までは担当教員ごとに、R4からは学科単位で回答。H28~30は臨時的任用の者、非常勤講師は除くとの指示あり。
※調査基準日は12月１日現在
※R4までは１単位時間の授業に占める割合、R5からは１年間の授業を通して占める割合を回答。
※「言語活動」に関する項目に記載の定義について、調査年度により具体例は異なっている。
※調査年度によって項目立てが異なる。R3までは「授業中、おおむね言語活動を行っている（75%程度以上～）」、「半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上～75%程度未満）」、R4からは「授業中、75%以上の時間、言語活動を行っている」「授業中、50%以上75%未満の時間、言語活動を行っている」
※現行CSの年次進行のため、R4は高１について、R5は高１・２について回答。
※割合の合計は、小数点第２位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

（出典）英語教育実施状況調査より作成。

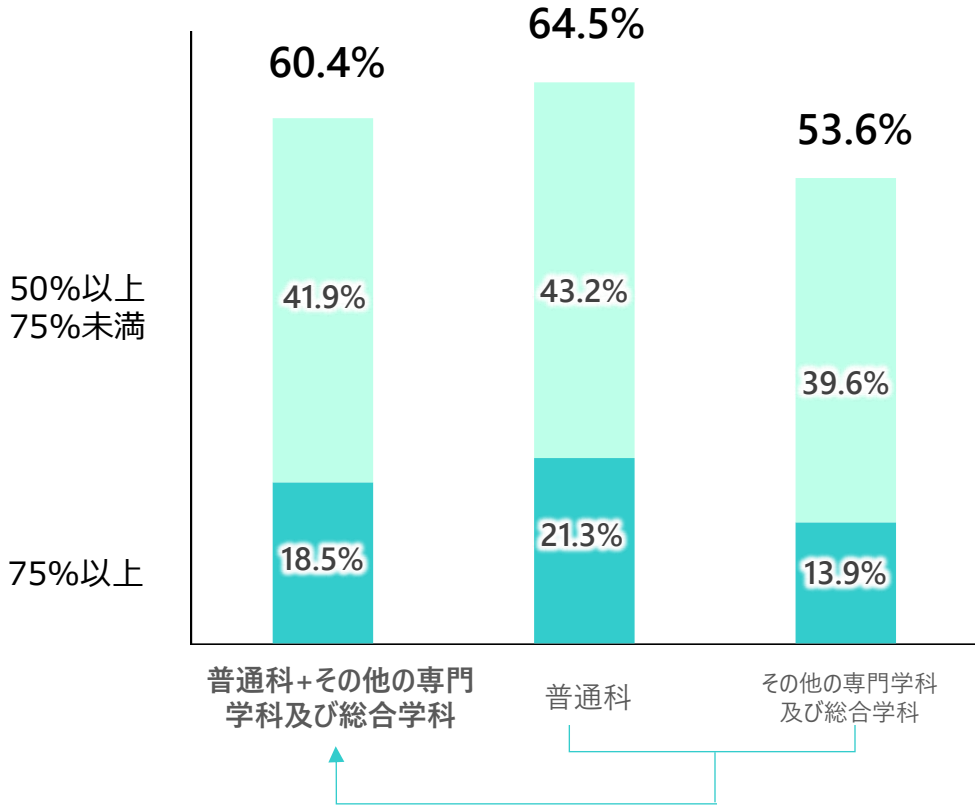
高校
R6英語教育
実施状況調査

英語コミュニケーションと比べ、**論理・表現での言語活動が少ない傾向**

英語コミュニケーション

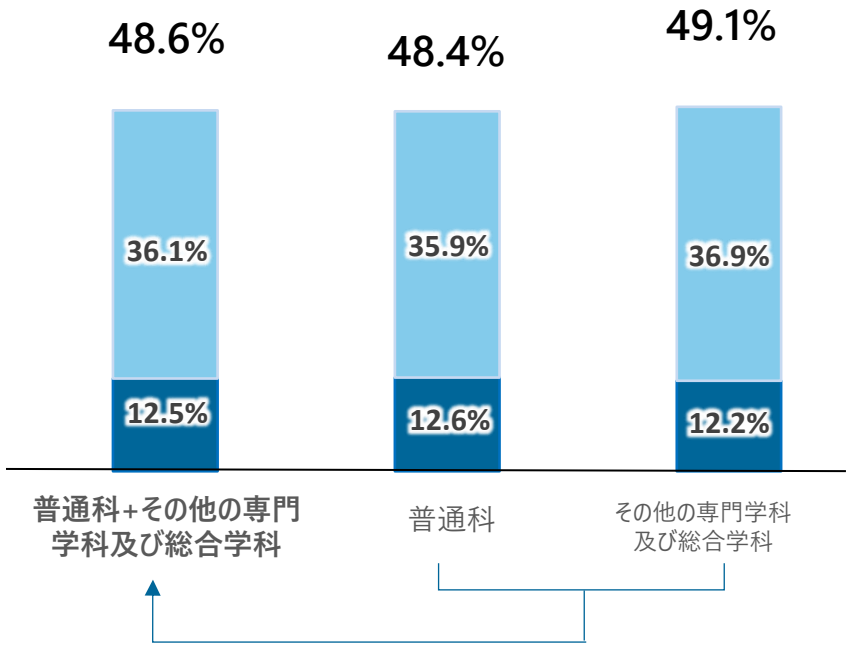
５領域を総合的に扱う科目群

（授業中の言語活動の割合）



論理・表現

ﾃﾞｨﾍﾞｰﾄやﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ等を通して
発信力を高める科目群



※ 【英語コミュニケーション】は英語コミュニケーションⅠ～Ⅲ、【論理・表現】は論理・表現Ⅰ～Ⅲの回答を合算して集計している。

（出典）令和６年度英語教育実施状況調査より作成。

3. 児童生徒の学習状況等

4技能全てで相当数の児童ができている設問が多い

技能別の各問題通過率

相当数の児童ができている問題が多く、特に「聞くこと」については、小3・小4での外国語活動から音声に慣れ親しんできた積み重ねの成果が表れている。

「聞くこと」 5問中4問

問題番号	評価の観点	通過率
2	知・技	**85.8%**
3(1)	知・技	**88.7%**
3(2)	知・技	77.7%
4	思・判・表	**89.1%**
5	思・判・表	**85.8%**

「読むこと」 10問中9問

問題番号	評価の観点	通過率
1(1)	知・技	**96.3%**
1(2)	知・技	**95.1%**
1(3)	知・技	**97.6%**
6(1)	知・技	**87.5%**
6(2)	知・技	**83.9%**
7(1)	思・判・表	**84.4%**
7(2)	知・技	**86.6%**
8(1)	知・技	**82.0%**
8(2)	知・技	**84.3%**
9	思・判・表	79.4%

「書くこと」 4問中3問

問題番号	評価の観点	通過率
10	知・技	**93.2%**
11(1)	知・技	**87.2%**
11(2)	知・技	**99.0%**
11(3)	思・判・表	79.5%

「話すこと」 5問中4問

問題番号	評価の観点	通過率
12(1)	知・技	**100.0%**
12(2)	知・技	**94.7%**
12(3)	知・技	**98.6%**
12(4)	思・判・表	**85.6%**
13	知・技 思・判・表	64.0% 64.7%

「聞くこと」の問題例

先生にインタビューをする設定の中で、尋ねるべき3つの事柄のうち、もう1人が先にどの2つの事柄を尋ねているかを把握し、そのあとに自分が尋ねるべき1つの事柄を選ぶ問題

【ケンタさんとマリア先生の会話】
ケンタ　：Hello, Maria sensei. We have some questions. OK?
マリア先生：Sure.
ケンタ　：I like sports. I like P.E.. What subject do you like?
マリア先生：I like science.
ケンタ　：Me, too. I want to go to India. Where do you want to go?
マリア先生：I want to go to Brazil.
ケンタ　：Brazil? Why?
マリア先生：I like soccer. I want to watch soccer games in Brazil.
ケンタ　：Oh, nice. Thank you.

【問題】
1　What sport do you like?
2　Do you like music?
3　What food do you like?

通過率：89.1%

- 日常生活に関する会話を聞いて、目的を達成するために足りない情報が何かを理解することができている
- 対話を聞いて、簡単な語句や基本的な表現を聞き取った上で、どのような事柄が話されているかを把握できている

（出典）令和４年度小学校学習指導要領実施状況調査

●「書くこと」（一文を書き写す問題）について、学校間で正答率にばらつきが見られる
●「読むこと」「書くこと」について、指導に難しさを感じている教師が少なからずいることがうかがえる

【書くこと】（一文を書き写す問題）

- **学校間で正答率の割合にばらつき**が見られる。
  （学校によって３割程度～９割超の開き）
- **英語の一文を書き写すことに課題のある児童は、他の領域でも困難さを抱えている**ことが推察される。
  （正答群は、準正答群及び誤答群と比べて「聞くこと」「読むこと」の問題においても正答率が高い）

  ※課題のある児童は、アルファベットの文字を視覚的に認識できていないこと、アルファベットの文字の読み方と文字が一致していないこと、アルファベットの文字を書き慣れていないこと、単語や文を書く際の表記方法が意識されていないことなどが推察される。
- **教師がどう指導すべきか十分に理解していないことが推察**される。
  （教師オンライン質問調査で、「児童が興味・関心をもちやすい」、「児童が理解しやすい」という回答の割合がいずれも低い質問は「書くこと」に集中）

  ※「書くこと」の質問項目で「児童が興味・関心をもちやすい」、「児童が理解しやすい」と回答した割合はいずれも６割程度。

【読むこと】

- **「読むこと」の指導について難しさを感じている教師が少なからずいる**ことがうかがえる。
  （教師オンライン質問調査で、「日常生活に関する身近で簡単な事柄を内容とする掲示やパンフレットなどを見て、自分が必要とする情報を得ること」（読むこと）については、「児童が興味・関心をもちやすい」と回答した割合は77.6%である一方、「児童が理解しやすい」は62.3%と、15.3%の差がある。）

（出典）令和４年度小学校学習指導要領実施状況調査

小４
R4学習指導要領
実施状況調査

- 「聞く」活動を行っている教師ほど「話す」活動も行っている傾向がある
- 「話す」活動を行っている教師ほど、授業の中心が言語活動となるように単元計画を立てている傾向がある
- 授業の中心が言語活動となるよう単元計画を立てている教師ほど、「目的意識」「相手意識」を明確に設定し、児童と共有している傾向がある

第５、６学年の外国語科につながるよう、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを意識した活動を設定してはどうか
児童が互いの考えや気持ちなどを伝え合う目的や必然性のある場面を仕組むようにしてはどうか

質問の各項目間の相関係数

	英語の授業で、児童が指導者や友達の考えや気持ちなどを聞く活動をしている	英語の授業で、児童が互いの考えや気持ちなどを伝え合ったり発表したりする活動をしている	英語の授業で、単元終末の言語活動について、「目的意識」「相手意識」を明確に設定し、児童と共有している	単元を通じて、授業の中心が言語活動となるよう単元計画を立てている
英語の授業で、児童が指導者や友達の考えや気持ちなどを聞く活動をしている	1	**0.748**	0.580	0.599
英語の授業で、児童が互いの考えや気持ちなどを伝え合ったり発表したりする活動をしている	**0.748**	1	0.595	**0.613**
英語の授業で、単元終末の言語活動について、「目的意識」「相手意識」を明確に設定し、児童と共有している	0.580	0.595	1	**0.622**
単元を通じて、授業の中心が言語活動となるよう単元計画を立てている	0.599	**0.613**	**0.622**	1

※教師オンライン質問調査の結果から相関関係を分析。特に「英語の授業で、児童が指導者や友達の考えや気持ちなどを聞く活動をしている」、「英語の授業で、児童が互いの考えや気持ちなどを伝え合ったり発表したりする活動をしている」、「英語の授業で、単元終末の言語活動について、「目的意識」「相手意識」を明確に設定し、児童と共有している」、「単元を通じて、授業の中心が言語活動となるよう単元計画を立てている」の相関を図示。
※相関係数は小数点第4位で四捨五入。
※他に比較的強い正の相関（r=0.6以上）があった項目はない。

（出典）令和４年度小学校学習指導要領実施状況調査　教師オンライン質問調査

小 中
R5学習指導要領実施状況調査

小学校での英語教育導入効果について

暫定値

生徒質問調査の結果から、肯定的な回答の割合が高く、前回改訂時と比較して20%前後増加している。

Q 英語を学習していて、小学校での英語の授業が役に立ったと思うことがある（H25→R５）

中１

肯定的な回答 60.1%

「ある」30.8%、「どちらかといえばある」29.3%

肯定的な回答 77.4%

「ある」47.0%、「どちらかといえばある」30.3%

＋17.3ポイント

中２

肯定的な回答 49.5%

「ある」21.6%、「どちらかといえばある」27.9%

肯定的な回答 70.6%

「ある」37.2%、「どちらかといえばある」33.4%

＋21.1ポイント

中３

肯定的な回答 43.3%

「ある」18.0%、「どちらかといえばある」25.3%

肯定的な回答 63.9%

「ある」31.9%、「どちらかといえばある」32.0%

＋20.6ポイント

※肯定的な回答を求める際は、小数第２位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

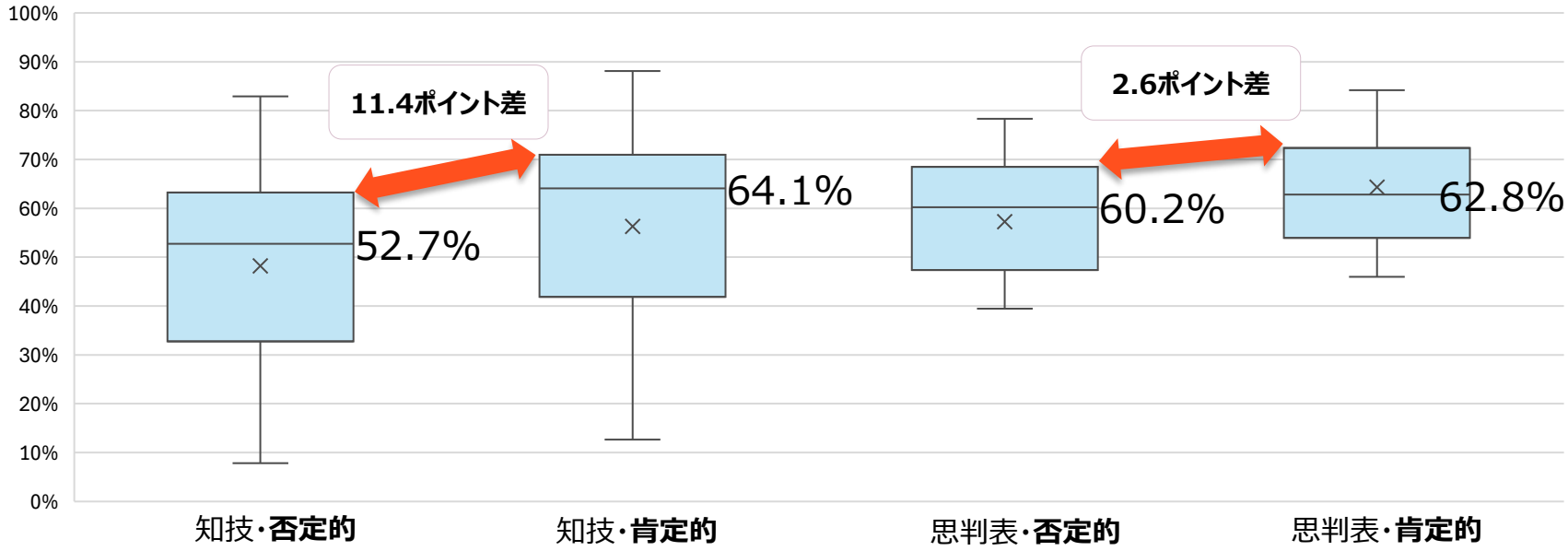
小 中
R5学習指導要領実施状況調査

小学校の時に英語が好きだった生徒は、中学校でも英語の学習が好きと回答する傾向があり、否定的に回答している生徒と比べて、通過率が高い傾向が見られる

暫定値

- **「小学校の時、あなたは、英語の学習が好きでしたか」**という質問に**「そう思っていた」と回答している生徒ほど**、どの学年においても**「英語の学習が好きだ」という質問に「そう思う」と回答する傾向**がある。
- 中１では、「そう思っていた」、「どちらかといえばそう思っていた」と**肯定的に回答している生徒と**「そう思っていなかった」、「どちらかといえばそう思っていなかった」と**否定的に回答している生徒との間**で、**「知識・技能」問題の通過率**の中央値では**11.4ポイント**、**「思考・判断・表現」問題の通過率**の中央値では**2.6ポイントの差**が見られる。この傾向は中２、中３にも同様に見られる。

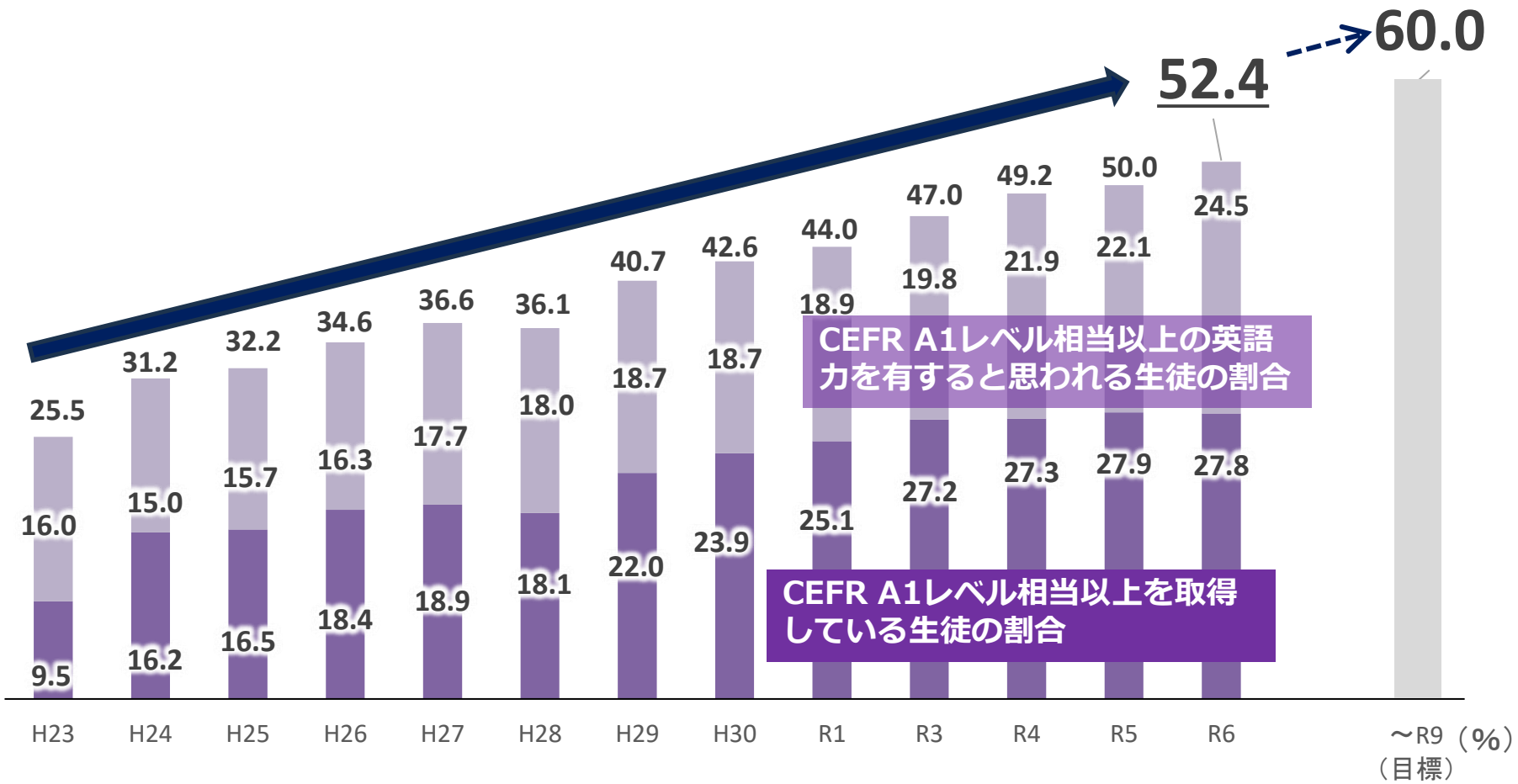
- **「小学校の時、あなたは、英語の学習が好きでしたか」**の回答群別に見た「知識・技能」問題、「思考・判断・表現」問題の通過率の平均の分布（中１）



（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査

中学校
R6英語教育
実施状況調査

CEFR A1レベル相当以上は52.4%　徐々に増加



※ 「第４期教育振興基本計画」(R5~R9)では、中学校卒業段階でCEFR A1レベル相当以上を達成した中学生の割合６割以上を目標としている。
※ CEFR A1:英検３級相当
※ 「CEFR A1レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒」とは、実際に外部検定試験の級、スコア等を取得していないが、２技能又は３技能を測る試験におけるスコア、公式な記録としては認定されない試験のスコア、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果、各教育委員会でモデル校での検証に基づいて定めた目安等により、それに相当する英語力を有していると英語担当教師が判断する生徒を指す。
※ CEFR A1レベル相当以上を有するかどうかを判断する際に活用した根拠（複数回答可）：２技能又は３技能を測る試験におけるスコア51.3%、公式な記録としては認定されない試験のスコア41.1%、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果52.2%、MEXCBTに搭載しているCBT問題の解答状況1.9%、AIツール等による英語力の判定結果1.8%、その他13.5%
※ 上のグラフでは、中学校第３学年の生徒に占める割合を算出している。
※ H23・H24の数値は「『国際共通語としての英語力向上のための５つの提言と具体的施策』に係る状況調査」に基づく。
※ 割合の合計は、小数点第２位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

（出典）令和６年度英語教育実施状況調査

中学校
学習指導要領
実施状況調査

前回（H25調査）と**同一問題の通過率が上がった問題が多い**
一方、**「書くこと」の知識・技能を問う問題は低下**

暫定値

「知能・技能」

「聞くこと」

	R5調査の問題番号	H25の通過率		R5の通過率
中1	A 1(1)	58.6%	↑	**64.0%**
中2	A 1(3)	36.4%	↑	**50.9%**
中3	A 1(2)	44.0%	↑	**51.7%**

「読むこと」

	R5調査の問題番号	H25の通過率		R5の通過率
中1	A 6(1)	60.4%	↑	**66.6%**
中2	A 6(1)	70.9%	↑	**71.8%**
中2	B 9(2)	77.8%	↑	**78.1%**
中3	A 6(1)	46.0%	↑	**54.6%**

「書くこと」

	R5調査の問題番号	H25の通過率		R5の通過率
中2	B 6(1)～(3)	25.0%※	↑	**43.7%**※
中3	A 10(1)	39.7%	↓	**36.9%**
中3	A 10(2)	55.9%	↓	**35.5%**
中3	A 10(3)	40.6%	↓	**24.1%**

※中２の問題の通過率は平均値

「聞くこと」「読むこと」の問題では通過率が軒並み上がっているが、
「書くこと」の問題では、中２は通過率が上がっているものの、中３では下がっている。

「思考・判断・表現」

※問題番号は前半出題冊子の番号

「聞くこと」

	R5調査の問題番号	H25の通過率		R5の通過率
中2	A 3	17.7%	↑	**47.5%**
中2	C 3	63.9%	↑	**75.5%**

「読むこと」

	R5調査の問題番号	H25の通過率		R5の通過率
中1	B 10	68.5%	↑	**69.3%**
中1	A 9	66.0%	↑	**67.5%**
中2	B 10	43.4%	↓	**41.6%**
中2	A 8	48.2%	↑	**49.0%**
中3	A 7	64.8%	↑	**67.4%**
中3	A 8	71.7%	↓	**70.9%**

「書くこと」

	R5調査の問題番号	H25の通過率		R5の通過率

該当問題なし

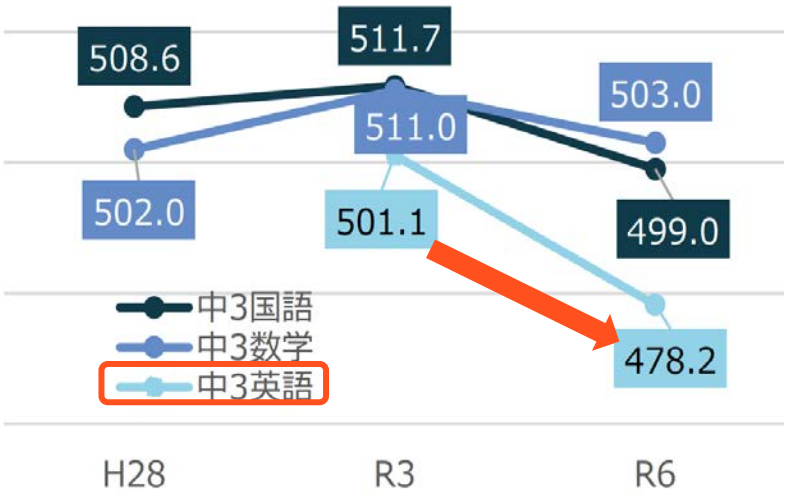
「聞くこと」の問題では、中2で同一問題が２問出題されており、２問とも通過率が上がっている。
また、「読むこと」の問題でも各学年２問ずつ出題されており、６問中４問で通過率が上がっている。

（出典）平成25年度及び令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査

中３
全国学調経年変化

R3→R6でスコアが低下
4技能のうち特に「書くこと」「話すこと」で正答率が低下

平均スコアの推移（中学校）



同一問題の比較※

聞くこと

正答率上昇 1問
正答率低下 4問
正答率が５ポイント以上低下 4問

読むこと

正答率上昇 4問
正答率低下 3問
正答率が５ポイント以上低下 3問

書くこと

正答率低下 1問
正答率が５ポイント以上低下 8問

話すこと

正答率上昇 2問
正答率が５ポイント以上低下 5問

基本的な語や文法事項等を理解して書くことができていないと考えられる

問題例
●1人称単数過去進行形の肯定文を正確に書くことができるかどうかをみる問題

	R3		R6
正答率	27.2%	〉	19.2%

8.0ポイント減少

●与えられた情報に基づいて、3人称単数現在形の否定文を正確に書くことができるかどうかをみる問題

	R3		R6
正答率	36.7%	〉	29.8%

6.9ポイント減少

全体的に無解答率が多くなっている

問題例
●与えられたテーマについて考えを整理し、まとまりのある内容を話すことができるかをみる問題（通し番号44）

- 正答率　：7.9ポイント減の13.3%
- **無解答率：11.2ポイント増の22.0%**

※R３とR６（PBT実施校）の結果のうち継続して出された問題のみを比較。
（出典）令和６年度全国学力・学習状況調査経年変化分析調査実施結果報告書（令和７年７月）p. 43～45
https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/kannren_chousa/pdf/24keinen_report.pdf

中学校
R5学習指導要領
実施状況調査

- 「聞くこと」「読むこと」において日常的な話題について必要な情報を捉えたり、大まかな内容（概要）を捉えたりすることは相当数の生徒ができている設問がある
- 一方、**「読むこと」において社会的な話題について要点を捉えることは課題がある**

暫定値

中２「聞くこと」

日常的な話題について話の概要を捉えることができるかをみる問題

授業で友達のスピーチを聞いて、全体の内容を捉えタイトルが何かを選ぶ問題

3 （放送問題）
英語の授業で、「My Favorite Things ～私のお気に入り～」を紹介するという活動をしています。あなたは、**友だちが全体として何を伝えようとしているのか**を聞き取り、スピーチのタイトルを**聞き取りシート**に記入します。今日の山野さんのスピーチを聞いて、★のところに記入するタイトルとして最も適切なものを次の１から４の中から１つ選びなさい。英文は２回繰り返して言います。(5

聞き取りシート

スピーチ発表会「My Favorite Things ～私のお気に入り～」聞き取りシート

学習日	発表者	スピーチにタイトルをつけよう	一言感想
2/3(月)	川田さん	サイクリングに熱中している理由	川田さんがサイク
2/4(火)	山野さん	★	

【スピーチの原稿】
Hi, everyone. Today I'm going to talk about my favorite things. Well, I like studying English. I'll tell you my reasons.
First, I like English songs. When I sing in English, I feel happy.
Second, I like using computers. A lot of information on the Internet is in English. I enjoy getting new information in English.
Finally, speaking English is really fun for me. When I talk with my friends in English, I learn a lot about them.
Thank you.

【選択式（CD冊子）の選択肢】
1 英語の勉強が好きな理由
2 英語の歌が好きな理由
3 コンピュータが好きな理由
4 友達との会話が好きな理由

通過率：75.5%

中２「読むこと」

社会的な話題について、まとまりのある文章を読んで、文章の要点を捉えることができるかをみる問題

ごみ問題に関する新聞記事を読んで、記事の内容に合う選択肢を選ぶ問題

9 カナダに留学をしているあなたは、新聞に中学生が投稿した記事を見つけました。この中学生が一番言いたいことは何ですか。最も適切なものを次の１から４の中から１つ選びなさい。(13

Trash Problem

Mary Smith

Trash is a big problem nowadays. On my way home, I see a lot of trash on the road. It's really sad. How can we improve this problem?

First, I think people should take their trash home. It is also a good idea to put more trash cans around the city. However, it costs money and some people still may throw trash on the road.

Second, I want more people to join volunteer activities to clean the city. I belong to a volunteer club. Last Sunday, I joined "Clean Up Day" in my city. We picked up various trash. For example, cans, papers, and bottles. After that, the streets were so clean!

Everyone can do something small for our city. Let's try together! If the city is clean, everyone can have a good life.

（注）nowadays：最近　cost：お金がかかる　throw：捨てる
belong to：所属している　various：様々な　can：缶　bottle：ビン
activity：活動　take action：行動を起こす

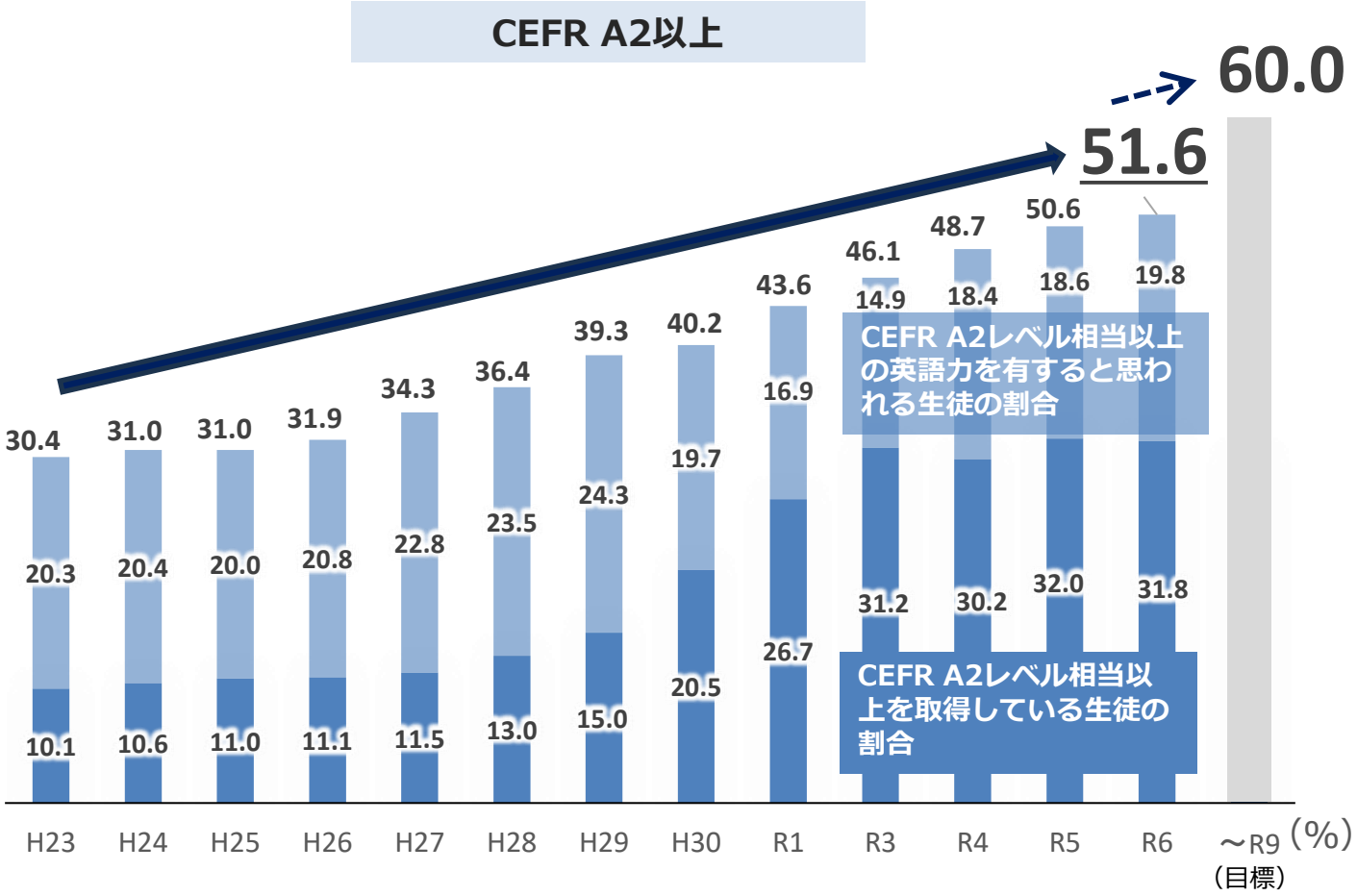
【選択肢】
1 最近ごみ問題が生じている。
2 一人一人がゴミを持ち帰るべきだ。
3 多くの人にゴミを拾う活動に参加してほしい。
4 みんなが町のために何か行動しよう。

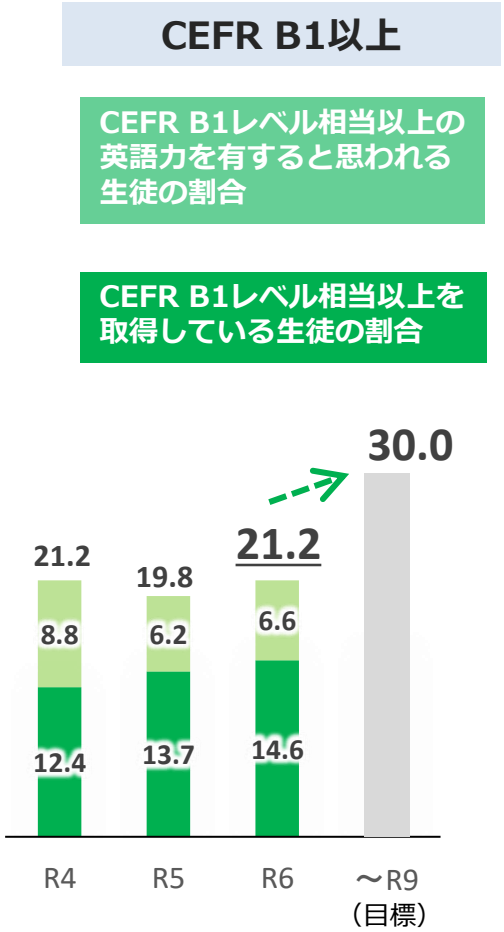
通過率：42.9%

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査

高校
R6英語教育
実施状況調査

CEFR A2レベル相当以上は51.6%
B1レベル相当以上は21.2%　徐々に増加





※ 「第４期教育振興基本計画」(R5~R9)では、高等学校卒業段階でCEFR A2レベル相当以上を達成した高校生の割合６割以上、CEFR B1レベル相当以上を達成した高校生の割合３割以上を目標としている。
※ CEFR A2:英検準２級、B1:英検２級相当
※ 「CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒」とは、実際に外部検定試験の級、スコア等を取得していないが、２技能又は３技能を測る試験におけるスコア、公式な記録としては認定されない試験のスコア、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果、各教育委員会でモデル校での検証に基づいて定めた目安等により、それに相当する英語力を有していると英語担当教師が判断する生徒を指す。
※ CEFR A2/B1レベル相当以上を有するかどうかを判断する際に活用した根拠（複数回答可）：２技能又は３技能を測る試験におけるスコア47.4%、公式な記録としては認定されない試験のスコア16.1%、CAN-DOリストに基づく自校でのパフォーマンステストの結果45.0%、MEXCBTに搭載しているCBT問題の解答状況0.3%、AIツール等による英語力の判定結果1.2%、その他21.6%
※ 上のグラフでは、高等学校第３学年の生徒に占める割合を算出している。
※ H23・H24の数値は「『国際共通語としての英語力向上のための５つの提言と具体的施策』に係る状況調査」に基づく。

（出典）令和６年度英語教育実施状況調査

「書くこと」に課題がある

暫定値

問題概要

会話文の中で空欄に当てはまるべき**内容を考え、与えられた動詞を活用して適切な文法事項を用いて表現する**問題

通過率

該当する3問のうち、
最も高い問題でも約3割程度

これまで**学習した文法事項のレパートリーから、伝えたい内容に最適なものを用いて英文を正確に書く**ことに課題

問題概要

日常的な話題について、目的や場面、状況に応じて、**自分の意見とその理由に具体例や説明を含めて書く**問題

通過率

問題α9 **20.1%**

日常的な話題について、**基本的な語句や文を用いて、自身の考えを読み手の状況に合わせて書く**ことに課題
（理由が場面や状況に即して論理的に適切な内容となっていない）

問題概要

オンライン・ディスカッションにおいて、**複数の参加者の投稿を読んで、与えられた立場に立って、適切な理由を書いて伝える**問題

通過率

問題α10 **47.8%**
問題β10 **48.9%**

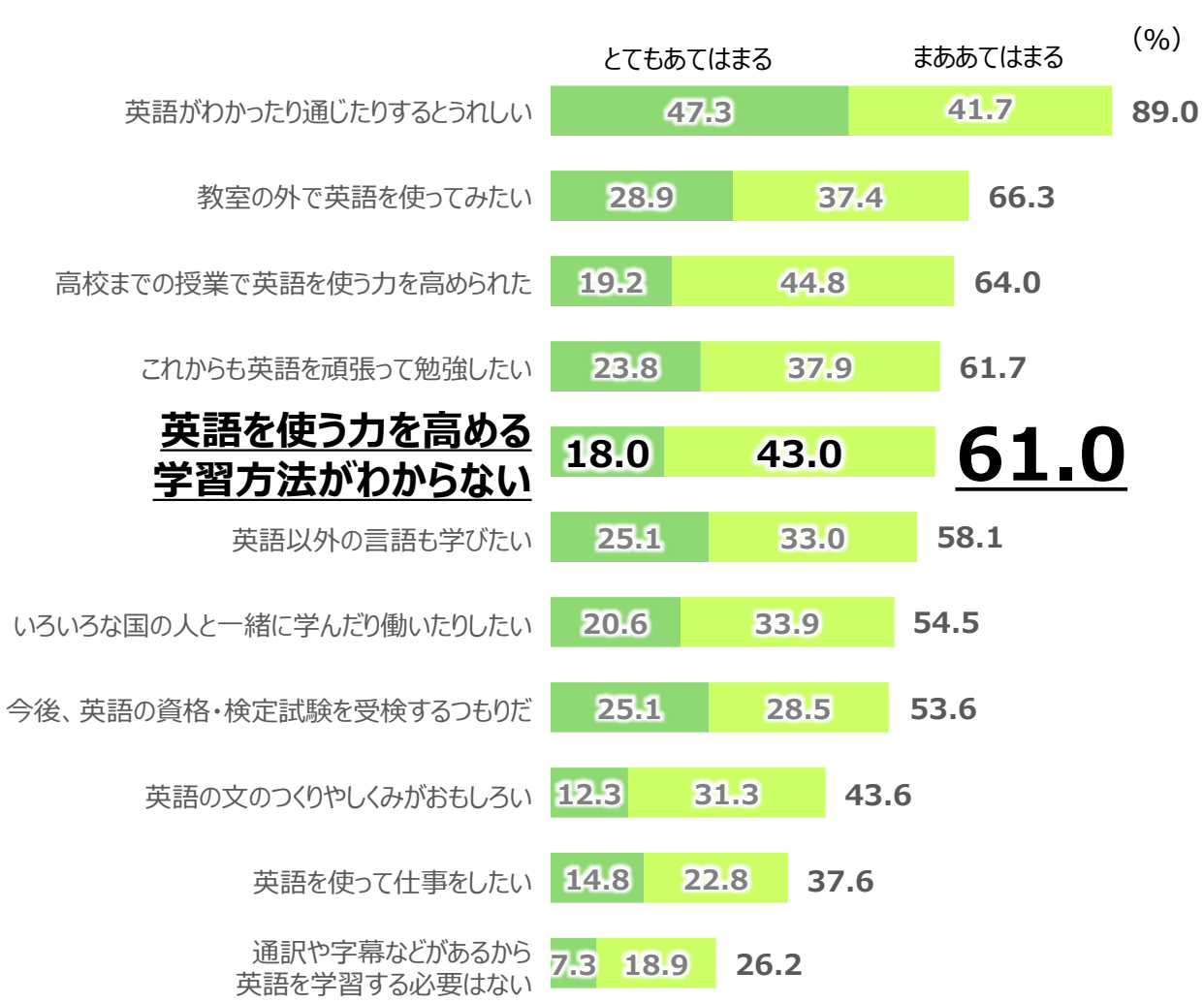
※ α・β共通問題。αとβは調査を受けた生徒が異なる。

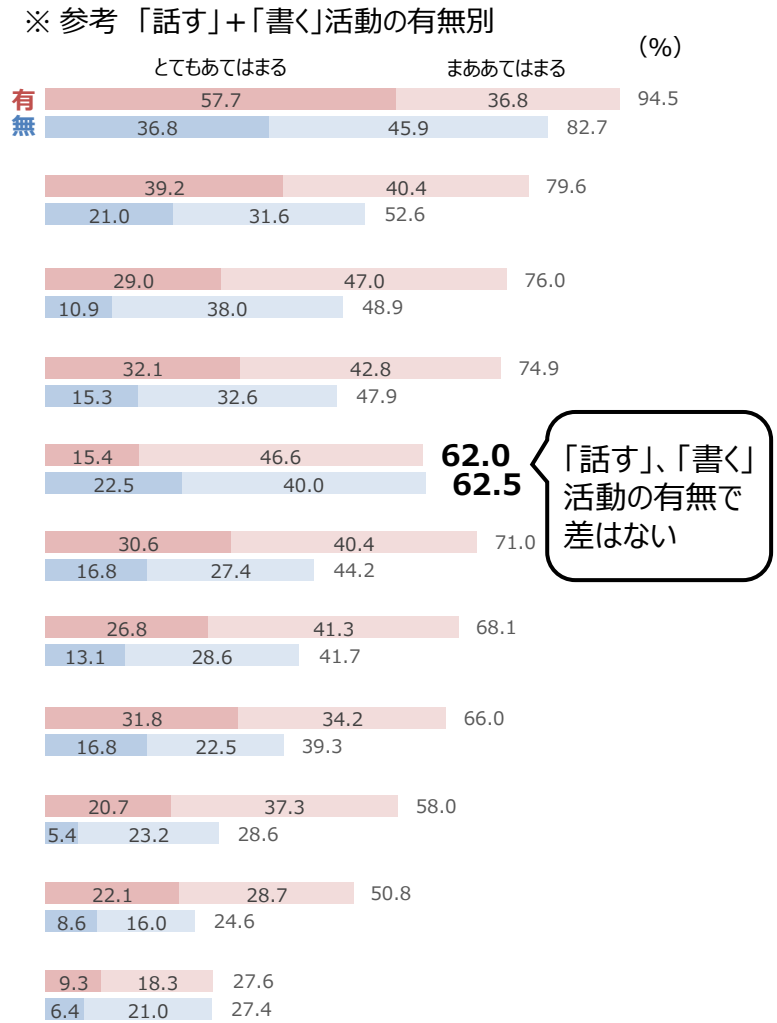
社会的な話題について**読んだことをもとに、自分の意見を具体例等とともに書く**ことに課題

（出典）令和6年度高等学校学習指導要領実施状況調査

英語を使う力を高める学習方法がわからない高3生が6割

英語や英語学習に関することについて教えてください





※高３生に対して2021年3～4月に実施。
※「英語がわかったり通じたりするとうれしい」「教室の外で英語を使ってみたい」の項目は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。それ以外の項目は、「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。
※授業で「話す」「書く」活動についてどちらも「していた（よく+ときどき）」と回答した群（421名）を「話す」+「書く」活動をしていた群、どちらも「していなかった（あまり+まったく）」と回答した（405名）群を「話す」+「書く」活動をしていなかった群としている。

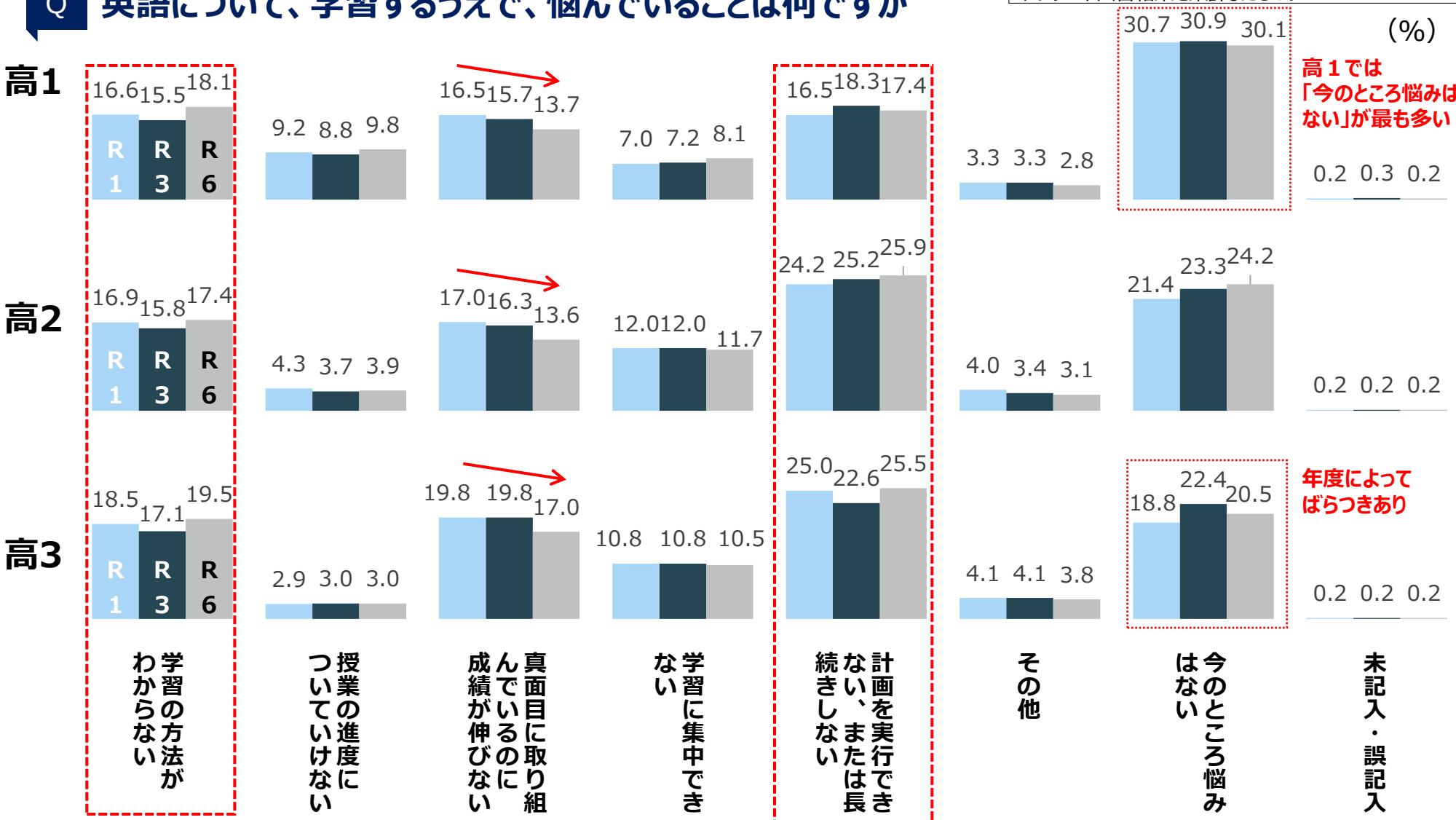
（出典）ベネッセ教育総合研究所「高３生の英語学習に関する調査〈2015-2021継続調査〉」

高校
R7英語教育に関する調査研究

●高２・３では「計画を実行できない、または長続きしない」 に悩んでいる割合が最多
●どの学年も「学習の方法がわからない」割合が一定存在

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

Q 英語について、学習するうえで、悩んでいることは何ですか



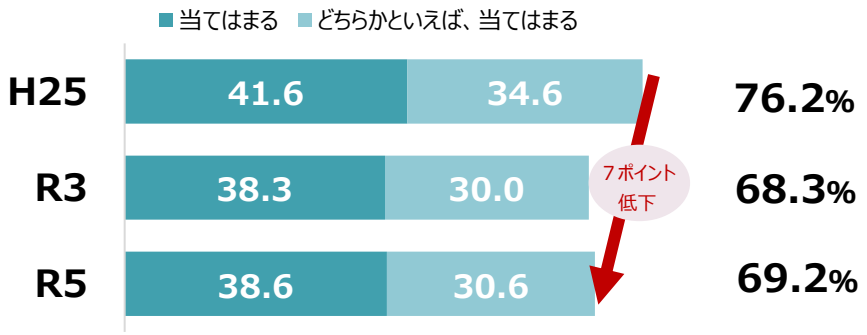
（出典）令和7年度英語教育に関する調査研究（英語力に関する調査分析）

4. 児童生徒の英語学習に対する意識等

小学校
R4学習指導要領
実施状況調査

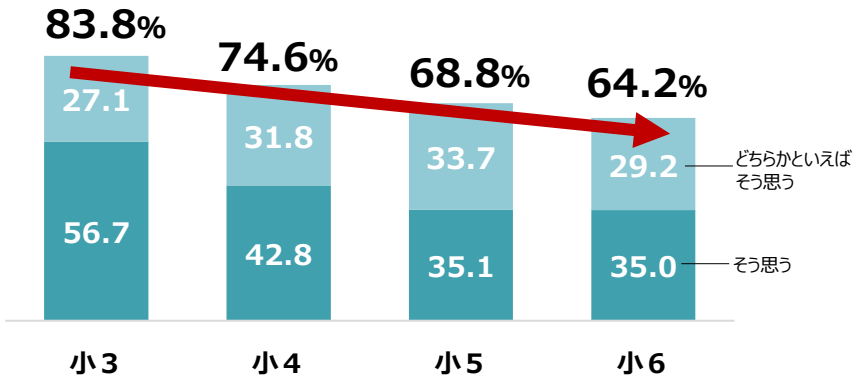
- 英語の学習が「好き」の割合は高いが、H25→R5で７ポイント低下（学年が上がるほど低い傾向）
- 英語を学ぶ意欲は小５にかけて低下するが小６で上昇（全学年で８割以上）
- 授業の理解度への肯定的回答は全学年で６割超（小６がもっとも高い）

英語の学習（勉強）は好きですか（小６経年）



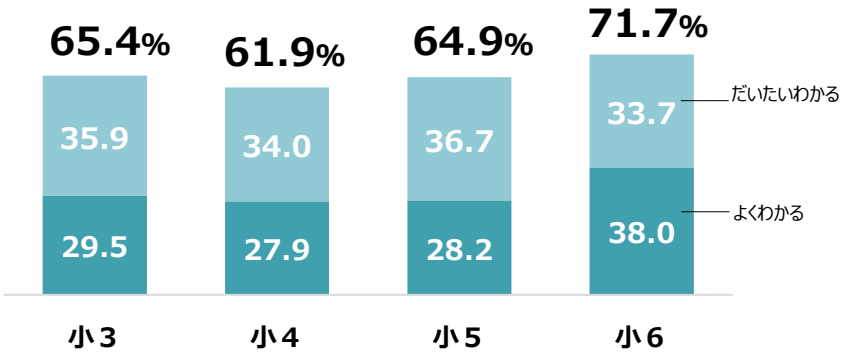
※H25は「英語の学習は好きですか」、R3、R5は「英語の勉強は好きですか」とたずねている。
（出典）全国学力・学習状況調査　悉皆調査

英語の学習が好きだ（学年別）



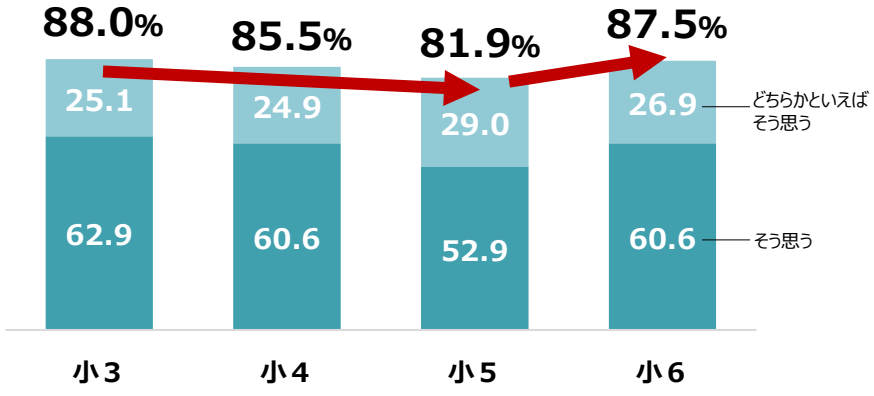
※小３～小５は、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の４件法、小６は、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思うわない」「わからない」の５件法でたずねている。
（出典）令和４年度小学校学習指導要領実施状況調査　児童質問紙調査

英語の授業がどの程度わかりますか



（出典）令和４年度小学校学習指導要領実施状況調査　児童質問紙調査

今後もっと、英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり、英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり、発表できるようになりたい



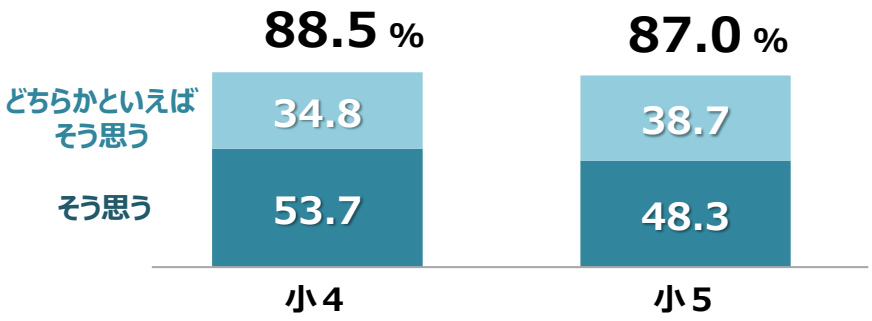
（出典）令和４年度小学校学習指導要領実施状況調査　児童質問紙調査

小３～５
R4学習指導要領
実施状況調査

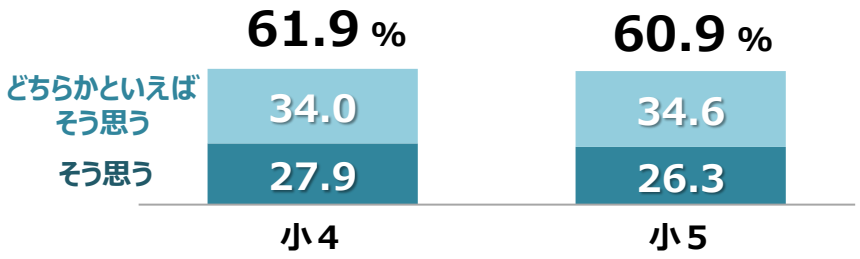
●授業で、「先生や友達が英語で考えや気持ちなどを話すのを聞こうとしている」は９割弱
「自分のことについて考えや気持ちなどを英語で伝え合ったり発表し合ったりしている」は６割程度
●英語を学ぶ意欲に対する肯定的な回答は８割以上

英語の授業での意欲

- 英語の授業で、先生や友達が英語で考えや気持ちなどを話すのを聞こうとしている

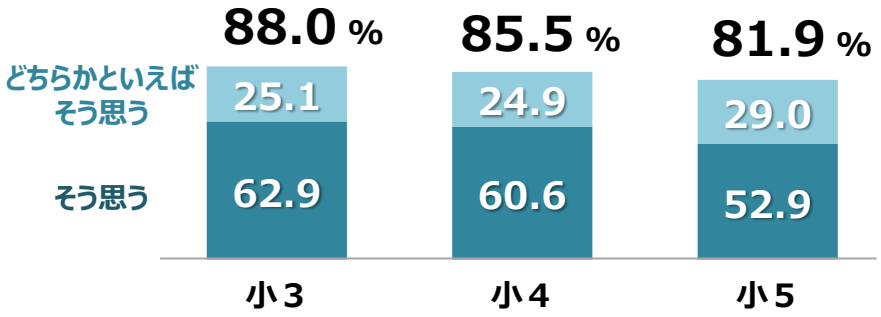


- 英語の授業で、自分のことについて考えや気持ちなどを英語で伝え合ったり発表したりしようとしている

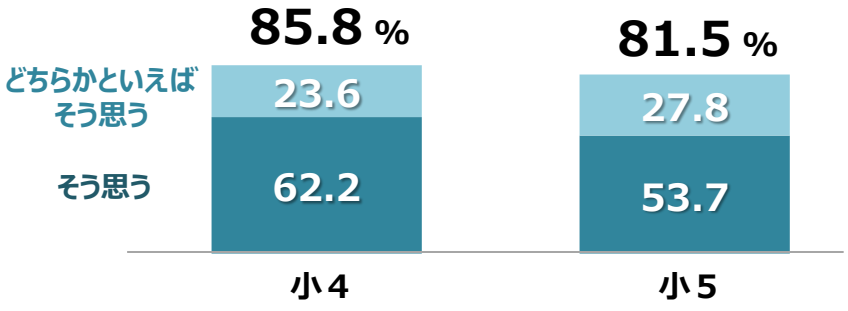


英語を学ぶ意欲

- 今後もっと、英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり、英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり発表できるようになりたい



- 今後もっと、英語を読んだり、英語で自分の考えや気持ちなどを書いたりできるようになりたい



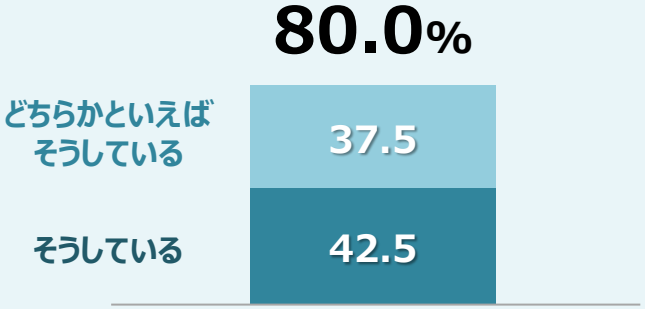
※グラフの数値は各選択肢を選んだ児童の割合（%）（重み付き）

（出典）令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査　児童質問紙調査

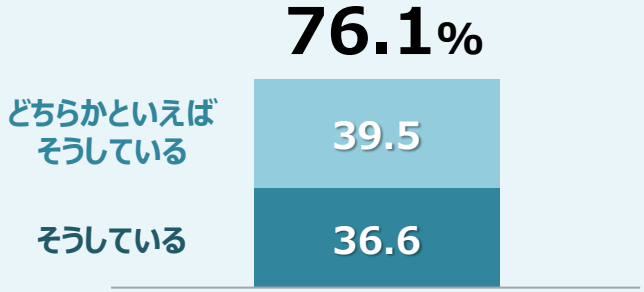
小６
R4学習指導要領
実施状況調査

英語の授業での意欲を問う質問に対して、肯定的な回答をした児童は7～8割
英語学習がふだんの生活や社会に出て役立つと考える児童が9割

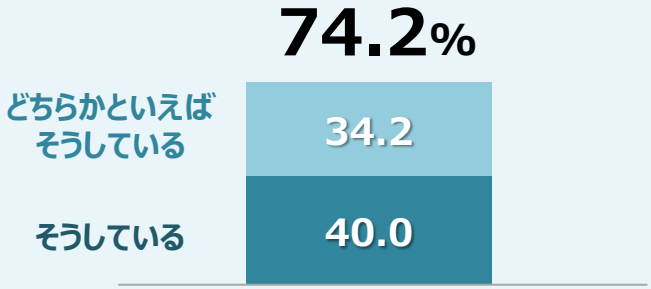
● 英語の授業で、ほかの人のよいところを取り入れて学習を進めている



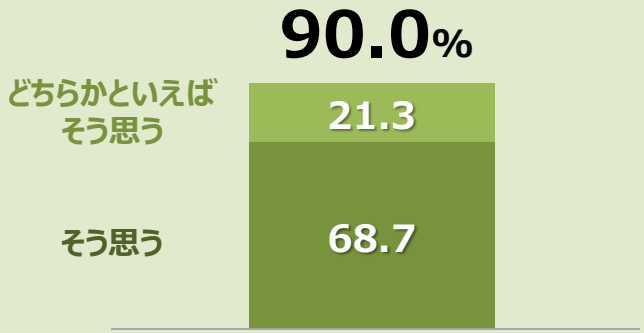
● 英語の授業で、もっとよくできるように繰り返し活動や練習に取り組もうとしている



● 英語の授業で、さまざまな国や地域の文化などに興味をもって知ろうとしている



● 英語の学習をすれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ



※グラフの数値は各選択肢を選んだ児童の割合（%）（重み付き）

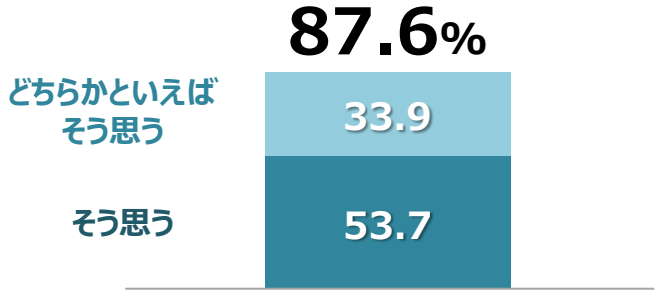
（出典）令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査　児童質問紙調査

小６
R4学習指導要領
実施状況調査

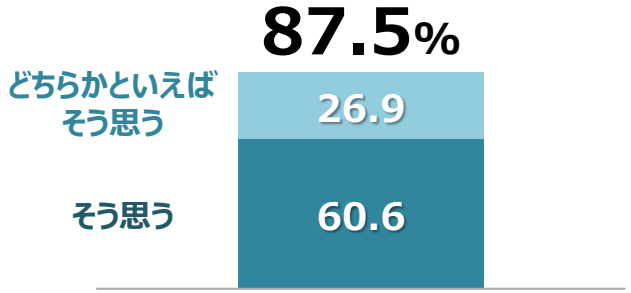
「聞く」「話す」「読む」「書く」のいずれも、今後必要だと考える児童が多く、もっとできるようになりたいという意欲も高い傾向にある

「聞く」「話す（伝え合ったり発表したりすること）」

- 英語を使って、考えや気持ちなどを聞いたり伝え合ったり発表したりすることは、今後必要だ

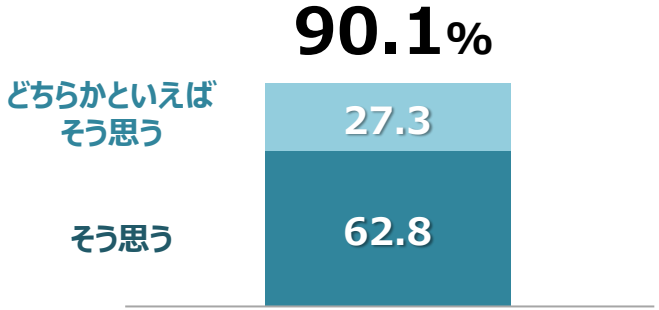


- 今後もっと、英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり、英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり発表できるようになりたい

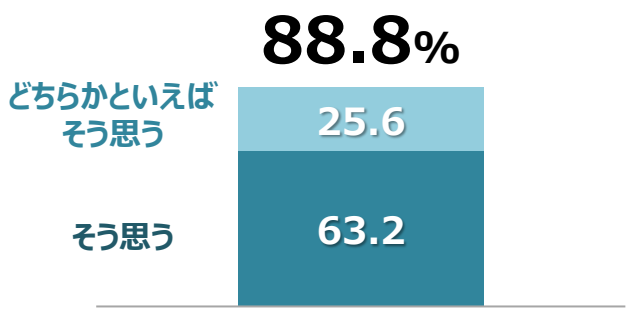


「読む」「書く」

- 英語を読んだり、英語で自分の考えや気持ちなどを書いたりすることは、今後必要だ



- 今後もっと、英語を読んだり、英語で自分の考えや気持ちなどを書いたりできるようになりたい



※グラフの数値は各選択肢を選んだ児童の割合（%）（重み付き）

（出典）令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査　児童質問紙調査

小４
R4学習指導要領
実施状況調査

●英語の学習が好きである児童ほど、授業を楽しいと感じている傾向がある
●英語の学習が好きである児童ほど、そして、授業を楽しいと感じている児童ほど、先生や友達が話す英語を「聞く」ことが好きな傾向がある

児童の実態に応じた話題を設定し、児童が英語を聞くことが楽しい！と思えるような活動をすることが大事

質問の各項目間の相関係数

	英語の学習が好きだ	英語の授業は楽しい	英語の授業で、先生や友達が英語で考えや気持ちなどを話すのを聞くのが好きだ
英語の学習が好きだ	1	0.809	0.668
英語の授業は楽しい	0.809	1	0.643
英語の授業で、先生や友達が英語で考えや気持ちなどを話すのを聞くのが好きだ	0.668	0.643	1

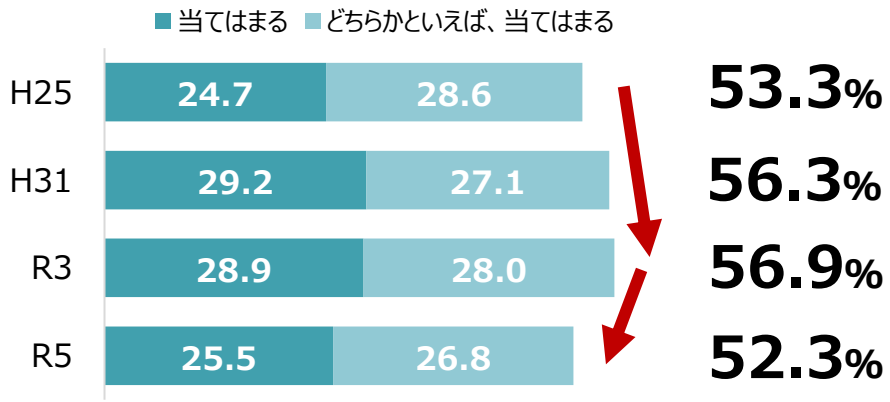
※児童質問紙調査の結果から相関関係を分析。特に「英語の学習が好きだ」、「英語の授業は楽しい」、「英語の授業で、先生や友達が英語で考えや気持ちなどを話すのを聞くのが好きだ」の相関を図示
※相関係数は小数点第4位で四捨五入。
※他に比較的強い正の相関（r=0.6以上）があった項目は下記。
「英語の授業で、自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合ったり、発表したりするのが好きだ」×「英語の授業で、先生や友達が英語で考えや気持ちなどを話すのを聞くのが好きだ」（r＝0.617）
「英語の授業で、自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合ったり、発表したりするのが好きだ」×「英語の授業で、自分のことについて考えや気持ちなどを英語で伝え合ったり発表したりしようとしている」（r＝0.732）
「今後もっと、英語を聞いて相手の言いたいことがわかったり、英語で自分の考えや気持ちなどを伝え合ったり発表できるようになりたい」×「今後もっと、英語を読んだり、英語で自分の考えや気持ちなどを書いたりできるようになりたい」（r＝0.682）

（出典）令和４年度小学校学習指導要領実施状況調査　児童質問紙調査

中学校

●英語の学習が「好き」はH25→R3で若干上昇、R3→R5で若干低下
●授業の理解度はH31→R5で大きな変化はない

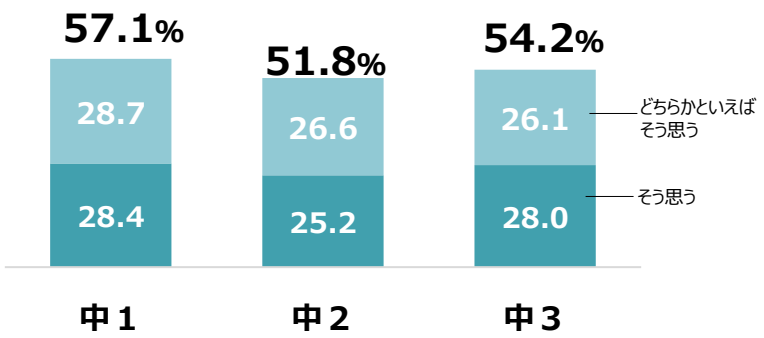
英語の学習（勉強）は好きですか（中３経年）



※H25は「英語の学習は好きですか」、H31以降は「英語の勉強は好きですか」とたずねている。
（出典）全国学力・学習状況調査　悉皆調査

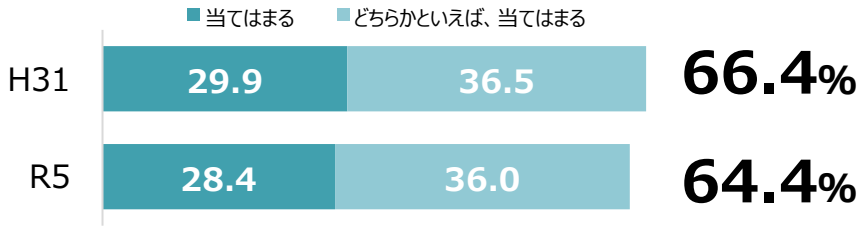
英語の学習が好きだ（学年別）

暫定値



※各回答の数値は、小数第１位までの概数で表示。
肯定的な回答を求める際は、小数第２位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。
（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

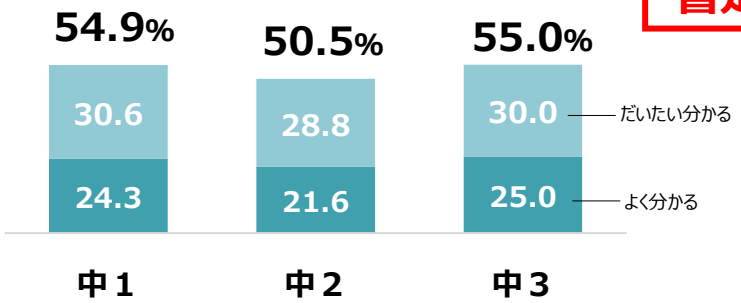
英語の授業の内容はよく分かりますか（中３経年）



（出典）全国学力・学習状況調査　悉皆調査

英語の授業がどの程度わかりますか（学年別）

暫定値



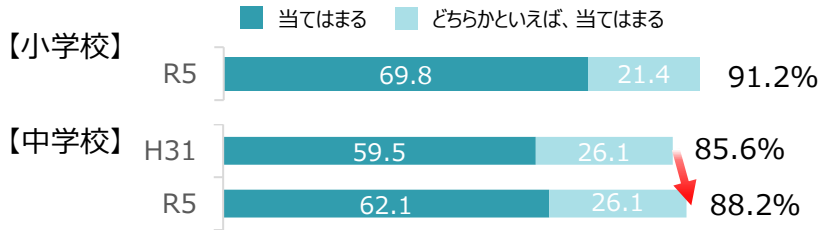
※各回答の数値は、小数第１位までの概数で表示。
肯定的な回答を求める際は、小数第２位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。
（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

小6 中3
全国学調 悉皆調査

英語学習は大切・役に立つと考える児童生徒は多く増加傾向だが、将来的な活用意欲や日常生活での活用機会は比較的低く中学校では減少傾向

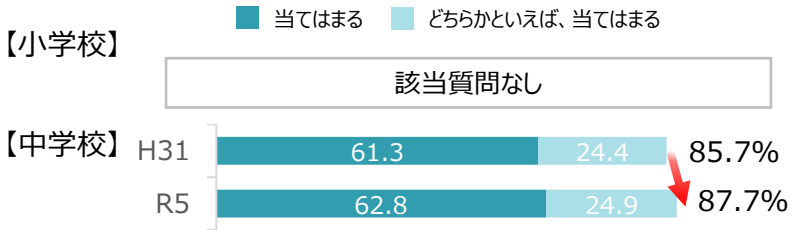
英語学習の重要度に関する意識

- 英語の勉強は大切だと思いますか



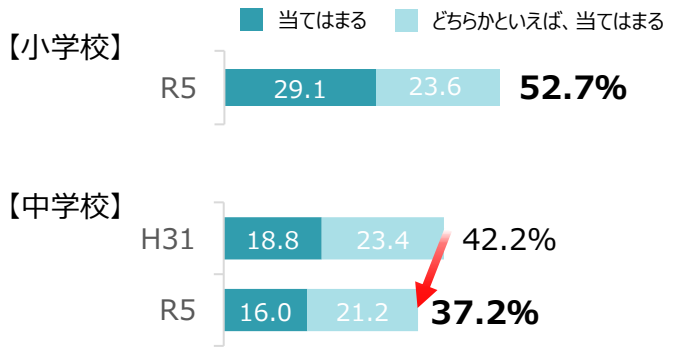
※小学校については、R5にて新出の質問のため、過去との比較はなし。

- 英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか



将来的な英語活用に対する意識

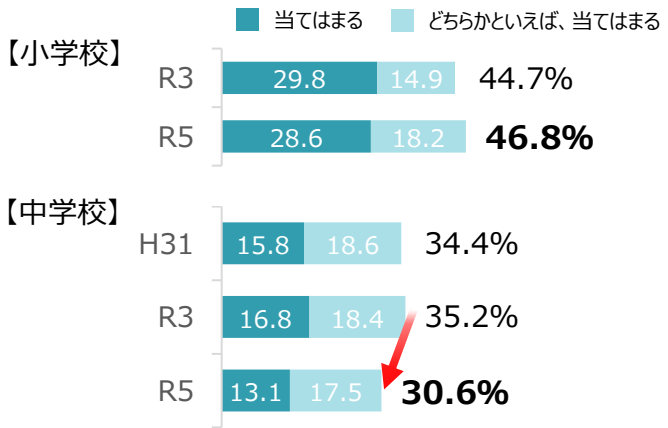
- 将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思いますか



※小学校については、R5にて新出の質問のため、過去との比較はなし。

日常生活での英語活用機会

- これまで、学校の授業やそのための学習以外で、日常的に英語を使う機会が十分にありましたか（地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、オンラインで他者と英語で交流する、英会話教室に通うなど）



※小学校では、次の質問文となっている。「これまで、学校の授業以外で、英語を使う機会がありましたか（地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビやホームページを見る、PC・タブレットなどのICT機器を利用して他者と英語で交流する、英会話教室に通うなど）」

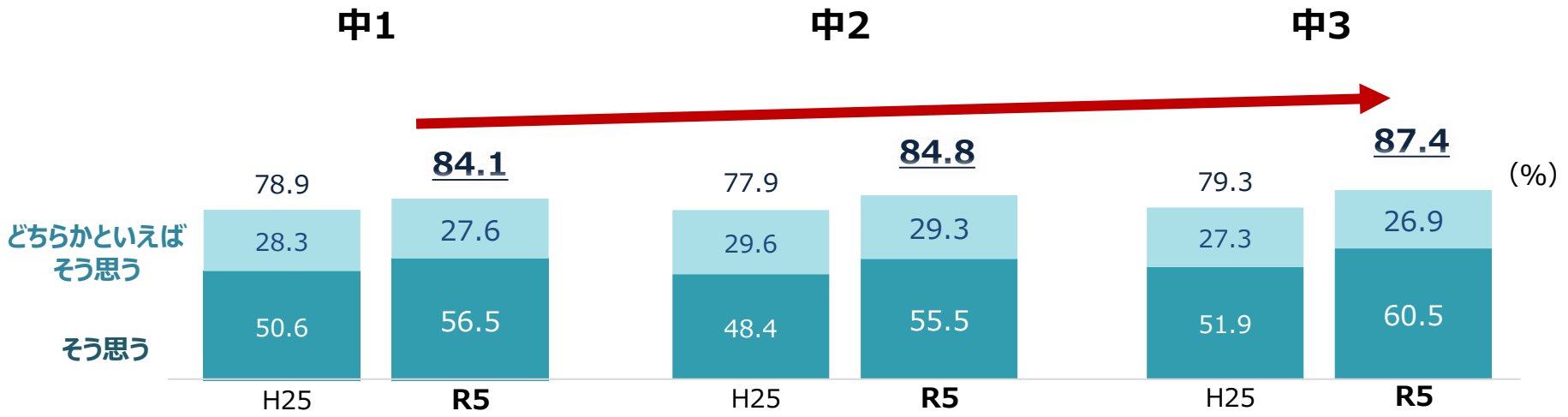
（出典）全国学力・学習状況調査　悉皆調査

中学校
R5学習指導要領
実施状況調査

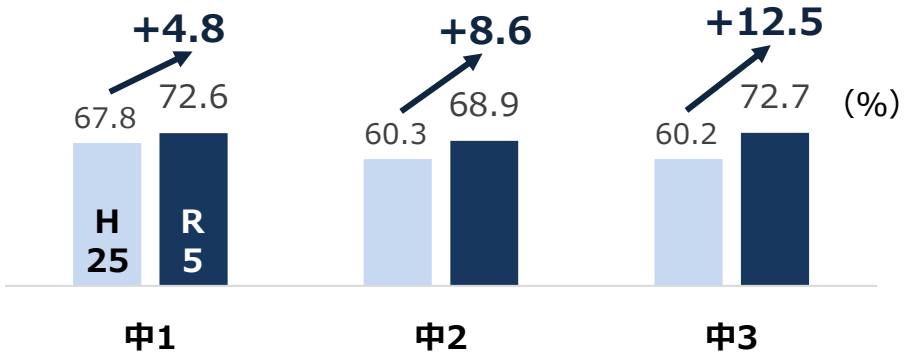
●英語を学ぶ意欲はH25→R5で上昇（全学年で８割以上、学年が上がるほど高い傾向）
●「英語で自分の考えや気持ちを伝えることができるよう、英語を勉強している」、「授業では積極的に英語を使うようにしている」に肯定的な回答は、全学年で上昇

暫定値

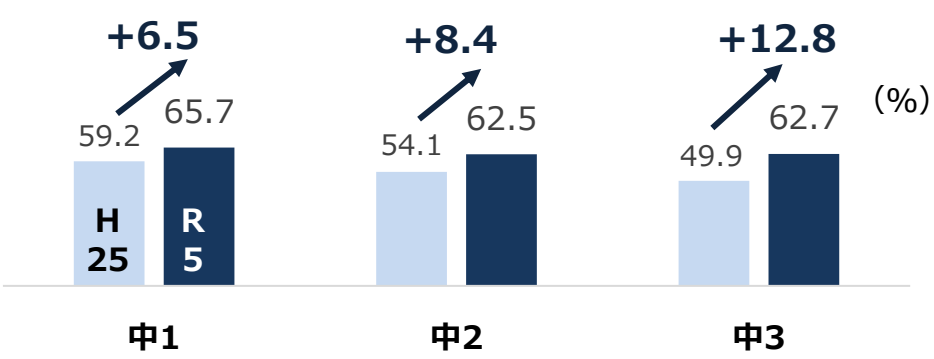
英語の学習をすれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ



英語で自分の考えや気持ちを伝えることができるよう、英語を勉強している



授業では積極的に英語を使うようにしている



※「英語で自分の考えや気持ちを伝えることができるよう、英語を勉強している」、「授業では積極的に英語を使うようにしている」は、「そうしている」と「どちらかといえばそうしている」の割合を合計して算出。
※各回答の数値は、小数第１位までの概数で表示。肯定的な回答を求める際は、小数第２位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。

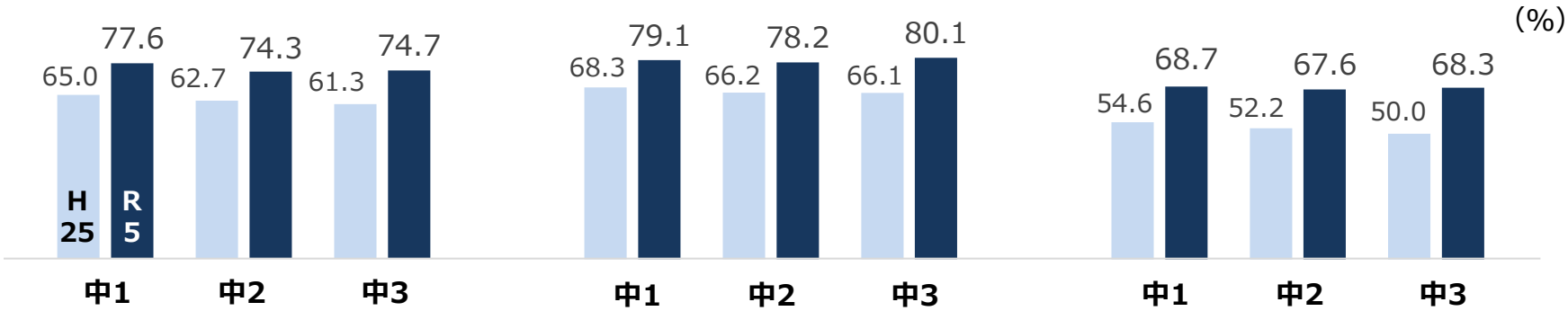
（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

中学校
R5学習指導要領
実施状況調査

暫定値

●言語活動に対する意欲はH25→R5で向上（全学年において、10ポイント以上上昇）
●特に、「聞き取った内容をもとに英語で自分の意見を書く」「読んだ内容について英語を話す」などの活動は、前回調査を18ポイント以上上回る

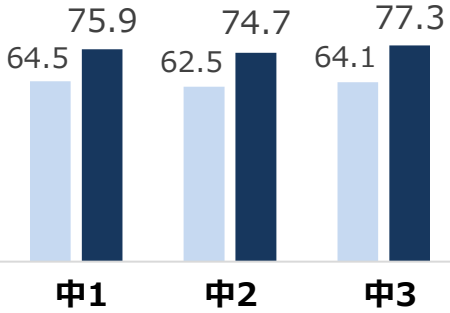
言語活動に対する意欲に関する質問



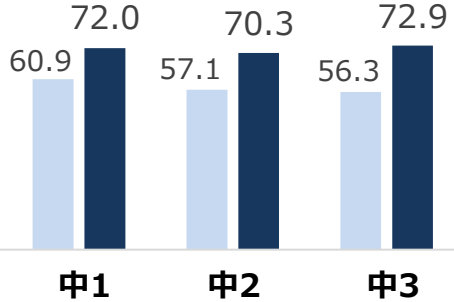
強勢、イントネーション、区切りなどに気を付けて英語を正しく聞き取れるようになる活動

内容にまとまりのある英語を聞いて、話し手が伝えたいことや必要な情報を聞き取る活動

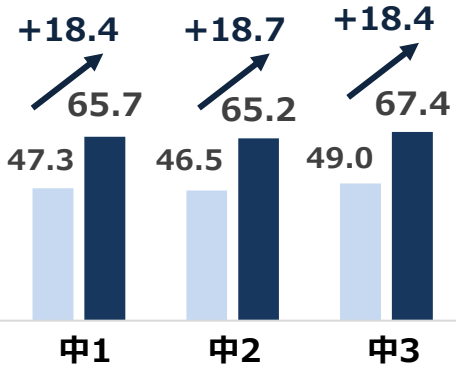
スピーチなど自分の考えや気持ちを英語で話す活動



内容にまとまりのある英語を読んで、書き手が伝えたいことや必要な情報を読み取る活動



自分の考えや気持ちを伝えるために英語でまとまりのある文章を書く活動



「聞き取った内容をもとに英語で自分の意見を書く」「読んだ内容について英語を話す」などの活動

※肯定的な回答の割合は、「そうしている」と「どちらかといえばそうしている」の割合を合計して算出。
※各回答の数値は、小数第１位までの概数で表示。肯定的な回答を求める際は、小数第２位以下も含めて計算をするため、それぞれの数値は一致しない場合がある。

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

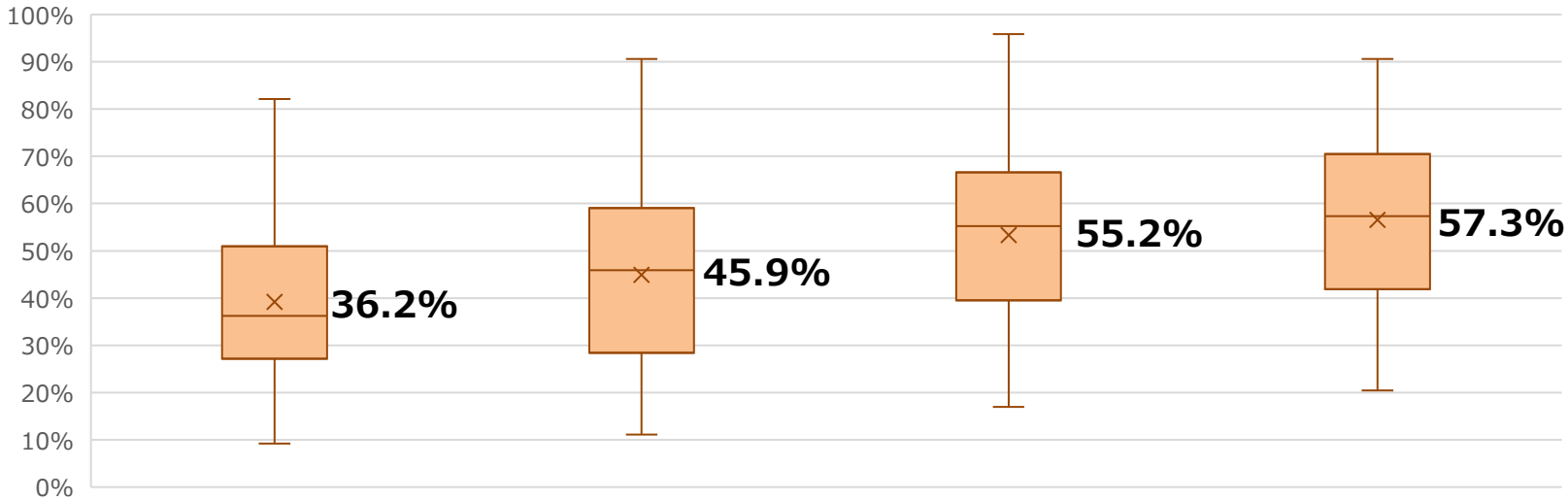
中３
R5学習指導要領
実施状況調査

英語学習に対して目的意識を持っている生徒ほど通過率の平均が高い傾向

暫定値

- 「どの程度まで英語を身に付けたいと思っていますか」の質問に対して、(1)「**高校入試に対応できる力を付けたい**」や(2)「**海外旅行などをするときに、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい**」**と回答する生徒のほうが通過率の平均が高い傾向。**
- 2項目の比較では、(2)「**海外旅行などをするときに、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい**」**を目的としている生徒の方が通過率の平均が高い**傾向。

回答別、通過率の平均の分布



(1)「高校入試に対応できる力を付けたい」	当てはまらない	当てはまる	当てはまらない	当てはまる
(2)「海外旅行などをするときに、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい」	当てはまらない	当てはまらない	当てはまる	当てはまる

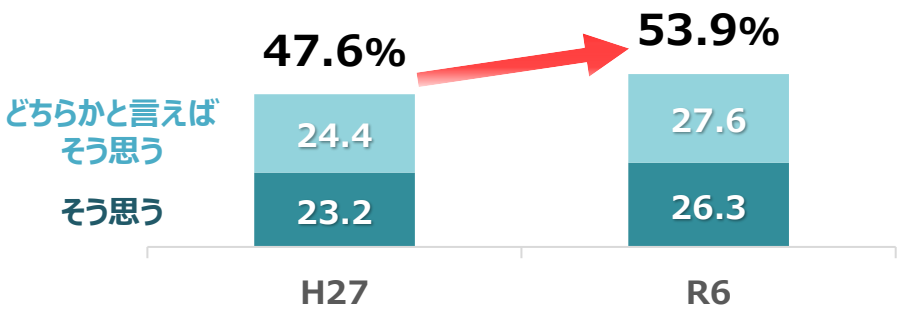
※「当てはまらない」は、「『当てはまる』と選択していない」、「当てはまる」は、「『当てはまる』と選択した」ことを指す。
※括弧内の数字は質問調査の選択肢番号とは異なる
（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査

英語学習に対する意識、授業の理解度ともに上昇傾向

暫定値

英語学習に対する意識

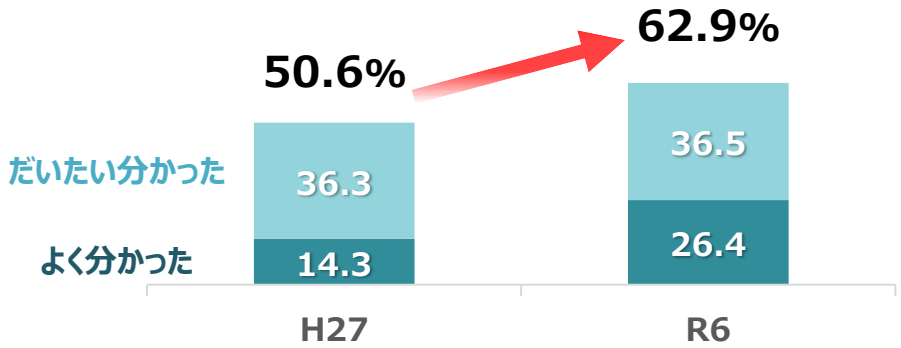
● 英語の学習が好きだ



「英語の学習が好きだ」という質問に対する肯定的な回答は、
前回調査から**6.3ポイント上昇**

授業の理解度

● 「英語コミュニケーションⅠ」の授業がどの程度分かりましたか
※H27は「コミュニケーション英語Ⅰ」



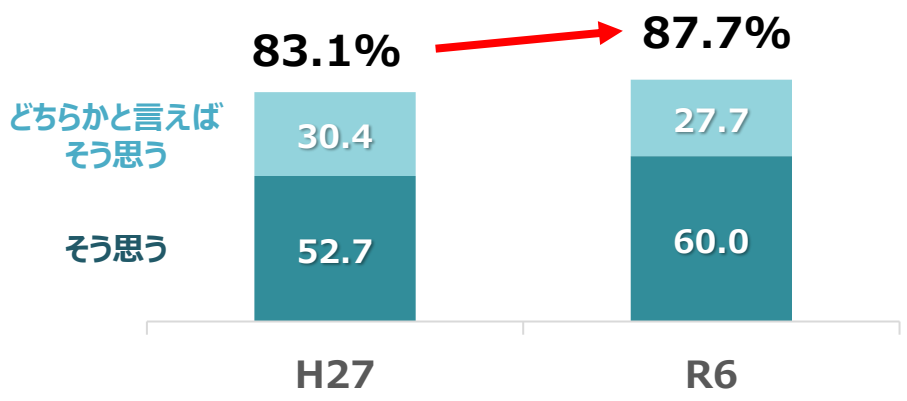
「『英語コミュニケーションⅠ』の授業がどの程度分かりましたか」という質問に対する肯定的な回答は、
前回調査から**12.3ポイント上昇**

（出典）令和6年度高等学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

英語の学習は大切、役立つと考える生徒が増加傾向

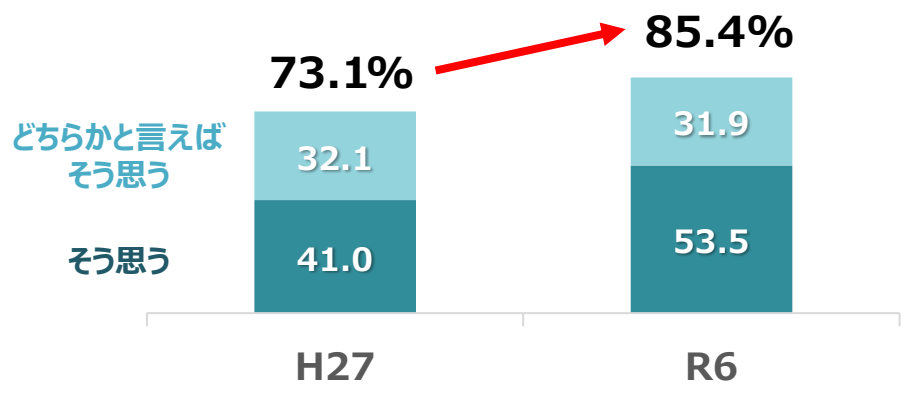
暫定値

英語の学習は大切だ



「英語の学習は大切だ」という質問に対する
肯定的な回答は、
前回調査から**4.6ポイント上回る**

英語を学習すれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ



「英語を学習すれば、ふだんの生活や社会に
出て役立つ」という質問に対する
肯定的な回答は、
前回調査から**12.3ポイント上回る**

（出典）令和6年度高等学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

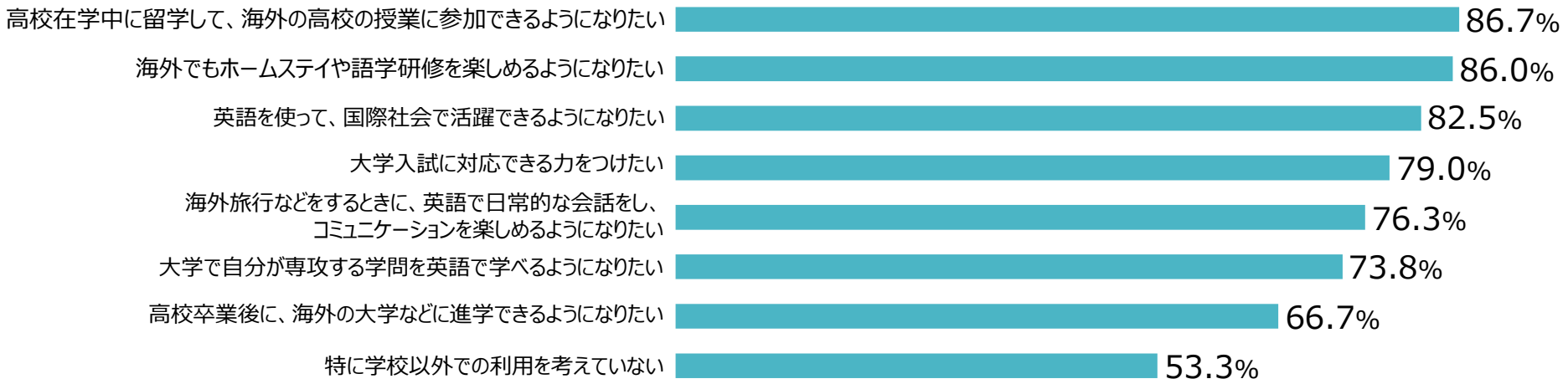
高校
R6学習指導要領
実施状況調査

英語学習に対して目的意識を持っている生徒ほど通過率の平均が高い傾向

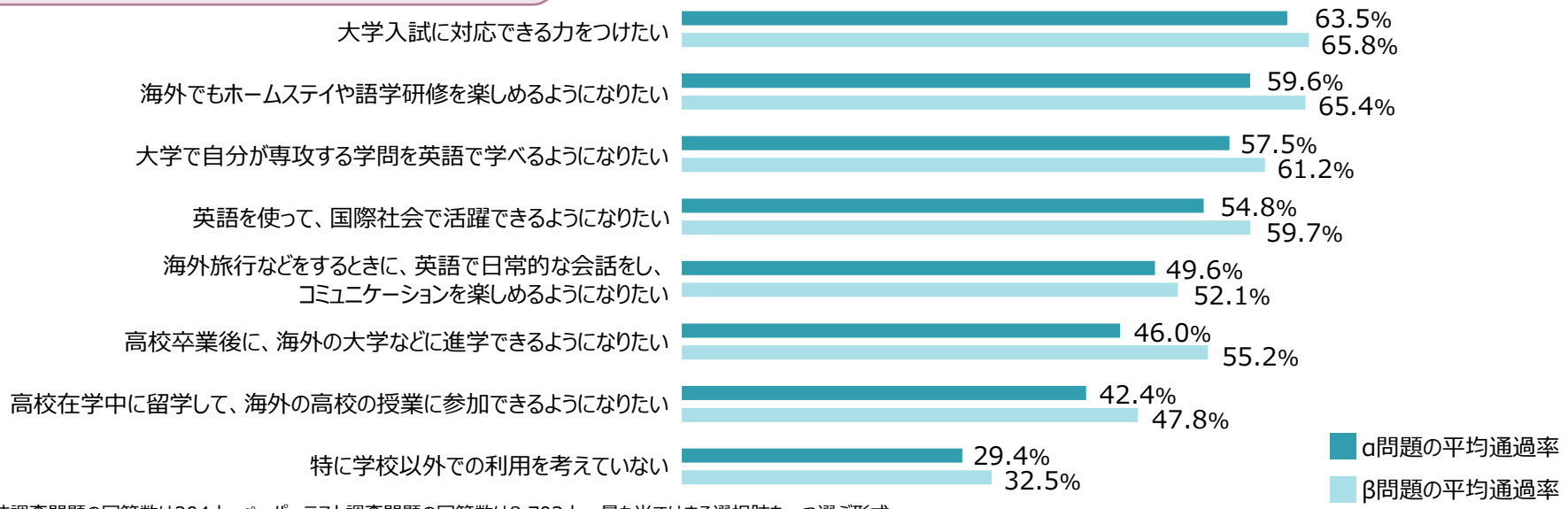
暫定値

どの程度まで英語を身につけたいと思っていますか

回答別平均通過率（実技調査問題）



回答別平均通過率（ペーパーテスト調査問題）



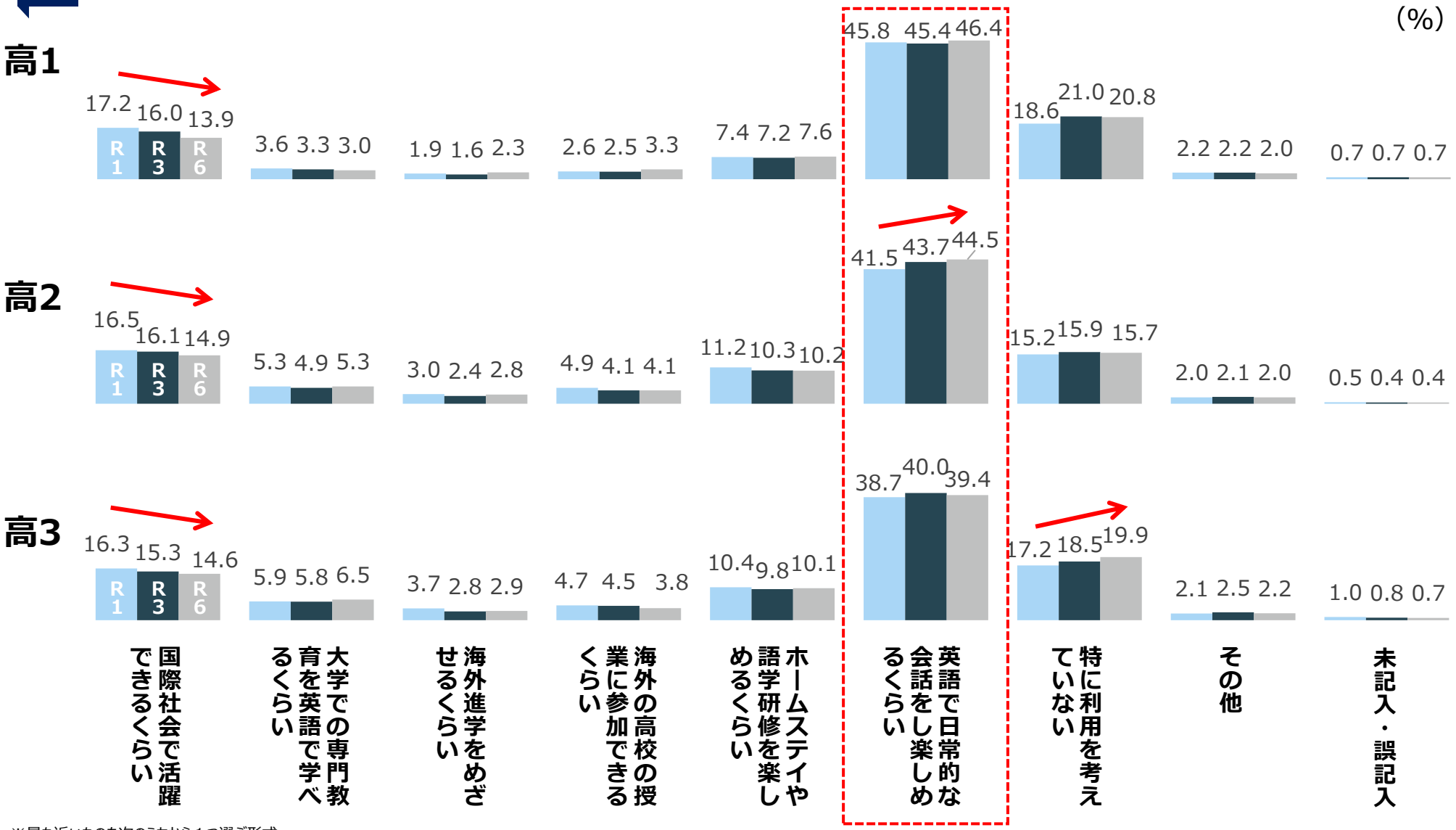
※実技調査問題の回答数は204人、ペーパーテスト調査問題の回答数は8,703人。最も当てはまる選択肢を一つ選ぶ形式。

（出典）令和6年度高等学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

英語を身につけたい程度は「日常的な会話を楽しめるくらい」が最多

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

Q 現在、英語をどの程度まで身につけたいと思っていますか



どの学年も割合が高い

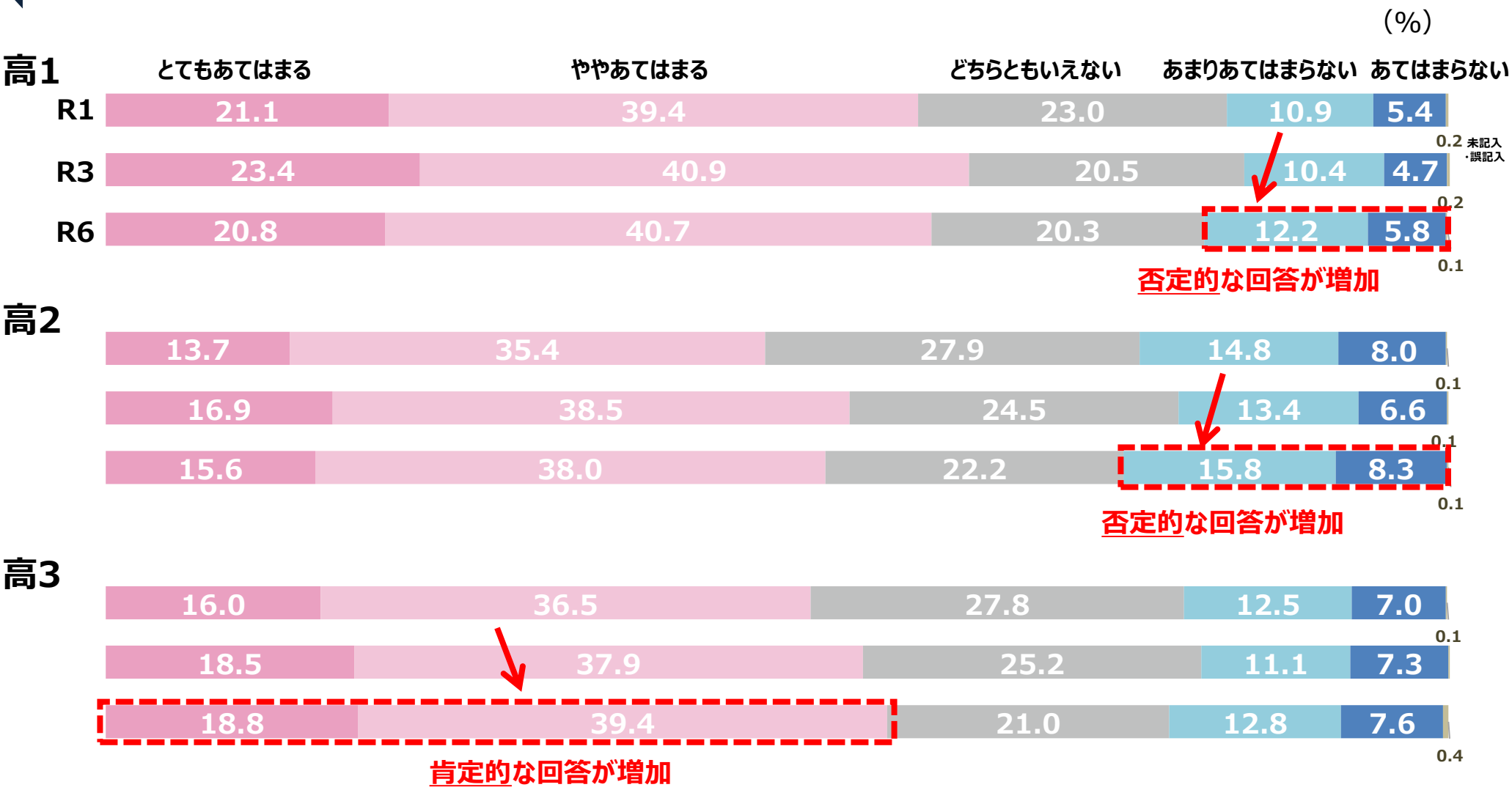
※最も近いものを次のうちから１つ選ぶ形式。

（出典）令和7年度英語教育に関する調査研究（英語力に関する調査分析）

●高１・２では「目標や目的をもって授業に取り組むようにしている」 に否定的な回答はＲ１→Ｒ６で増加
●一方、高３では肯定的な回答が増加

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

Q 目標や目的をもって授業に取り組むようにしている



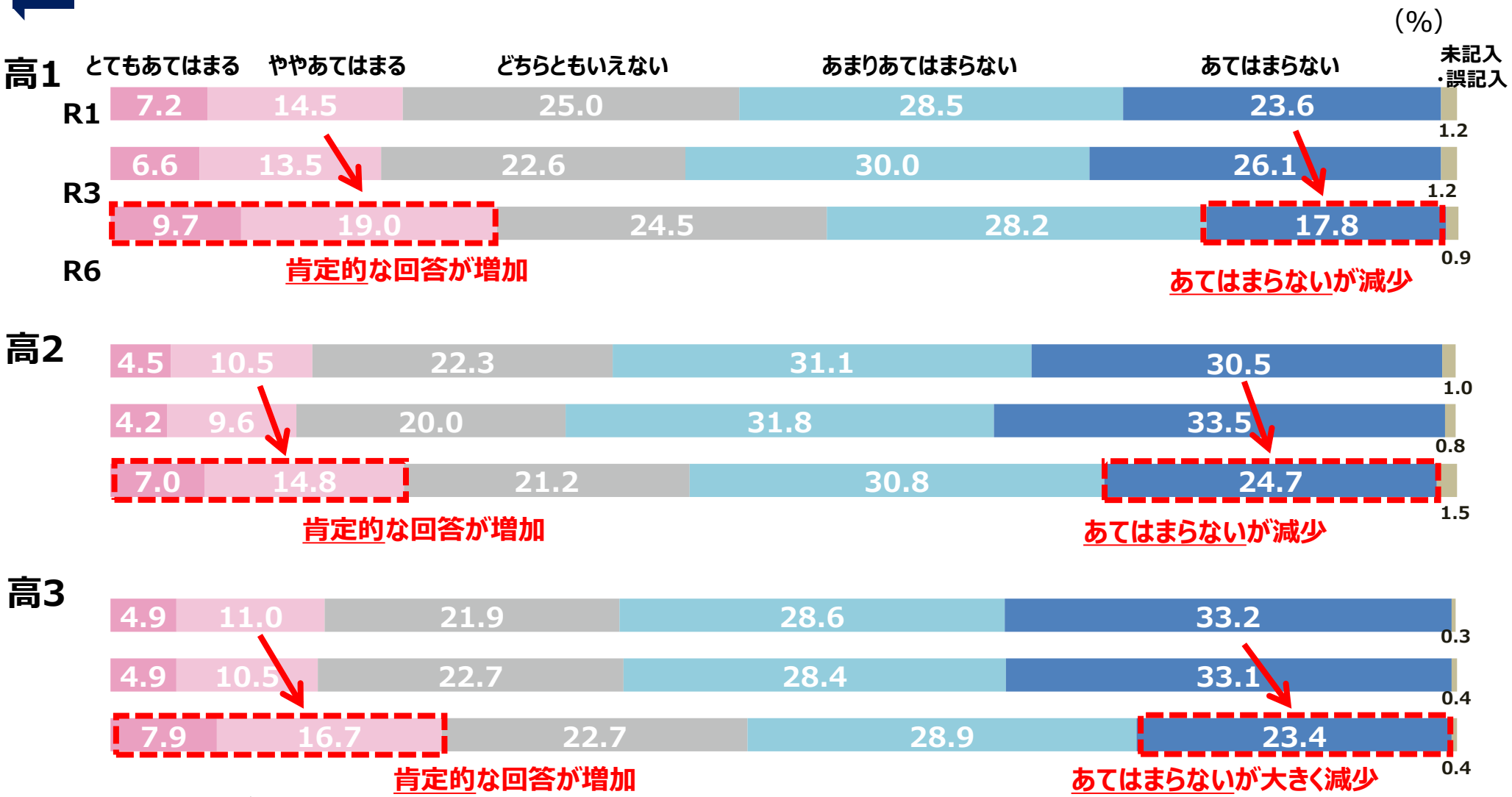
※最も近いものを次のうちから１つ選ぶ形式。

（出典）令和7年度英語教育に関する調査研究（英語力に関する調査分析）

「積極的に英語を話すようにしている」に肯定的な回答はR１→R6で増加傾向（全学年）

文部科学省から株式会社ベネッセコーポレーションに委託し、アンケート回答結果を集計したもの。

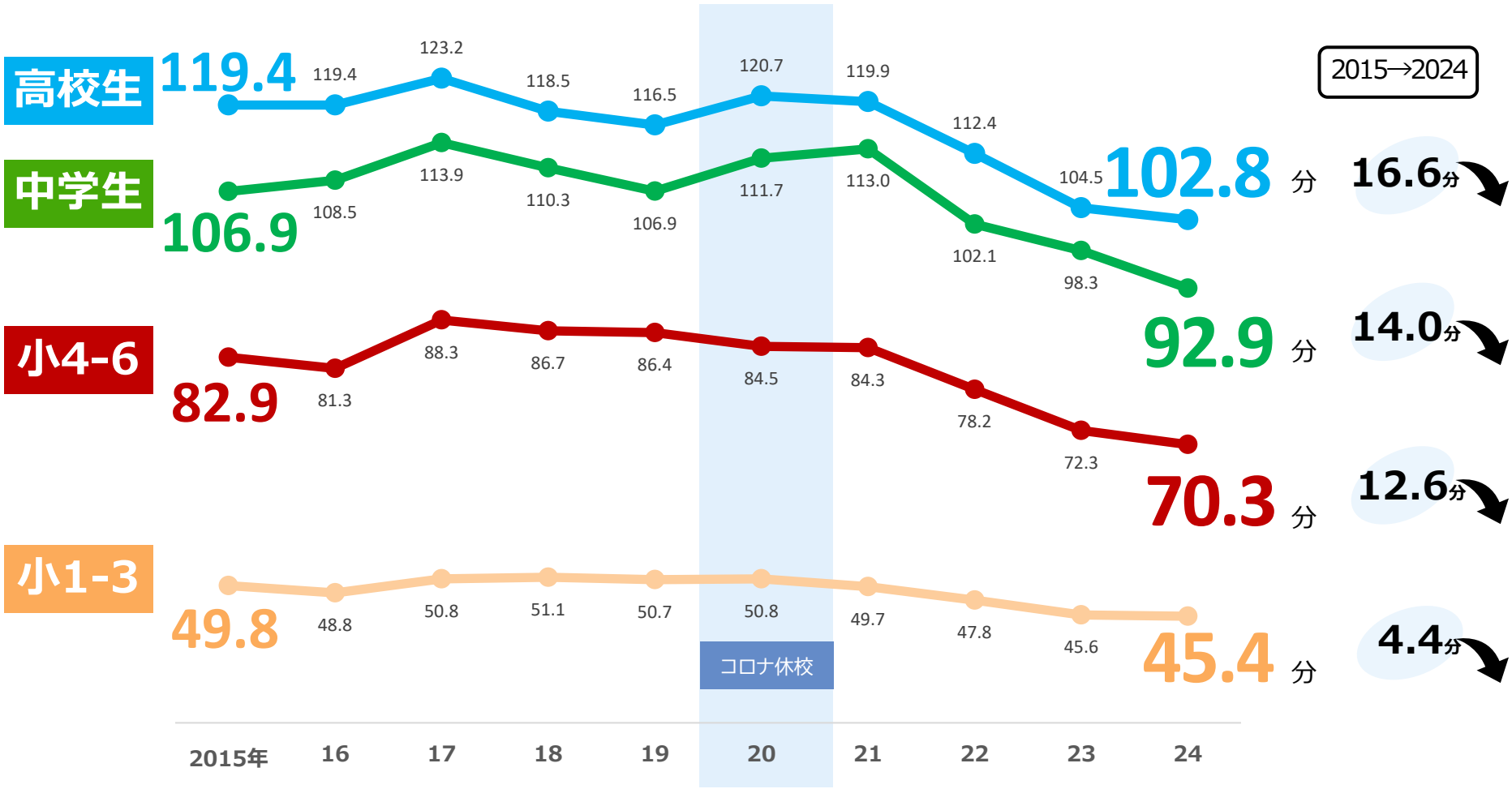
Q ネイティブの先生に英語で話しかけるなど、積極的に英語を話すようにしている



※最も近いものを次のうちから１つ選ぶ形式。

（出典）令和7年度英語教育に関する調査研究（英語力に関する調査分析）

近年、小４～高３の学習時間は１日10～20分減少



(出典)東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2024」

※「あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、一日にどれくらいの時間やっていますか。学校の中でやる時間は除いてください。」という設問の「学校の宿題をする時間」、「学校の宿題以外の勉強をする時間（学習塾の時間を除く）」、「学習塾での勉強時間」に対する回答。

※学習時間は、「宿題」＋「家庭学習」＋「塾での学習」の１日あたりの平均時間。「学校の宿題」「家庭学習（学校の宿題以外の勉強をする時間）」の平均時間は、「しない」を「０分」、「４時間」を「240分」、「４時間以上」を「300分」などと置き換えて算出。

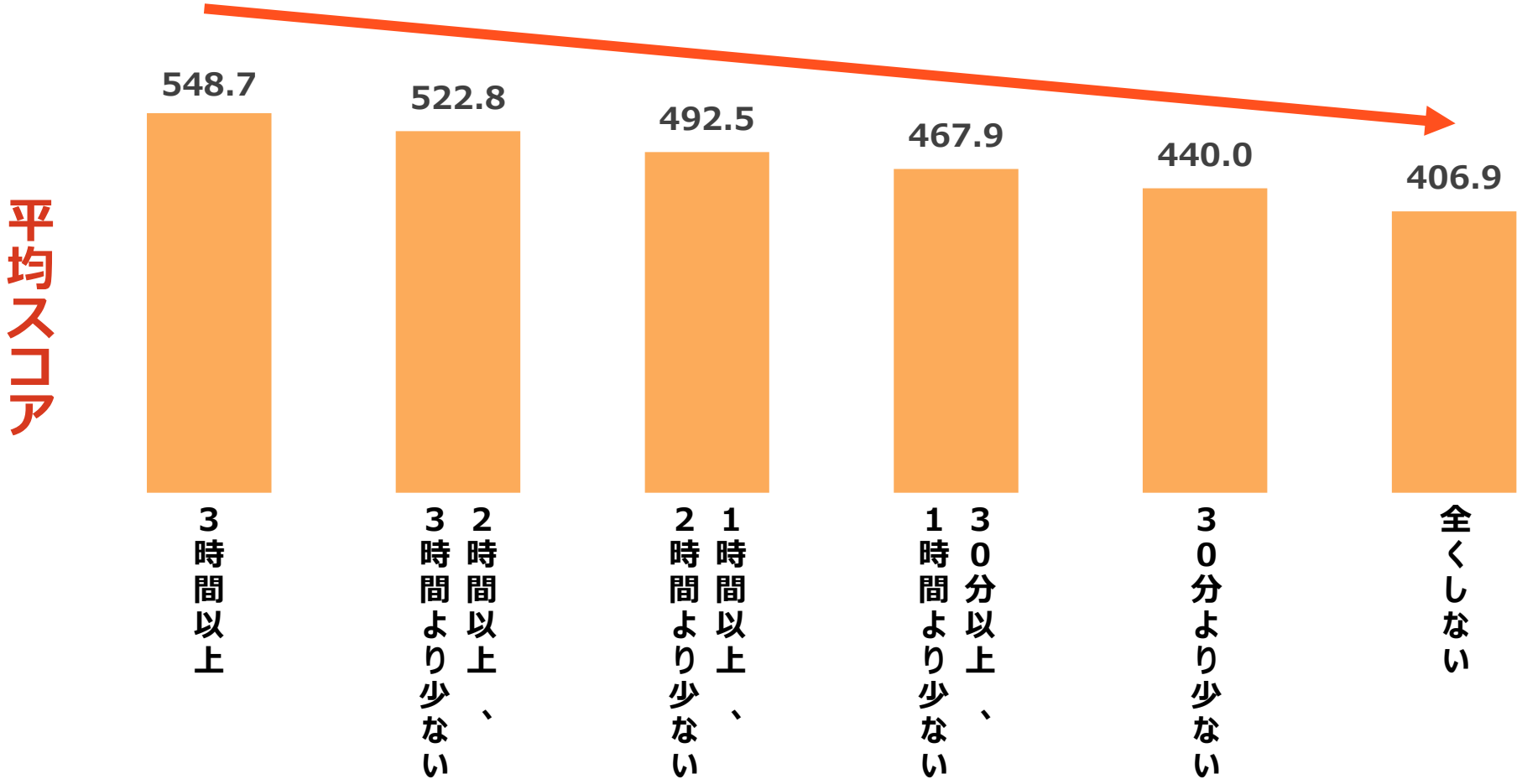
※「塾での学習」の平均時間は、「通っていない」と回答した子どもを０分、「通っている」と回答した子どものうち「１回にどれくらいの時間、学習塾で勉強していますか」という質問に対して、「30分」を30分、「１時間」を60分、「４時間」を240分、「４時間以上」を270分のように置き換え、週当たりの通塾回数をかけあわせて７で割って算出。

中３
全国学調経年変化

学校外での勉強時間が短いほど、英語の平均スコアが低い

保護者への質問

- **お子さんは、学校の授業時間以外に、普段（学校のある日）、１日当たりどのくらいの時間、勉強しますか**（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、ＩＣＴ機器を活用してインターネットのコンテンツから学ぶ時間も含む）。



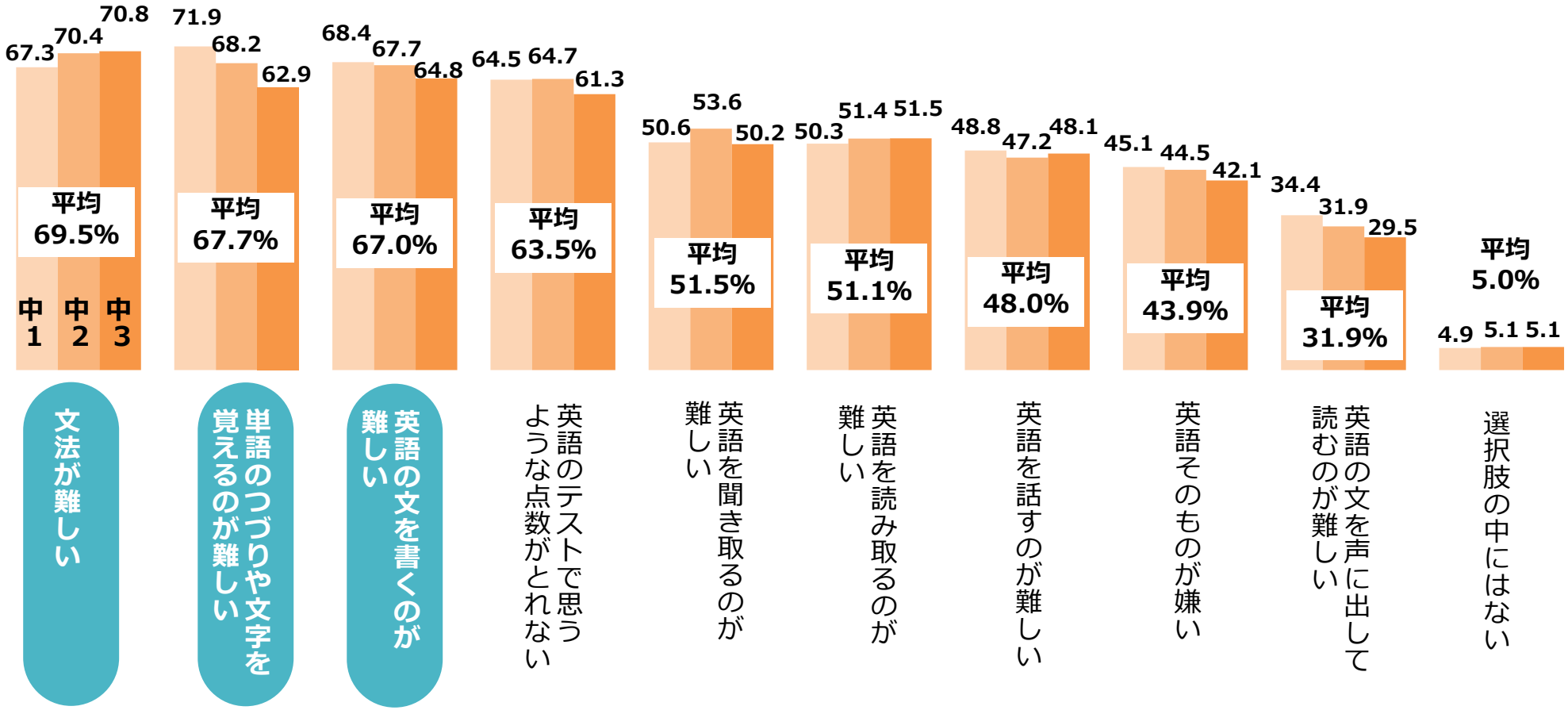
※グラフは、選択肢ごとの教科の平均スコアをクロス集計したものであり、相関係数は0.339。
（出典）令和6年度全国学力・学習状況調査　経年変化分析調査・保護者に対する調査

5. 語彙や文法事項に関する課題

「英語の学習が好きだ」に否定的な回答の理由は、「文法が難しい」「単語のつづりや文字を覚えるのが難しい」「英語の文を書くのが難しい」が上位

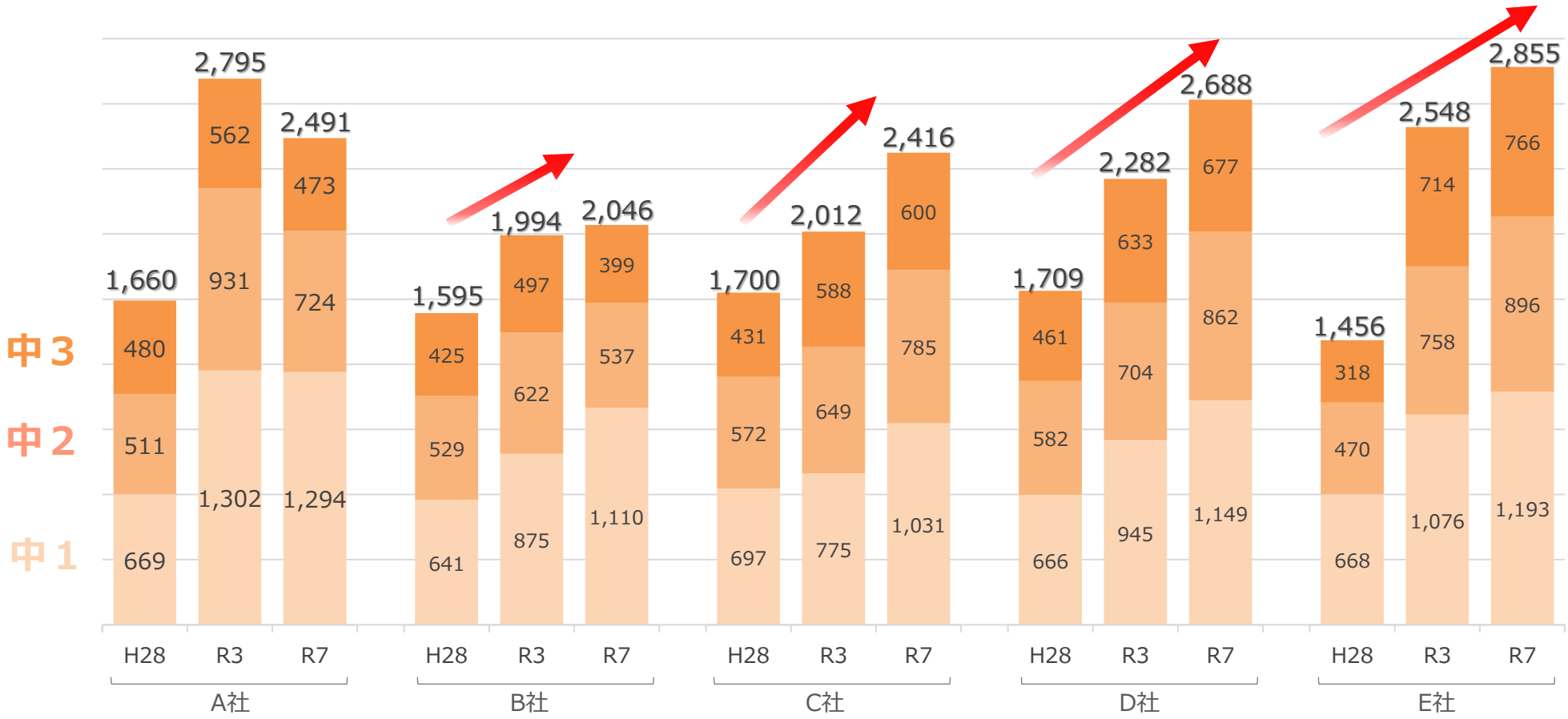
暫定値

「英語の学習が好きだ」に否定的な回答の理由



（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査　生徒質問調査

教科書の語彙数は増加傾向にある（H28→R3→R7）

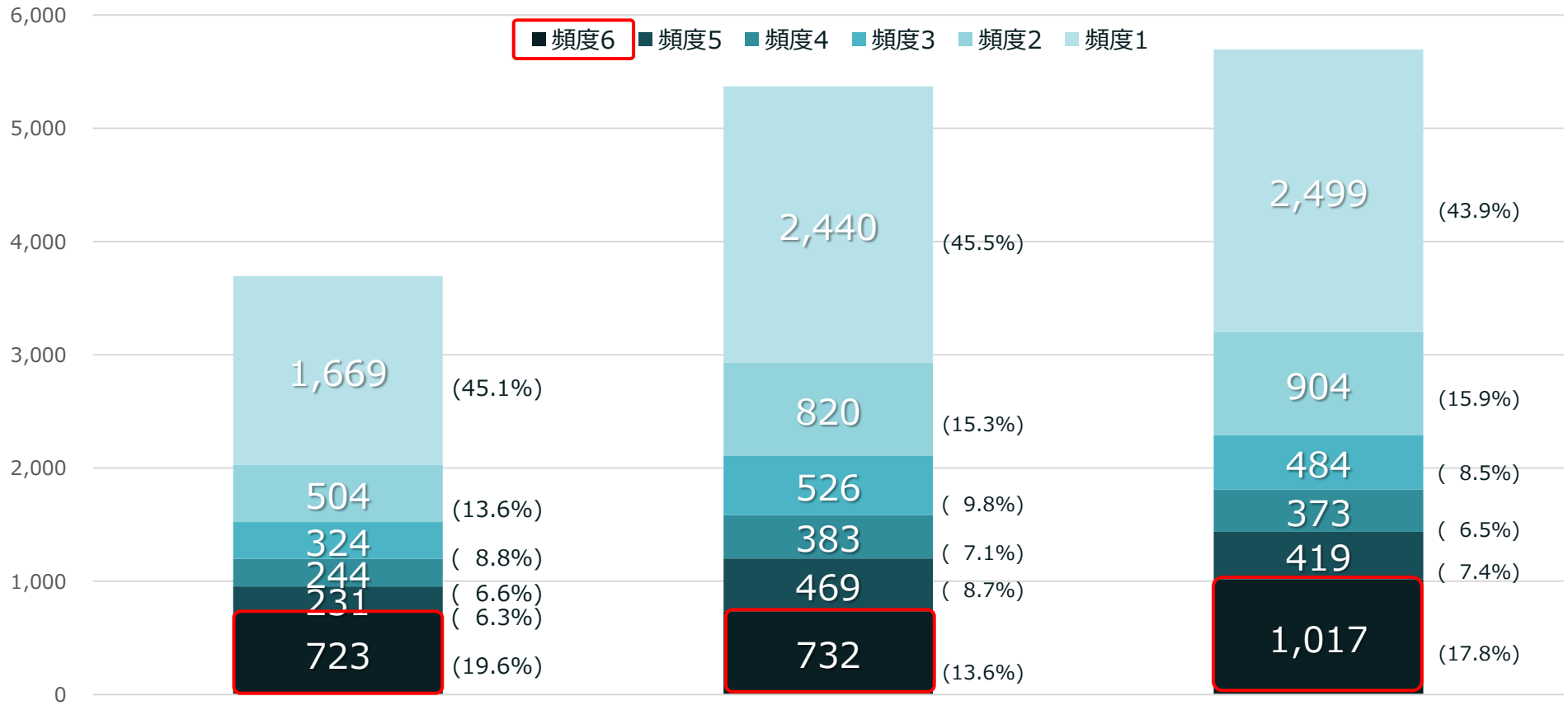


※ 語数は、調査者が、各教科書の巻末にある語彙リストの見出し語のうちから、短縮形を除いて数えたもの。（教科書によっては、語彙リストから固有名詞を省いているものもあるが、その場合も本文や別表等から補って加えていない。）
したがって、この数は、各教科書が固有名詞などを新出語扱いしないで設定している語数とは一致しない。
※ また、学習指導要領でいう「小学校で学習した語に1,600語～1,800語程度の新語を加えた語」という規定に即したものではない。

（出典）公益財団法人中央教育研究所「令和７年度版中学校英語教科書における語彙調査」

中学校
R7英語教科書における語彙調査

６種類全ての教科書で扱われている語彙（頻度６）は約３～４割であり、教科書によって扱われる語彙にばらつきがある



H28の教科書の語彙数を1,600とした場合の**頻度６の割合**
45.2%

R3の教科書の語彙数を2,300とした場合の**頻度６の割合**
31.8%

R7の教科書の語彙数を2,500とした場合の**頻度６の割合**
40.7 %

※(　)内の数字は各年度内での割合
※「H28の教科書の語彙数を1,600とした場合」は、P.6の資料におけるH28の６種類の教科書の語彙数の平均値を基に算出（R3及びR7も同様）

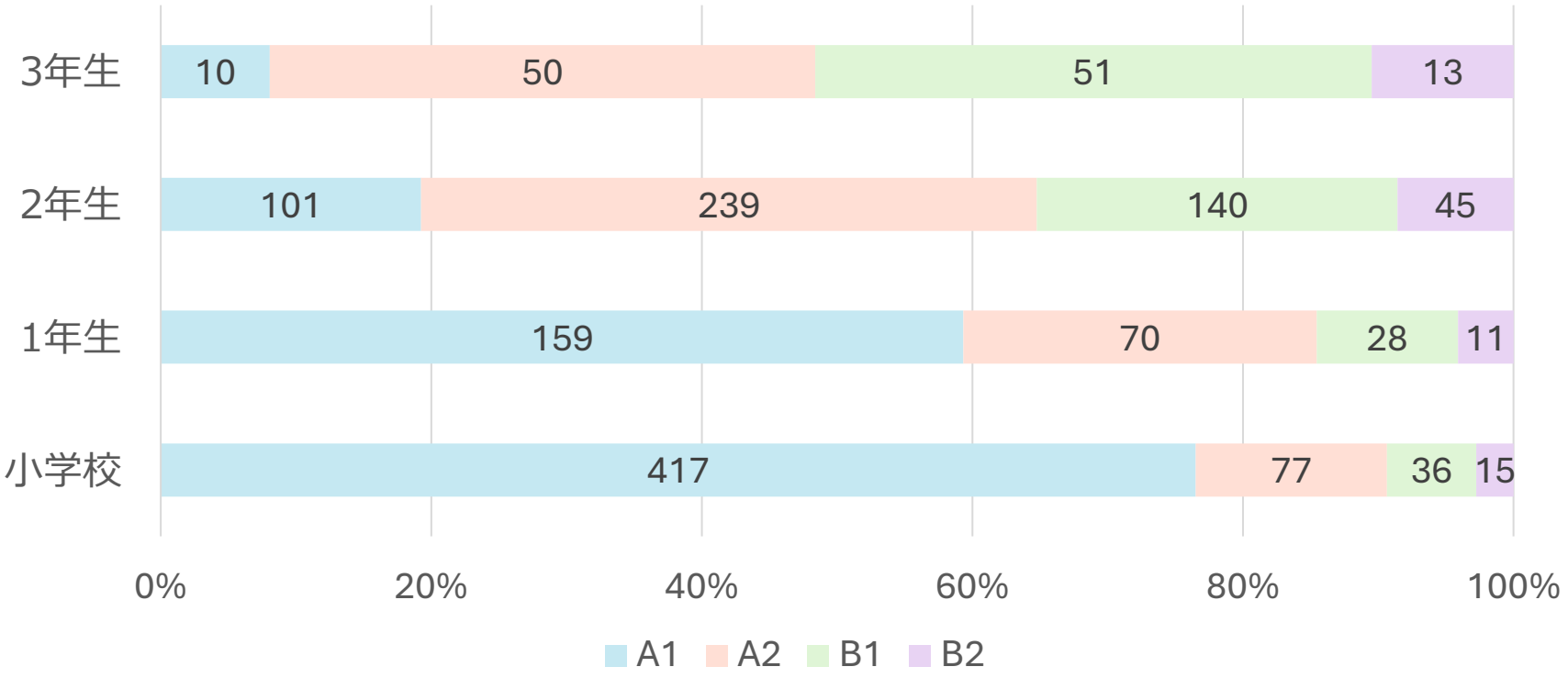
（出典）公益財団法人中央教育研究所 令和７年度版中学校英語教科書における語彙調査を基に作成。

中学校
R5学習指導要領
実施状況調査

教科書で扱われている新出語彙のレベルは、学年が上がると高くなる

暫定値

教科書に登場する語彙タイプの分布



※中学校の語彙は、中学校教科書６社のうち２社以上で出現している1758語。
　小学校の語彙は、中学校教科書で「小学校で学習したとみなしている」語、628語。

※教科書に出てくる語彙リストとして、New Word Level Checker（https://nwlc.pythonanywhere.com）のJET2020の語彙リストを使用し、
　New Word Level Checker を用いてCEFR-J Wordlist 1.5に基づき、CEFRレベルに分けた。

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査に基づき、作成。

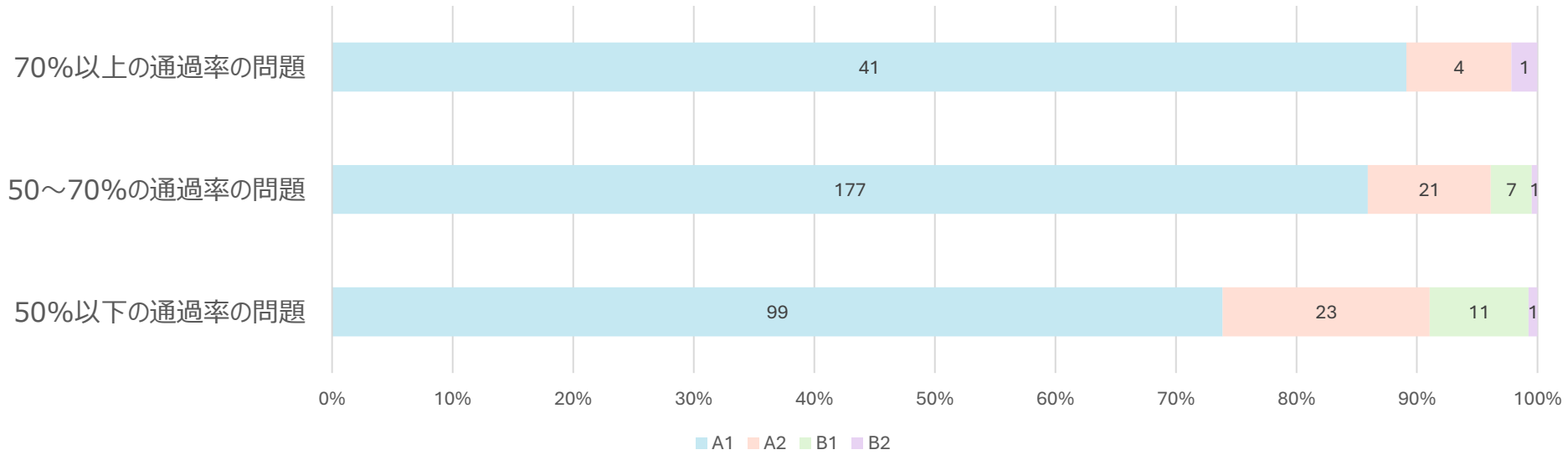
中２・３
R5学習指導要領
実施状況調査

「読むこと」では、通過率が低い問題において CEFR A2レベル以上の語彙を使用

暫定値

- 通過率が高い問題の方が、CEFR A2レベルの語彙が占める割合が比較的小さい。
  CEFR A2レベル以上の語彙が少なければ、高い理解力を示す可能性。
- 通過率が50%以下の問題は、CEFR A2以上の語彙の占める割合が26%と比較的多かった。

「読むこと」の通過率ごとの語彙レベル（中3）※中2も同様の傾向



※受容語彙について、「読むこと」の問題文（選択肢を含む）をNew Word Level Checker（https://nwlc.pythonanywhere.com）によって分析。
※第３学年に関して、通過率が70%以上の問題、50～70%の問題、50%以下の問題に分けて分析。

（参考）CEFR A2の語彙は品詞別語で1411語、見出し語で1352語。
（CEFR-J Wordlist 1.6 （https://www.cefr-j.org/download.html）によって分析。）

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査に基づき、作成。

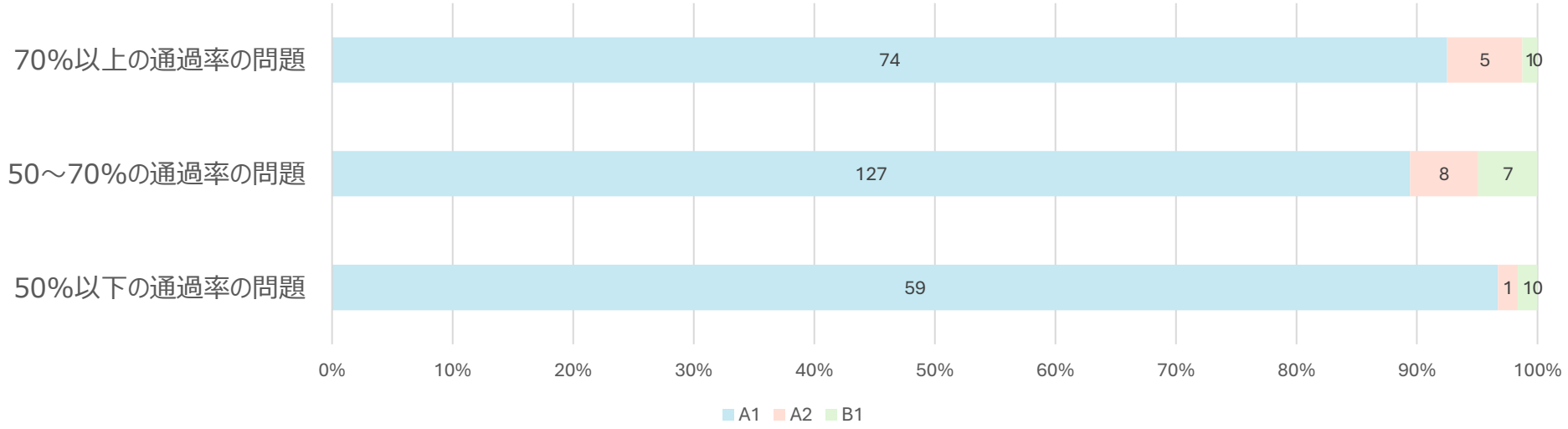
中１
R5学習指導要領
実施状況調査

「読むこと」では、CEFR A1レベルの語彙が大半を占める問題であっても、通過率が高いものもあれば低いものもある

暫定値

- 通過率と語彙のレベルに関係は見られない。
- CEFR A1レベルの語彙を含む英文であっても、高い通過率を保証するものではない可能性。

「読むこと」の通過率ごとの語彙レベル（中１）



※受容語彙について、「読むこと」の問題文（選択肢を含む）をNew Word Level Checker（https://nwlc.pythonanywhere.com）によって分析。
※第１学年に関して、通過率が70%以上の問題、50～70%の問題、50%以下の問題に分けて分析。

（参考）CEFR A1の語彙は品詞別語で1166語、見出し語で1068語。
（CEFR-J Wordlist 1.6 （https://www.cefr-j.org/download.html）によって分析。）

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査に基づき、作成。

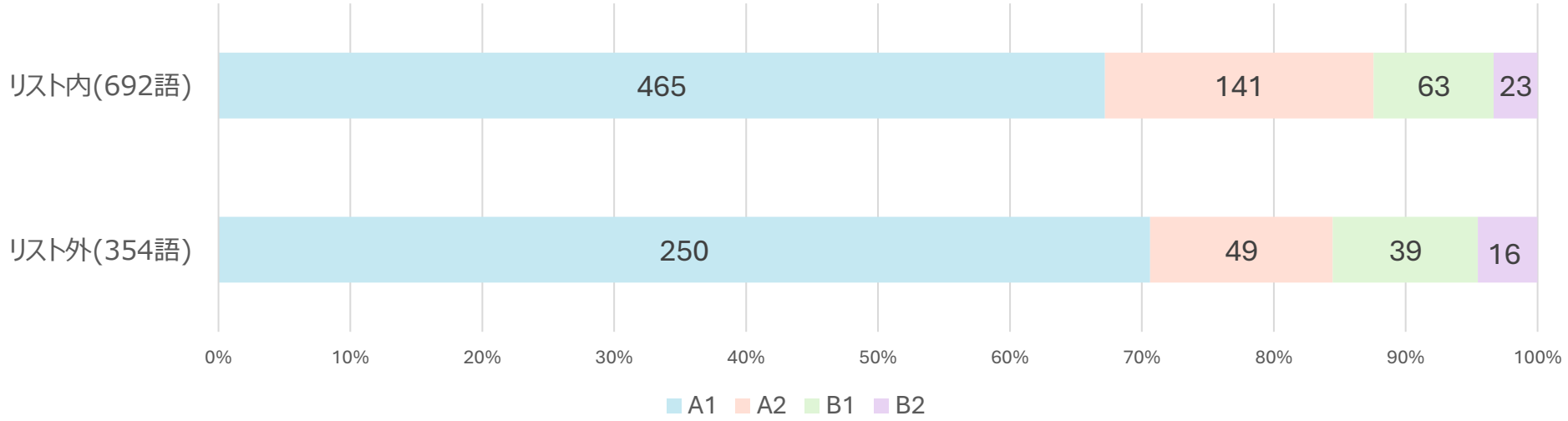
中３
R5学習指導要領
実施状況調査

「書くこと」では、使用した語彙・使用したい語彙のレベルは大半がCEFR A1レベル相当

暫定値

- 中３の生徒が「書くこと」で使用した語彙のうち、リスト内の語彙は692語であった。
  リスト内の語彙のうち、 CEFR A1レベルは67%。CEFR A2レベルまで含めると、88%であった。
- リスト外の語彙のうち、書きたい語のレベルを分析するために綴りの誤りを含む語を抽出して修正した結果、354語であった。そのうち、 CEFR A1レベルは71%。 CEFR A2レベルまで含めると、 84%であった。
  CEFR A1レベルの語彙であっても、綴りを正しく書くことに課題が見られる。

「書くこと」における産出語彙レベル（中３）（*n* = 300）



※リストは、CEFR-J Wordlist 1.5
※産出語彙について、「書くこと」の問題における記述を第３学年300名を抽出。
　抽出したものを、New Word Level Checker（https://nwlc.pythonanywhere.com）によって分析。
※固有名詞及び日本語のローマ字表記等を除いている。

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査に基づき、作成。

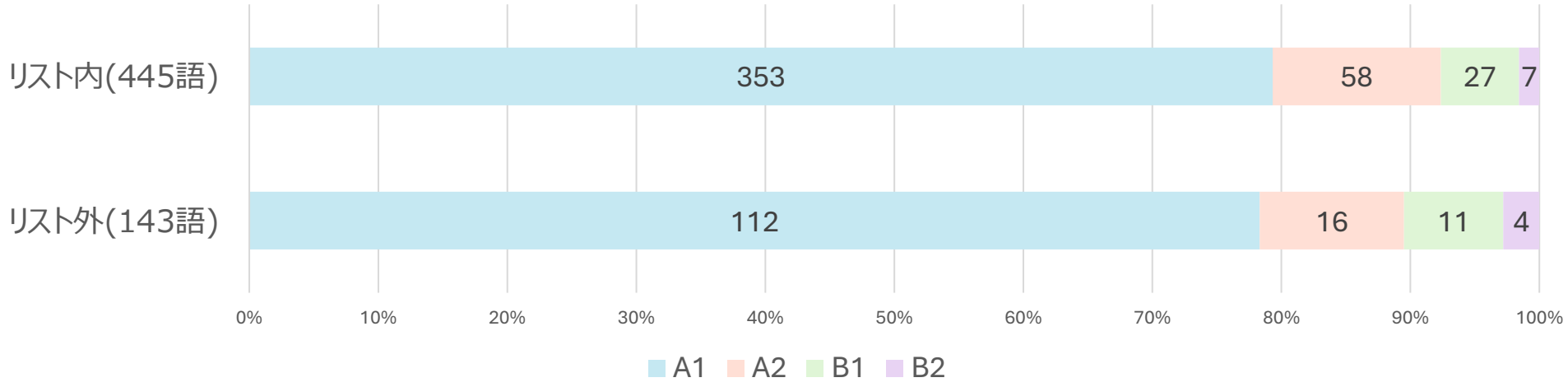
中１
R5学習指導要領
実施状況調査

「書くこと」では、使用した語彙・使用したい語彙のレベルはほとんどがCEFR A1レベル相当

暫定値

- 中１の生徒が「書くこと」で使用した語彙のうち、リスト内の語彙は445語であった。
  リスト内の語彙のうち、 CEFR A1レベルは79%。CEFR A2レベルまで含めると、92%であった。
- リスト外の語彙のうち、書きたい語のレベルを分析するために綴りの誤りを含む語を抽出して修正した結果、143語であった。そのうち、 CEFR A1レベルは78%。 CEFR A2レベルまで含めると、 90%であった。
  CEFR A1レベルの語彙であっても、綴りを正しく書くことに課題が見られる。

「書くこと」における産出語彙レベル（中１）（*n* = 300）



※リストは、CEFR-J Wordlist 1.5
※産出語彙について、「書くこと」の問題における記述を第１学年300名を抽出。
　抽出したものを、New Word Level Checker（https://nwlc.pythonanywhere.com）によって分析。
※固有名詞及び日本語のローマ字表記等を除いている。

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査に基づき、作成。

中１
Ｒ５学習指導要領
実施状況調査

音声の認識及び音と文字の結びつきは、中１の生徒にとって難しい可能性

暫定値

- 中１の生徒が「書くこと」で間違った語彙に着目すると、CEFR A1レベルの語彙は112語、A2レベルの語彙は16語。
- 中３の生徒と比較すると、同じ語であっても多様な綴りの誤りが見られる。
- A1レベルであっても、中１の生徒にとって正しい音声の認識及び音と文字との結びつきに課題があると考えられる。

A1レベルの語彙の綴り間違いの例（中１）

beautiful (42)　※中３は９

beutiful (5), butiful (4), batiful (2), bautiful (2), beaucful (1), beauful (2), beautifull (2), beautifulu (1), beaututiful (1), befutiful (1), betfor (1), betiful (1), beutyfor (2), burdifor (1), buteful (2), butefull (1), beautihul (1), beateful (1), beuteful (1), bult (1), beutifre (1), biautiful (1), beautifull (1), bullu (1), butifur (1), beautchful (1), brutefor (1), dyutiful (1), datfll (1)　など

summer (35)

sumer (11), summar (4), sammer (2), sammr (2), somer (2), sormer (2), samar (1), samr (1), semmer (1), sma (1), smear (1), smeer (1), souma (1), sumre (1), sammar (1), sormore (1), sammre (1), sammar (1), sammr (1), sumamr (1), smer (1), smere (1), sommer (1), smr (1), sumaa (1), smar (1), samme (1)　など

flower (29)

frawar (3), flowars (2), frowor (2), fulwar (2), flow (1), flaw (1), flew (1), flor (1), flore (1), fluwes (1), fraw (1), frowe (1), fulawae (1), furower (1), frowar (1), furwar (1), furawe (1), flrow (1), furawa (1), forower (1), flowr (1), flwar (1), furaw (1), furawer (1), frowr (1), hulawer (1), friwer (1), fowers (1)　など

winter (29)

whinter (2), wintr (2), wintter (2), wentr (2), wantr (2), wemta (1), wentre (1), whiet (1), whiter (1), wiheter (1), wintre (1), winte (1), witer (1), wintr (1), wintew (1), witer (1), wintter (1)　など

pet (18)

pat (4), petto (3), bet (2), peet (2), peto (1), petot (1), peeto (1), pert (1), qet (1), peat (1)　など

spring (15)

supring (3), sprengs (2), sparing (1), sprng (1), sparing (1), supuring (1), sprint (1), spuring (1), spulint (1), spering (1), splng (1), sprink (1)　など

make (14)

meke (6), meik (3), maek (2), meak (1), meking (1), meak (1), meuk (1), meikes (1), maiku (1), meikingu (1), meikng (1)　など

very (11)　※中３は５

verey (2), verry (2), vere (2), veri (2), beley (1), bery (1), bele (1)

favorite (10)　※中３は６

farorite (2), fovoret (1), fvoret (1), favrit (1), favoret (1), fadort (1), fevorite (1), favorit (1), fevaret (1)　など

※産出語彙について、「書くこと」の問題における記述を第１学年300名を抽出。
※抽出したものを、New Word Level Checker（https://nwlc.pythonanywhere.com）によって分析。

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査に基づき、作成。

音と文字の結びつきは、中３の生徒でも難しい可能性

暫定値

- 中３の生徒が間違った語彙に着目すると、CEFR A1レベルの語彙は250語、A2レベルの語彙は49語。
- A1レベルであっても、中３の生徒にとって音と文字とを結びつけることは難しい可能性。

A1レベルの語彙の綴り間違いの例（中３）

practice (24)
plactice, practis, practic, plactis, practce, plactise, preactice, practise, proctice, pracetic, practse, pracitce, practish, practhis, prectis, pratice, puactis, practece, puritact, practece, practing など

because (15)
becouse, becous, becauce, becaus, becase, becose, becase, becuse など

culture (10)
calture, culuture, caruture, culter, cultury, calchat, cluture, cltuare など

beautiful (9)
butiful, bertifull, vutiful, beateful, beauful, buteful, beatiful, beutiful, buitufull

delicious (8)
dericious, delisio, derisas, delisious, deliciose, delishia, deilicous, delicaus

introduce (7)
intoroduce, introdeuce, introdce, intoroduse, intrduce, introde, introduse

baseball (6)
beasball, dasedall, baseboll, basedall など

favorite (6)
favorit, favrit, faborit, feivert など

very (5)
bery, veary, vere, bry など

※産出語彙について、「書くこと」の問題における記述を第１学年300名を抽出。
※抽出したものを、New Word Level Checker（https://nwlc.pythonanywhere.com）によって分析。

（出典）令和５年度中学校学習指導要領実施状況調査に基づき、作成。

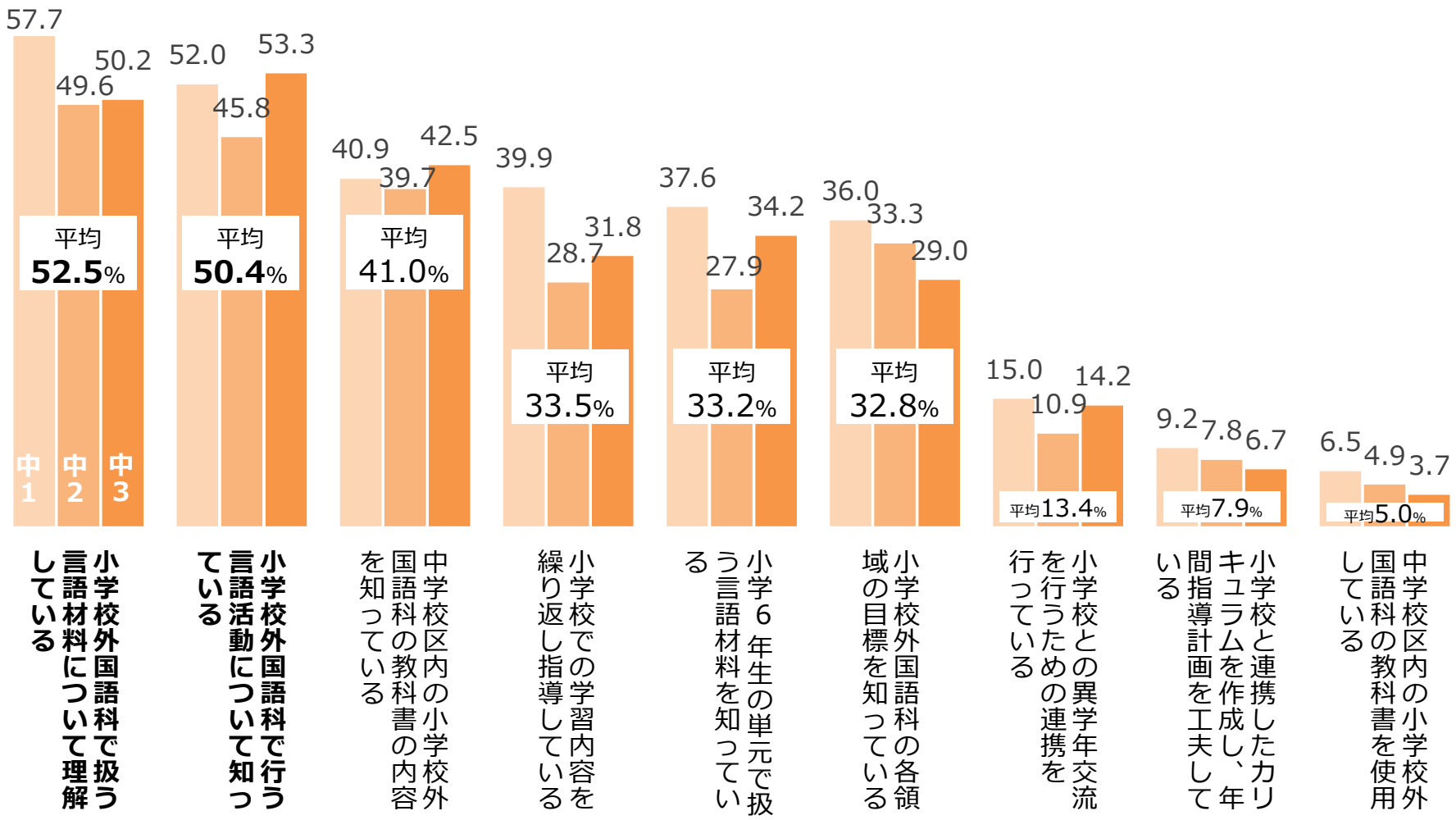
6. 段階的な指導・校種間接続

中学校
R5学習指導要領
実施状況調査

「小学校外国語科で扱う言語材料や言語活動について理解している」と回答した教師の割合の平均は約50%に留まる

暫定値

英語の授業では、小学校における外国語活動や外国語科を踏まえ、円滑な接続が図れるように指導を工夫している



（出典）令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査 教師質問調査を基に、平均反応率が高い順に並び変えて作成。

小中連携に関する取組の好事例（訪問及びヒアリングから）

情報交換

【小中で、教科書やパフォーマンス動画を相互に見合う研修会を実施】

・教科書を見合い、どのような言語活動やパフォーマンステストを行うかのアイデアを小・中で交換。
・小６と中１の学年末のパフォーマンス動画を見合い、「中１の１年間で何ができるようになるか」という姿を具体的に確認。接続期で必要な指導が明確となり、小中ギャップ解消が期待。

交流

【中学校英語教師が小学校で乗入れ授業を実施】

・乗入れ授業を実施した教師が、児童の習熟状況や小学校での指導内容について、中学校英語教師に共有。小学校での指導内容の理解と小中接続への意識向上に貢献。

【小・中学生が英語で一対一のオンライン交流、相互に学校紹介】

・相手に伝わるよう、伝え方や内容の工夫について指導。小・中学生ともに、相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。

小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定

【小中一貫したカリキュラムとCAN-DOリストを研修会で活用】

・小中一貫したCAN-DOリストに基づき授業計画を策定。相互に公開授業、授業研究会を実施し、CAN-DOリストを通じて各学校種の到達目標を確認。

【小中での段階的な「読むこと」「書くこと」の指導】

・小学校では絵本等を用いて「聞くこと」から「読むこと」、「読むこと」から「書くこと」を段階的に指導。中学校でも音声・動画付きの多読を通して「聞くこと」「読むこと」から理解したことについて相手意識を持って「書くこと」を指導。

小中連携が進んでいる学校の言語活動の特徴

【言語活動を通した指導】

・子供が進んでコミュニケーションを図りたいと思うような、興味・関心のあるテーマを設定。教師との自然なやり取りの継続から、子供の英語による発話を巧みに引き出していた。発話の様子を踏まえた語彙・表現の指導を行い、使える英語の習得を促進。

【教師とALTのティーム・ティーチング】

・子供一人一人のつまずきを把握した上で、個別に誤りの訂正と、全体へのフィードバックを行う。常に子供を励まし、子供が自信を持って英語を使用できる環境を作り出していた。

※「情報交換」「交流」「小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定」は、市区町村教育委員会が主導して実施。「小中連携が進んでいる学校の言語活動の特徴」は、各学校が実施。

※ R5全国学力・学習状況調査（中学校英語）の結果やR5英語教育実施状況調査の結果から、特色ある取組を行っていると思われる中学校14校、主にその学区内の小学校11校及び7つの教育委員会を訪問し、授業参観とヒアリング調査を実施。

（出典）令和6年度英語教育実施状況調査

英語教育実施状況調査等について、横浜国立大学 斉田智里研究室に委託して専門的な分析を実施。

7. AI時代に外国語を学ぶ本質的意義

AI時代に外国語を学ぶ本質的意義について
－AIによる代替・補完の視点から（イメージ）－

AIに代替・補完されうるもの

※写真はイメージです

即時に、高精度で、多言語に通訳・翻訳

例：外国語で書かれた対象にスマホをかざすだけで翻訳
内容のニュアンスに留意した会話の同時通訳
自分の声を保ったままプレゼン動画を多言語で発信

受信内容の要約、発信内容の作成

例：外国語の動画の要点を日本語で要約
外国語で目的に応じて文案を作成

人間に求められること

AIによる出力の正確性の判断

文化的背景やニュアンスの理解

例：直訳しにくい言葉や婉曲表現の「味」
外国の文化を背景とするユーモア

自分の考え・意見の形成

例：自身の学び・経験を踏まえた独創性

創作や表現の多様性

例：自ら選んだ外国語の言葉を通じた発信
効果的に伝えるための「間」の取り方

コミュニケーションへの深い理解

例：言語を自ら駆使することで得られるコミュニケーション
（共感・思いやり・相手への配慮）

人間関係・信頼関係の構築

例：相手の言葉で話すことによる心理的距離の短さ
（相手への深い理解）
自分の言葉で相手の心を動かすこと

外国語の学びを通じた理解・思考の広がり・深まり

例：外国語・他国の文化のみならず日本語や
日本の文化等への理解・思考が広がる・深まる

探究的な学びは、生成AIが苦手な部分と親和性

令和７年５月２２日
教育課程企画特別部会
資料１－１より

人間が得意なこと　VS 生成AIが得意なこと

人間的 ⟷ 機械的

人間の能力

- 情熱・人としての意思
- リーダーシップ
- 共　感
- 五感を通した経験・判断
- 課題定義
- ルール定義
- 倫理判断
- 社会・文化適合性判断

ジェネレーティブAIの能力

高度な模倣能力

- 作　画
- 作詞・作曲
- 小説の執筆
- ビジネス文章作成
- プログラミング
- 対人コミュニケーション

＋

マシンの得意領域

- スピード
- 安定したサービスレベル
- 機械との対話
- 知識量
- 大量データ解析
- 24時間365日労働

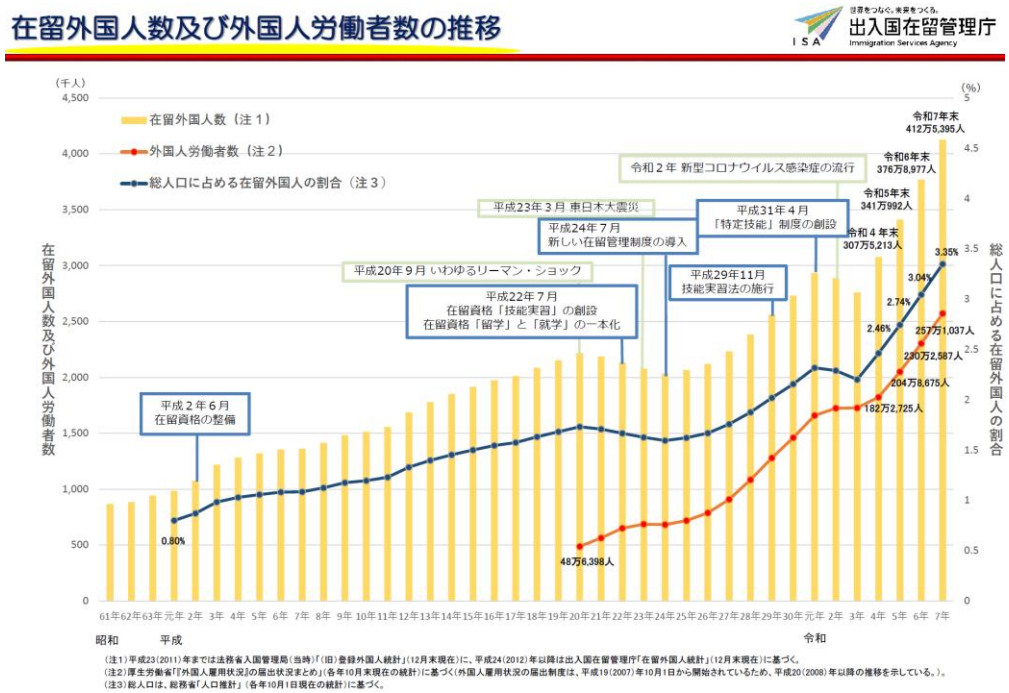
創造⟷模倣

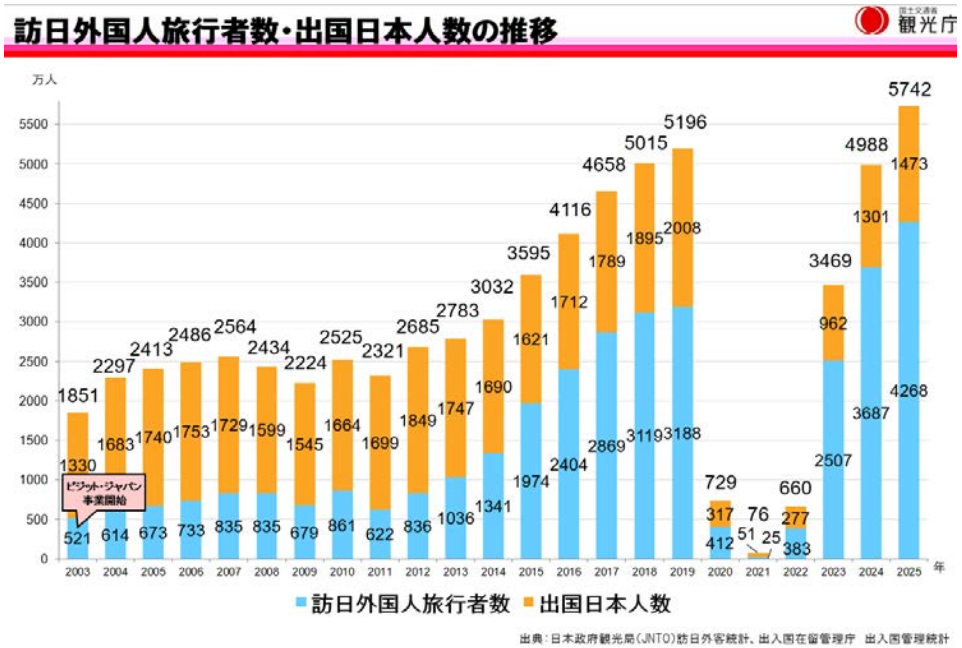
【出典】保科学世「生成AI時代の「超」仕事術大全」P.139 より作成

グローバル化・内なる国際化

在留外国人
25年末に約412万
（４年連続過去最高、初の400万人超）

訪日外国人旅行者4,268万超
日本人出国者　　1,473万超
（2025年段階、日本人出国者は回復途上）



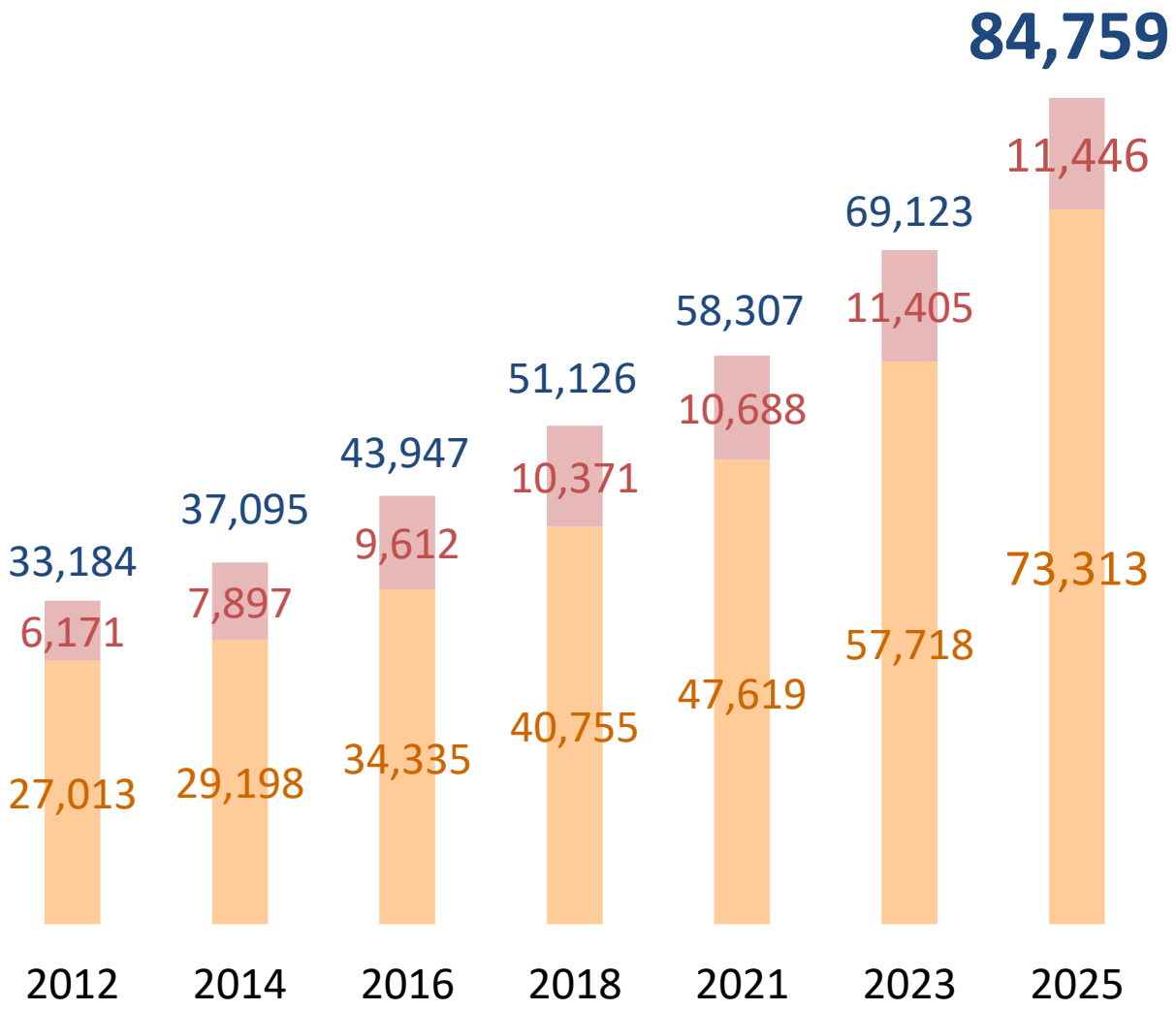


（出典）【左】出入国管理庁「外国人材の受入れ及び共生社会実現に向けた取組」（令和８年３月）
日本経済新聞「在留外国人、初の400万人超　人手不足補う「特定技能」が押し上げ」（令和８年3月27日）
【右】観光庁「訪日外国人旅行者数・出国日本人数」（令和８年１月21日）

日本語指導が必要な児童生徒、10年間で急増（過去最高を更新）

約10年間で
日本語指導が必要な児童生徒
は**1.9倍増**

- **日本国籍児童生徒**は **1.2倍増**
- **外国人児童生徒**は **2.1倍増**



（出典）令和７年度「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」（公立学校）

2033年までの目標と高校生の留学（派遣・受け入れ）

	現在	2033年までの目標
中学・高校の国際交流		
オンライン等での国際交流	14.0%の高校で実施	100%の中高で実施
対面での国際交流	22.0%の高校で実施	50%の高校で実施
高校の留学		
３カ月未満（研修旅行）	3.2万人	11万人
３カ月以上（留学）	0.3万人	1万人
外国人留学生の数	0.4万人	２万人
大学等の留学		
学位取得のため長期	4.9万人	15万人
協定等に基づく中短期	8.9万人	23万人
外国人留学生の数	33.7万人	38万人

（出典）教育未来創造会議「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ＜J-MIRAI＞」（第二次提言）
文部科学省「高等学校等における国際交流等の状況（令和５年度）」、「日本人学生の海外留学状況」及び「外国人留学生の在籍状況」（令和７年４月）

2033年までの目標と高校生の留学（派遣・受け入れ）

中学・高校の国際交流

オンライン等での国際交流
→100%の中高で実施

対面での国際交流
→50%の高校で実施

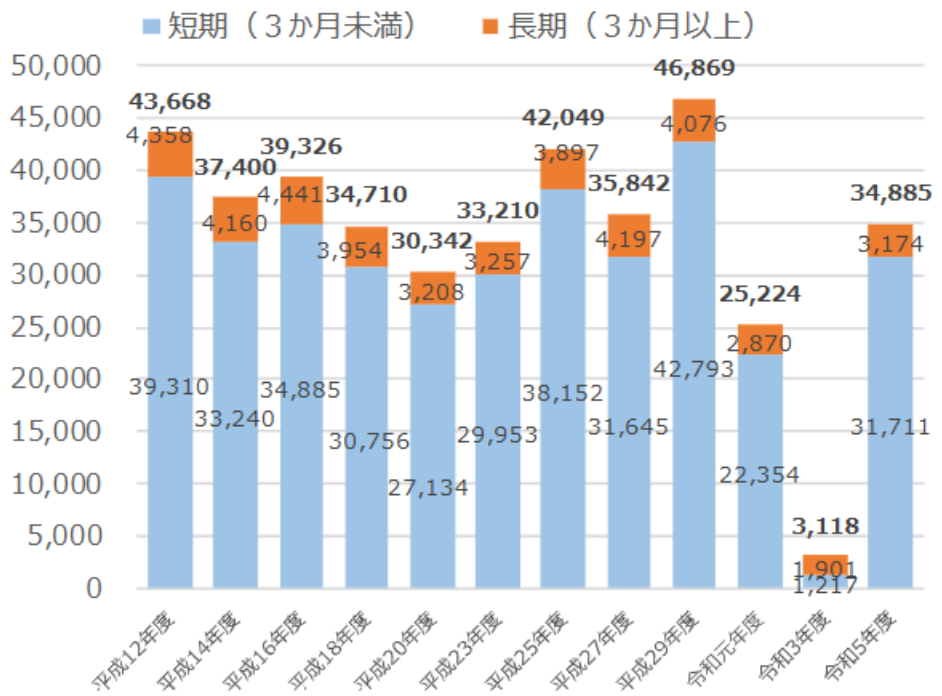
高校の留学

３カ月未満（研修旅行）
4.3万人→11万人
３カ月以上（留学）
0.4万人→1万人
外国人留学生の数
0.6万人→２万人

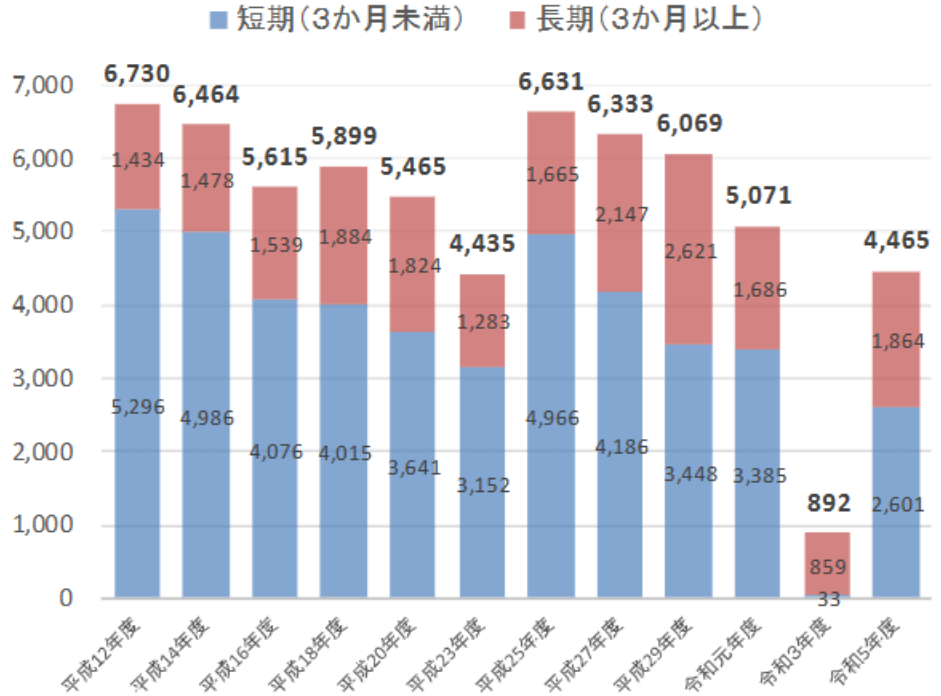
大学等の留学

学位取得のため長期
6.2万人→15万人
協定等に基づく中短期
11.3万人→23万人
外国人留学生の数
31.2万人→38万人

①高校生の海外への留学・研修旅行



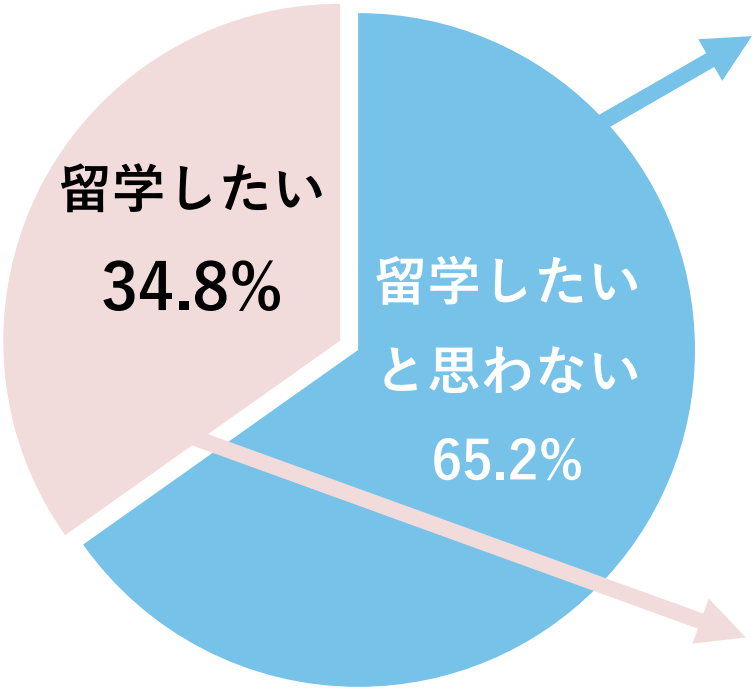
②外国からの留学・研修旅行の受入れ

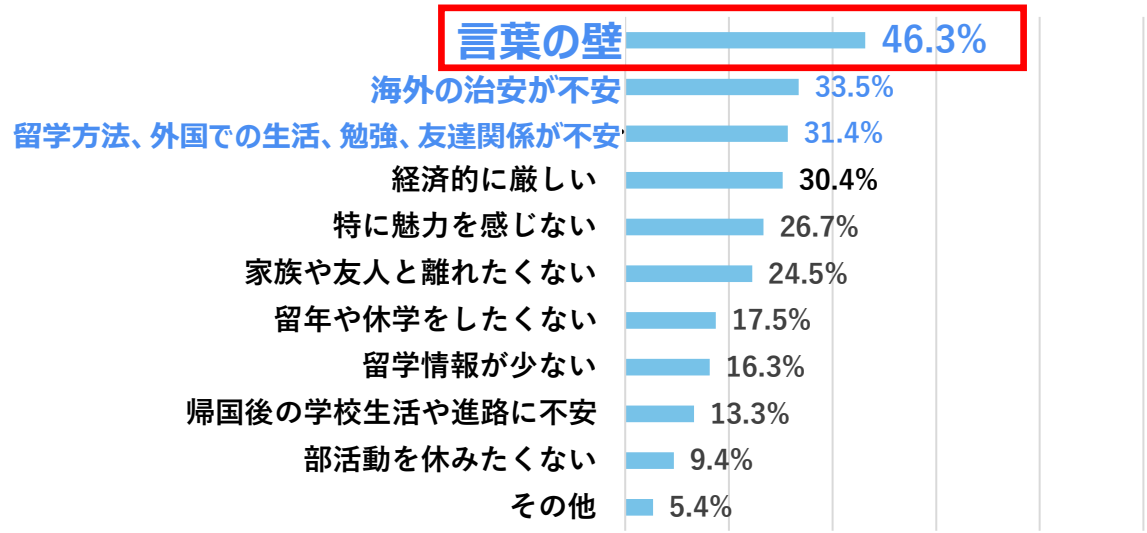


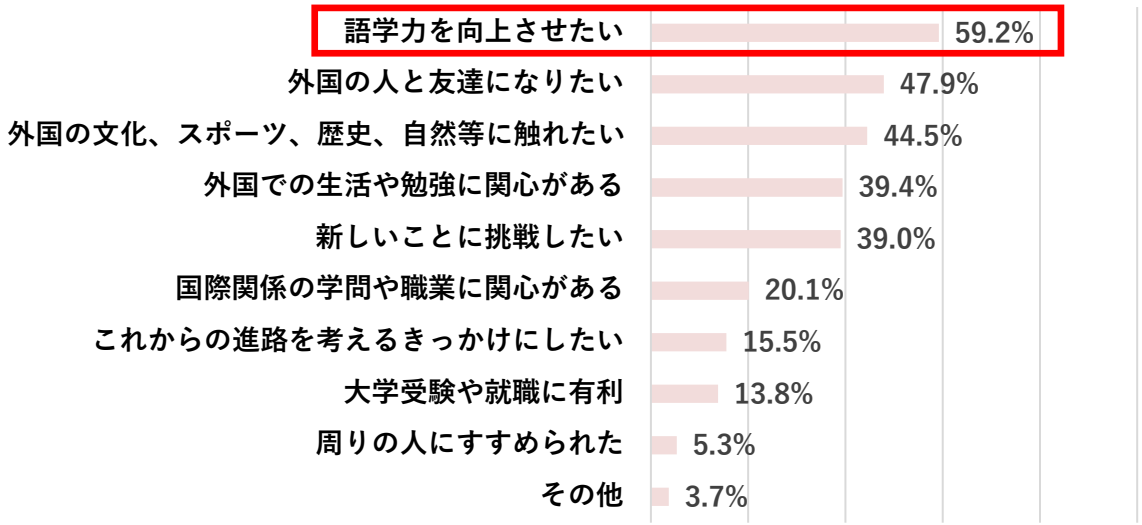
（出典）教育未来創造会議「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ＜J-MIRAI＞」（第二次提言）
高等学校等における国際交流等の状況（令和５年度）

語学力は留学の「壁」であり、「動機」でもある

日本の高校生の海外留学への意向

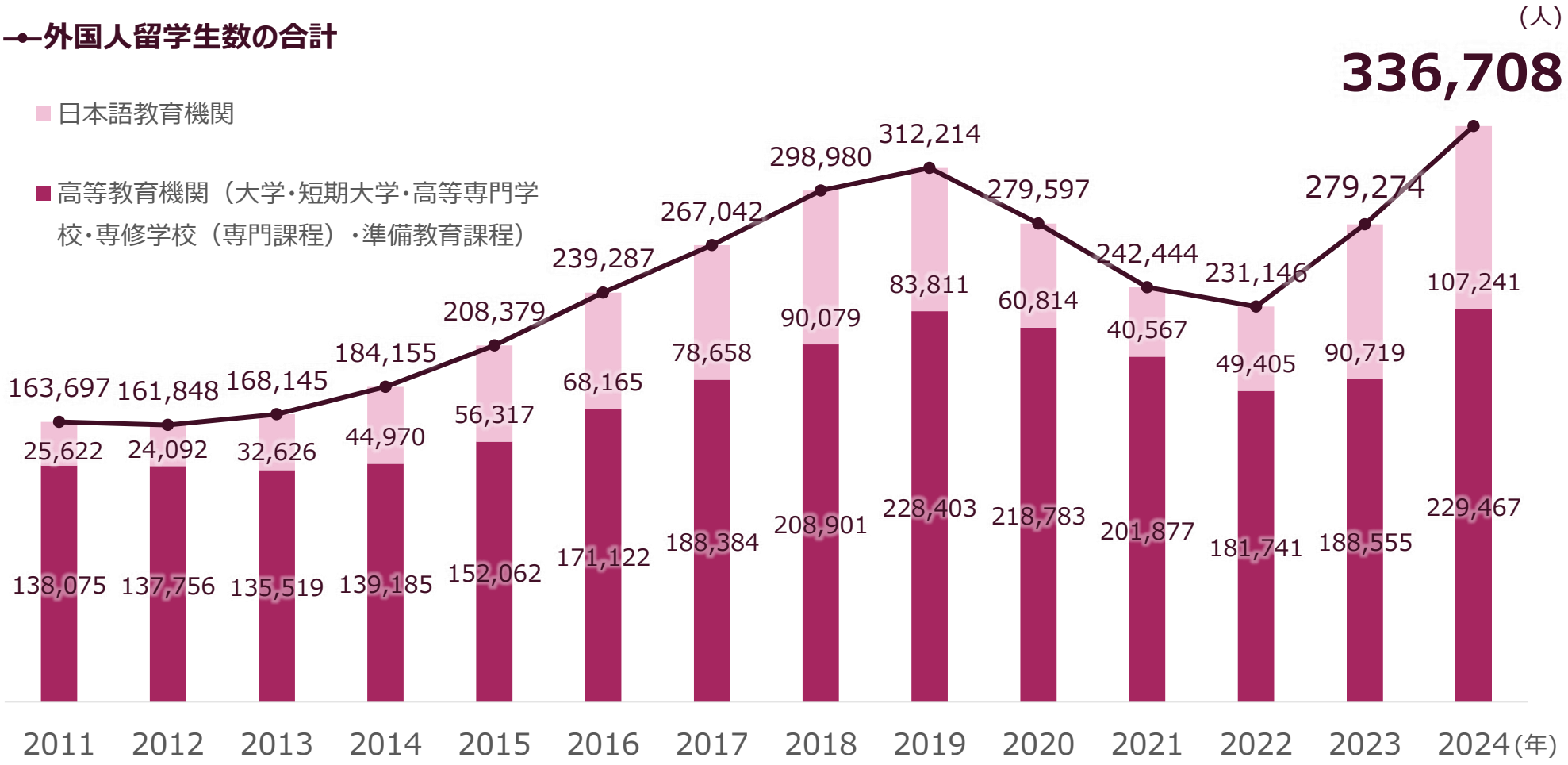






（出典）高等学校等における国際交流等の状況（令和５年度）

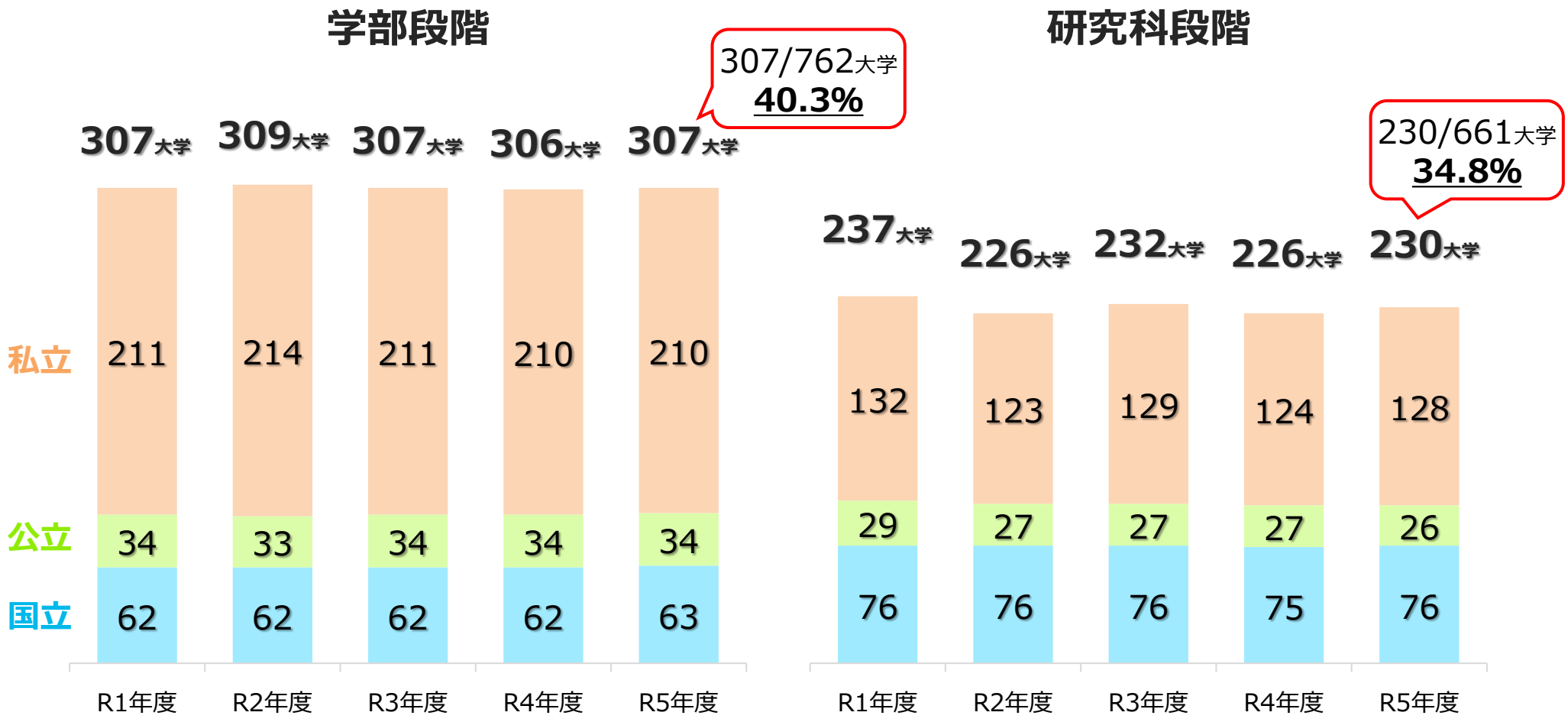
日本の大学等に在籍する外国人留学生数は過去最多



※ 本調査の対象は、各年5月1日時点において、在留資格「留学」により、我が国の大学（大学院を含む。）、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門課程）、我が国の大学に入学するための準備教育課程を設置する教育施設及び日本語教育機関に在籍している外国人学生を外国人留学生という。

（出典）独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）「外国人留学生在籍状況調査」を基に作成。

外国語のみの授業を実施している日本の高等教育機関は約４割



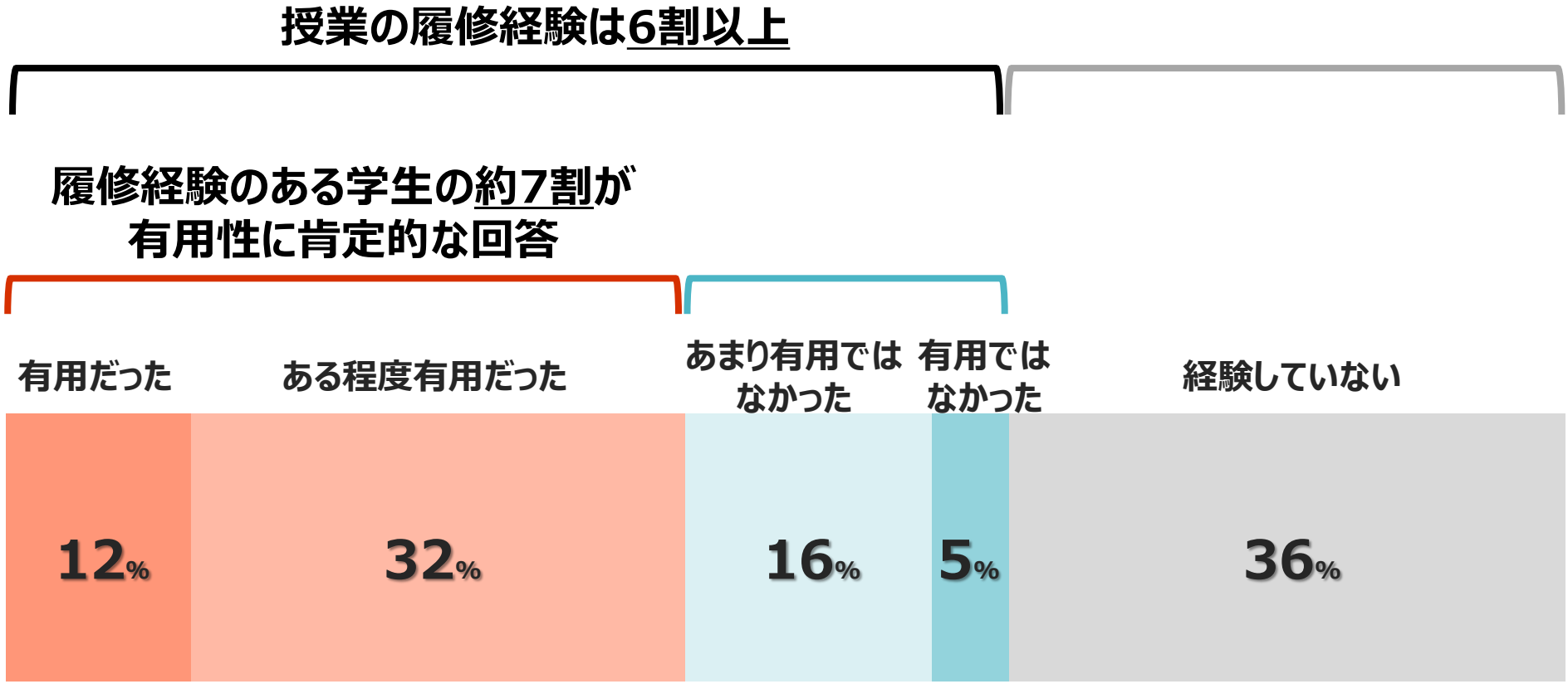
※ 令和5年度の調査対象は792大学。（令和5年度学校基本調査のデータにある810大学のうち、短期大学、専門職大学、専門職短期大学、令和5年度に学生の募集を停止した大学を除いた大学数。回答率は99%（786大学が回答。うち、各母数は【学部段階】762大学、【研究科段階】661大学。）
※ 令和元年度から令和4年度における本調査の回答数は、【令和4年度】781大学、【令和3年度】775大学、【令和2年度】775大学、【令和元年度】763大学。
※ 外国語のみの授業（日本語を併用しない授業）の実施について、選択肢「ある」と回答した学部が1つ以上ある大学を集計。
※ 学部段階の大学数について、大学院のみを設置する大学は母数に含めない。
※ 令和5年度は「外国語による授業」を実施している大学、令和4年度は「英語等による授業」を実施している大学、令和元年度から令和3年度は「英語による授業」を実施している大学の数。

（出典）大学における教育内容等の改革状況について（令和元年度～令和5年度）の調査結果を基に作成。

大学
R6全国学生調査
(第4回試行実施)

●主に英語で行われる授業の履修経験は６割以上
●うち約７割が有用性に肯定的な回答

Q 大学在学中に経験した「主に英語で行われる授業の履修（語学科目除く）」はどの程度有用だったと感じますか



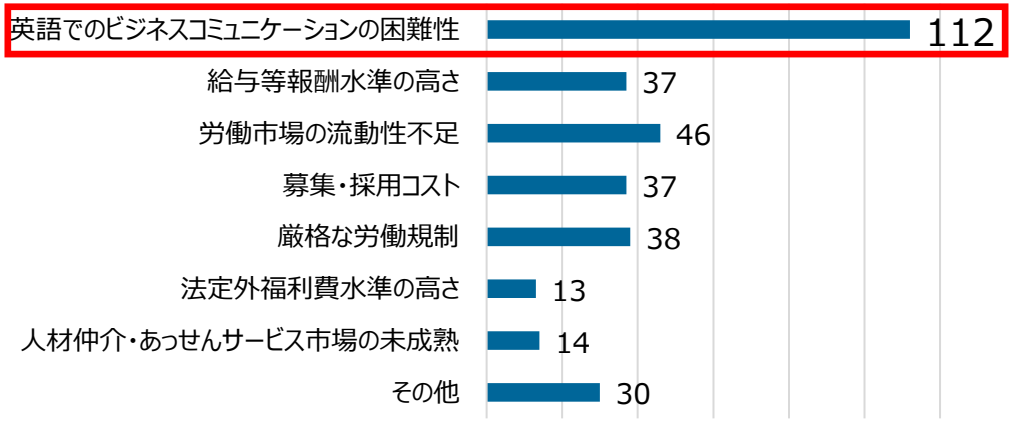
※回答の割合は、小数点第三位で四捨五入した上でパーセント表示している。

（出典）令和6年度「全国学生調査（第4回試行実施）」

企業がグローバル日本人人材を確保する上での阻害要因は英語が上位

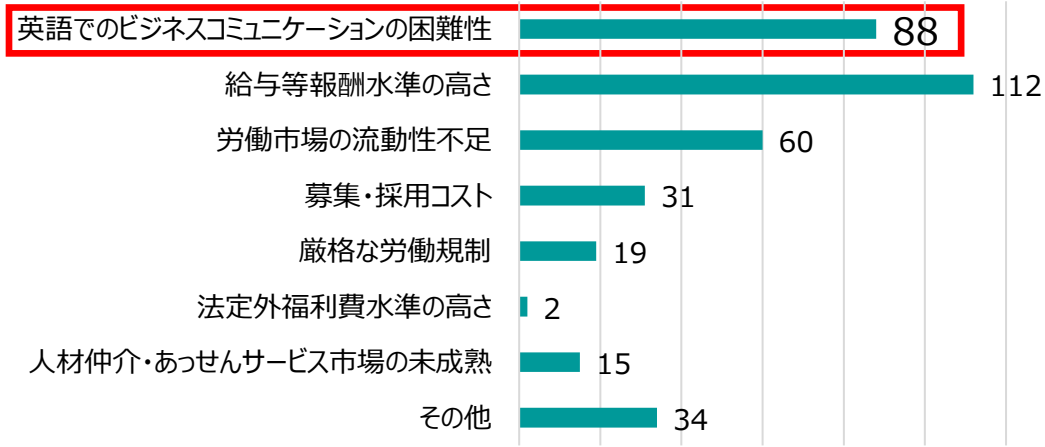
外国企業

回答企業数：141 社（1 つ以上回答した企業）



日本企業

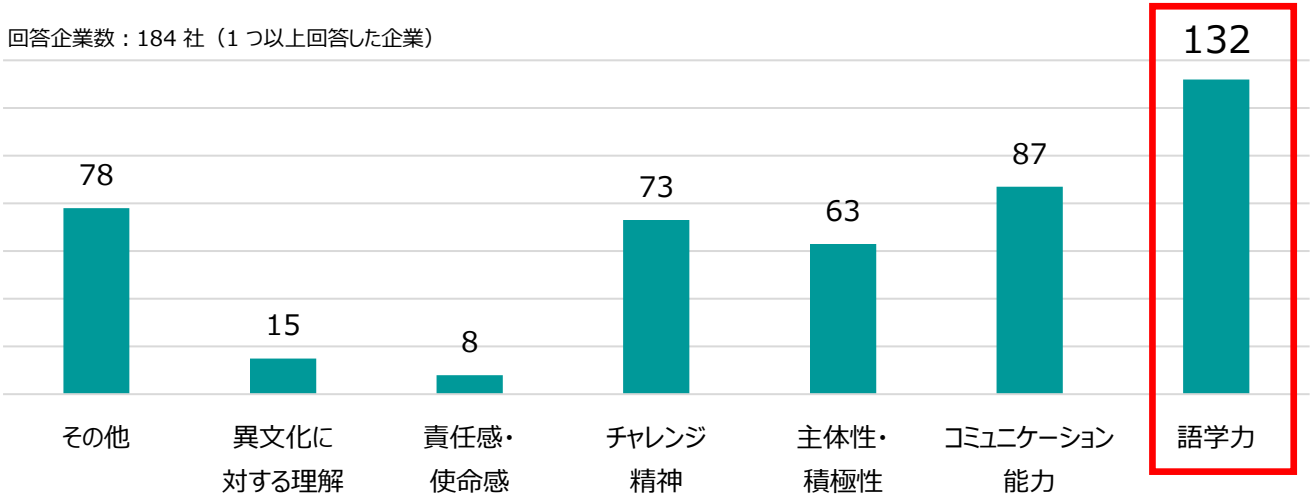
回答企業数：178 社（1 つ以上回答した企業）



日本人人材のグローバル化の課題

日本企業

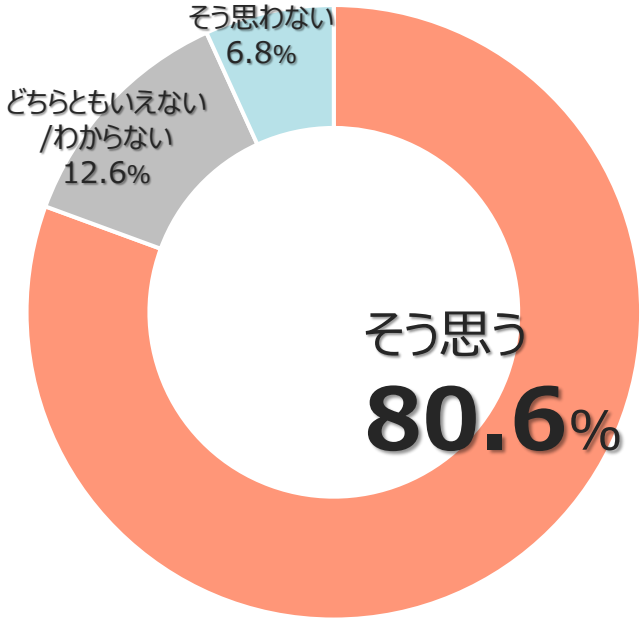
回答企業数：184 社（1 つ以上回答した企業）



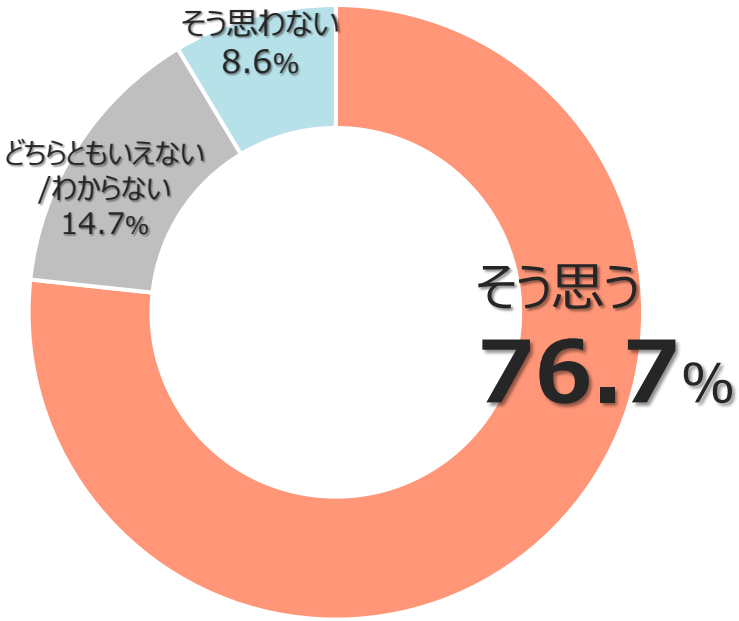
（出典）経済産業省「令和４年度我が国のグローバル化促進のための日本企業及び外国企業の実態調査報告書 」（令和５年２月）を基に作成。

約８割の企業が、
「社員の英語によるコミュニケーション能力の強化は、企業価値を増大させるうえで望ましい」
「英語によるコミュニケーション能力を持つ人材の重要性が「10年後に高まっている」と回答

Q 社員の英語によるコミュニケーション能力の強化は、企業価値を増大させる上で望ましいと考えますか？



Q 英語によるコミュニケーション能力を持つ人材の重要性は、10年後に高まっていると考えますか？

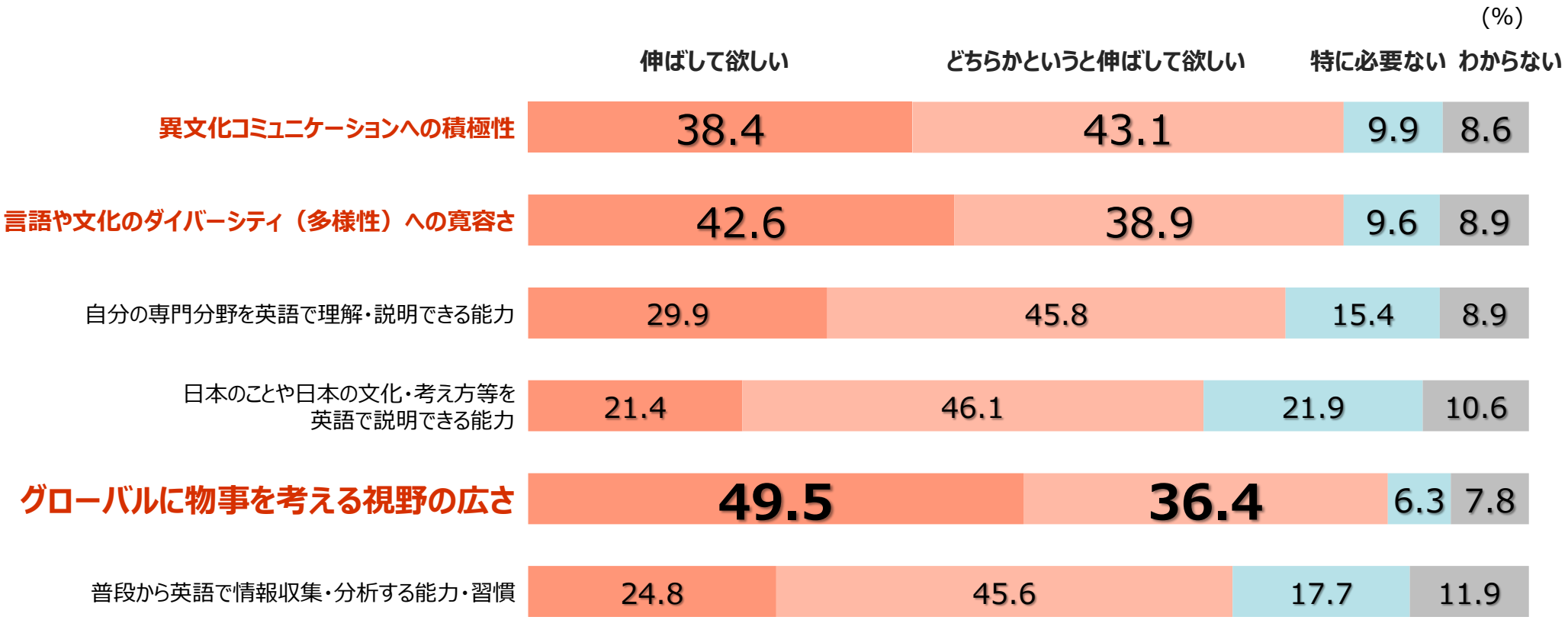


※選択肢は、とてもそう思う／ややそう思う／どちらともいえない・わからない／あまりそう思わない／まったくそう思わないの５つ。
とてもそう思う／ややそう思うを「そう思う」にまとめ、あまりそう思わない／まったくそう思わないを「そう思わない」にまとめている。

（出典）「令和3年度「先導的大学改革推進委託事業」社会で求められる総合的な英語能力の調査研究最終報告書」（レクシスネクシス・ジャパン株式会社）

- 企業が入社を志望する学生に伸ばして欲しい資質・能力等は、「グローバルに物事を考える視野の広さ」が最多（85.9%）
- 「異文化コミュニケーションへの積極性」、「言語や文化のダイバーシティ（多様性）への寛容さ」も8割超

Q 貴社への入社を志望する学生に対して、英語力を伸ばす過程で併せて伸ばして欲しい資質・能力等は何ですか？



（出典）「令和3年度「先導的大学改革推進委託事業」社会で求められる総合的な英語能力の調査研究最終報告書」（レクシスネクシス・ジャパン株式会社）

（参考）「話すための思考」から見た外国語学習の意義

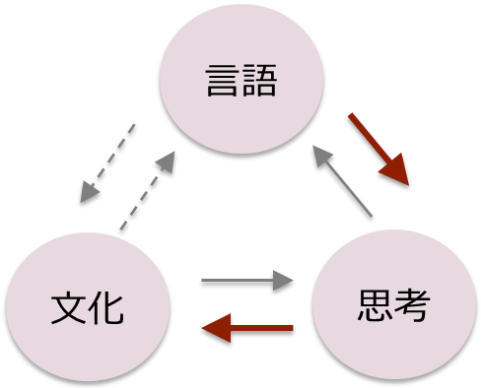
「話すための思考」から見た外国語学習の意義

- 同じ状況を表す異なった言語の表現形式を比較することを通して、両言語話者の持つものの見方や世界の捉え方の違いを理解することができる。外国語学習の意義とは、**母語とは異なる新たな思考法（新たなものの見方、新たな世界の捉え方）があることを知り、複眼的に世界を見る知力を養うこと**。
- どんなにAI翻訳によって言語のコミュニケーション機能が代替されたとしても、消えずに残される外国語学習の意義がまさにここにある。
- **外国語を学ぶということは、ことばの奥深さに触れることに直結する**。仮にAI翻訳にコミュニケーションを任せる時代が到来したとしても、ことばの奥深さを意識するチャンスは失ってはならない。それが、**巡り巡って他者を知り自分を知ることになる**。

（参考）Slobin(1996)の「話すための思考」（Thinking for speaking）

※言語、思考、文化を分かりやすさの観点から単純化して示している点に留意。

文化から思考へ、思考から言語へ、という一連の意識の流れだけでなく、言語から思考へ、思考から文化へという流れも存在している。



言語の特徴に合う**思考法が**
習慣化した人々が集まれば、文化になる

話す**言語によって**、話す内容のどこに注意を払うか**（思考）が異なる**
（参考）選択的注意：環境の中に埋め込まれた情報を能動的に取りに行く

（例）

英語：対象物が可算・不可算か、単数・複数か
→ a cow / cows

日本語：対象物が動物か否か
→ 牛がいる ⇔ 木がある

言語を使うほど、思考法が習慣化され、
言語を話していないときでも人間は**無意識にその思考を行うようになる**

（出典）町田章. (2025). AI時代になぜ英語を学ぶのか. 文春新書. を基に作成。

（参考）日本語と英語の「視点」の違い

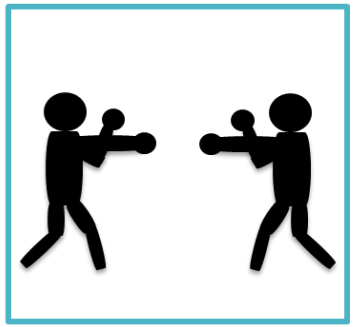
※以下は一例であり、必ずしも当てはまるものではなく、二項対立的に捉えるべきではない点に留意。

日本語話者は、自身が関わる出来事を**事態内視点**で捉え、
英語話者は自己を客体視することによって**事態外視点**で捉える傾向がある

事態把握の様式

事態内視点

事態の中にいる自分視点で、事態を見ている様式



事態外視点

自分が関わる事態を、事態の外から見ている様式

	a	b	
例 1	国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。	The train came out of the long tunnel into the snow country.	川端康成の「雪国」の冒頭部分とその英訳。描いている情景は同じだが、日本語と英語とで視点の取り方が異なっている。
例 2	その髪型いいね。 Your haircut is nice.	私その髪型好き。 I like your haircut.	日本語話者は「事態内視点」でaのように、英語話者はbのように言う傾向がある。
例3	The lecture is boring. この講義は退屈です。	I find the lecture boring. 私はこの講義が退屈だと感じます。	英語ではabともに見られる表現。aは自然な日本語であるのに対し、事態外視点をとっているbは日本語として違和感がある。

（出典）町田章. (2025). AI時代になぜ英語を学ぶのか. 文春新書. を基に作成。

（参考）可視的文化と不可視的文化、日本語文化と英語文化

※以下は一例であり、必ずしも当てはまるものではなく、二項対立的に捉えるべきではない点に留意。

他言語話者が持っている不可視的文化を理解することは、
無自覚のうちに持っている自己の不可視的文化に自覚的（メタ認知）になる

可視的文化と不可視的文化

- **可視的文化（Visible Culture）**
  言語学習なしでも理解可能な、翻訳を通しても理解できる文化の側面
  （例）クリスマスの慣習、靴を履いたまま家の中で過ごす慣習
- **不可視的文化（Invisible Culture）**
  言語学習を通してはじめて理解が可能な、自然な翻訳（直訳）を通すと理解できなくなってしまう文化
  （例）黄色い線の内側でお待ちください → Please wait behind the yellow line.
  - **隠れた文化（Covert Culture）**
    暗黙の了解として共同体で共有されている部外者には認識されにくい文化
    （例）John takes a shower everyday → 朝にシャワーを浴びる習慣

日本語文化の特徴

- **比較的容易に他者を自己に同期、同化**
  事態内視点をとる傾向にある日本文化では、他者の視点を自己の視点に同期または同化させる傾向がある
  （参考：察しの文化）
  他者も自分と同じように感じ、同じように考えているはずだという前提
- **対象に共感できるか否かに敏感**
  （例）子犬を抱く ⇔ 大きな魚を抱える
  ※生物か否か、有情か否かは、対象に共感できるかどうかを決める重要な要素

英語文化の特徴

- **他者は自分とは異なるということが暗黙の前提**
  くどいようでも、相手に何を指しているのかを明示
  （例）英語では代名詞を使用
- 対象への共感や生物か否かは英語において日本語のようには意識されない
  （例） Hold a puppy/ a big fish.

（出典）町田章. (2025). AI時代になぜ英語を学ぶのか. 文春新書. を基に作成。

（参考）CEFR-CVにおける複言語・複文化能力についての言語能力記述文（Can do）

- 2001年、欧州議会が言語教育の質的な改善と柔軟な（open-minded）複言語的市民の育成等を目的として、**CEFR※1を開発**。**言語を使用して何ができるかをレベル別の言語能力記述文（Can do）で示した**。

※1　Common European Framework of Reference for Languages: Learning teaching assessment：外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠

- 学習者・教授する者・評価者がCEFRを共有することによって、**言語熟達度を同一基準で判断しながら「学び、教え、評価」できるよう意図**されているとともに、Can doの学習目標を実世界での言語使用と関連付けることで、**行動中心アプローチによる学習枠組みを提供**。

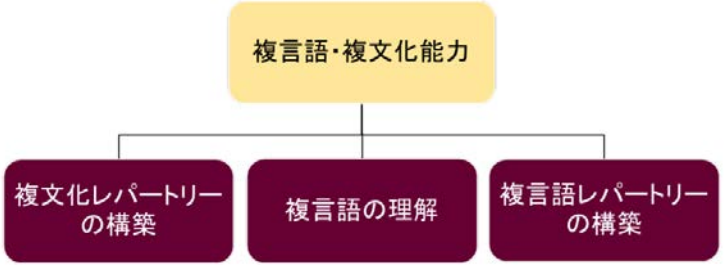
- 2020年には「ヨーロッパ言語共通参照枠 随伴版」（**CEFR-CV ※2**）**の確定版を公表し、CEFRレベルに対応する複言語・複文化能力についてのCan doも示した**。CEFR-CVで示す複言語・複文化能力についての説明やCan doについては、**FREPAを参照することを推奨している**。

※2　Common European Framework of Reference for Languages: Learning teaching assessment Companion Volume

- 複言語・複文化能力をCEFR レベルと関連させた理由は、カリキュラム開発者や教師が、（a）自分が置かれている状況の中で言語教育の視野を広げるとともに、（b）学習者の言語的・文化的多様性を認め、尊重する努力を支援するためであり、**教師や言語の使用者/学習者が他者の文化的・言語的な多様性やその価値に目を向け、それらを言語熟達度と関連させて捉えることの重要性を示唆**している。

- 複言語・複文化能力を構成している**「複文化レパートリーの構築」**には、例えば以下のような概念が含まれている。
  - 文化の多様性に接した時、その曖昧さに対する対応（振る舞いの調整、表現の修正等）。
  - 異なる文化の慣習や規範への理解、ある行動について文化を異にする人々は、異なった受け取り方をするかもしれないということを理解する必要があるということ。
  - ジェスチャー、声の調子、態度などの立ち振る舞いの違いを理解し、過度の一般化とステレオタイプについて話し合うことが必要であるということ。
  - 違いを受け止め、共通点を見出し、コミュニケーションの改善に利用すること。
  - 違いに敏感（繊細）であることを示す意欲を持つこと。
  - 誤解が生じる可能性があることを予測し、説明を申し出たり求めたりするための心構え。

複言語・複文化能力の構成



（出典）Council of Europe(2020) Common European Framework of Reference for Languages: Learning teaching assessment – Companion volume Council of Europe Publishing Strasbourg available at www.coe.int/lang-cefr.
欧州評議会(2020)『言語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 随伴版』
令和6年2月22日　文化審議会国語分科会日本語教育小委員会（第124回）資料２ 「日本語教育の参照枠」の見直しのために検討すべき課題について」 を基に作成。
※文部科学省で仮訳したものであり、原文の一部を省略している

（参考）CEFR-CVにおける「複文化レパートリーの構築」のCan do

C2	• コンテクストに合わせて自分の行動を開始したり、言葉遣いをコントロールしたりすることができ、文化的な差異に対する気づきがあることを示し、微妙な修正を行ない、誤解や文化的突発事故を避けることができる。
C1	• 社会言語的/社会語用論的側面での慣習の違いを認識し、それを批判的に省察し、自分の言葉遣いを修正できる。 • 異文化の出逢い、読み物、映画などを引き合いに出して、注意深く文化的価値観や実践行動の慣習の背景を説明したり、解釈したり議論したりできる。 • 異文化間コミュニケーションで起こる曖昧さと取り組み、相手の反応を建設的に説明し、また文化的に適切に表現し、解明ができる。
B2	• **自分自身と他の社会グループの物の見方と実践行動を、判断と偏見を左右することの多い暗黙の価値観に気付いていることを示しながら、記述・評価ができる。 • **自分のコミュニティがもっている、そして自分にとって馴染みのある他のコミュニティがもっている、文化的な前提、先入観、ステレオタイプ、偏見に対する解釈を説明することができる。 • **他の文化からの文書や出来事の解釈・説明ができ、それを自分自身の文化、または自分が馴染みの文書や出来事との関係づけることができる。 • **自分のコミュニティおよび他のコミュニティの、メディアの中の情報や意見の客観性や釣り合いについて、議論できる。文化的に規定されている行動パターンの類似性と相違（例：ジェスチャーと話し声の大きさや、手話の場合は手話表現の大きさ）を把握し、その意味を議論し相互理解に持っていける。 • 異文化間の出逢いで、通常は人が一定の状況で当然と受け取っていることが必ずしも他と共有されているわけではないことを認識でき、適切に対応したり自分の考えを表明したりできる。 • 一般には文化的特徴を当該文化の中で適切に解釈できる。 • 自文化や他文化で特有のコミュニケーションのやり方や、それが引き起こし得る誤解を省察し、説明ができる。
B1	• 姿勢やアイコンタクト、他人との距離に関する慣習に従った行動が大抵の場合とれる。 • ごく一般に使われている文化的特徴に大抵の場合適切に対応できる。自分の文化の特徴を他の文化の人たちに説明できるだけでなく、他の文化の特徴を自分の文化の人たちに説明できる。 • 簡単な専門用語を使って、自分たちの価値観や行動が、他の人たちの価値観と行動に対する見方に影響を与えることを説明できる。 • 簡単な専門用語を使って、他の社会文化のコンテクストの中では自分自身には「変だ」思われることが、当該の社会文化のコンテクストでは「普通」になる経験を議論できる。 • 簡単な用語を使って、自分自身の文化的に規定された行動が、他の文化の人々には違った受け取り方をされる経験を議論できる。
A2	• 日常的やり取りと結びついた文化的な基本慣習（例：挨拶の仕方の相違、儀礼）を認識し、それに従える。日常的な挨拶、お別れが言え、感謝とお詫びも適切に言えるが、ルーティンから外れたところでは難しい。 • 日常の取引で自分の行動が望んだのとは異なるメッセージとして伝わるかも知れないと認識し、それを簡単に説明しようと試みることができる。 • 他の文化の人とのやり取りで問題が生じることを認識することはできるが、その状況の対応の仕方はよく分からない。
A1	• 数え方、距離の測り方、時間の表し方などに、いろいろな方法があることを認識できるが、ただ、日常の具体的な交渉や取引でそれを援用するには困難が見られる。
Pre-A1	利用できる能力記述文はない。

「**」がついている能力記述文はB2レベルにとっても高度なものであり、Cレベルにも適しているかも知れない。

（出典）欧州評議会(2020)『言語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 随伴版』を基に作成。

（参考）FREPA（言語と文化への多元的アプローチのための参照枠）

- 2004年以降、欧州評議会の欧州現代語センター（European Centre for Modern Languages（ECML））は、複言語・複文化教育を推進することを目的として、**FREPA※1 を開発**し、2012年に「A Framework of Reference for Pluralistic Approaches to Languages and Cultures」を公表。

※1 Framework of Reference for Pluralistic Approaches to Languages and Cultures：言語と文化への多元的アプローチのための参照枠

- FREPAは、**複数の言語・文化を関連付けて扱う「多元的アプローチ（pluralistic approaches）」を重視し、学習者が身につけるべき「能力」と「リソース」を示した**。

能力（Competences）

実際のコミュニケーションや学習の場面（状況）において、複数の内的・外的リソースを動員して課題を遂行する複雑な力。主に以下の2つの領域に大別される。

- **C1：他者性の文脈における言語的・文化的コミュニケーションを管理する能力**（紛争解決、交渉、仲介、適応など）
- **C2：複数の言語・文化的レパートリーを構築・拡張する能力**（経験の活用、体系的な学習の適用など）

リソース（Resources）

能力を支える内的な資源。
言語能力のレベルとは無関係に、以下の3領域別に能力記述文（Can-do）を示した。

- **知識 (Knowledge/Savoirs)**：言語と社会、言語的及び非言語的ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ、文化の多様性に関する知識など
- **態度 (Attitudes/Savoir-être)**：言語・文化・言語と文化の多様性に対する関心・意欲、相対化、学びに向かう態度など
- **技能 (Skills/Savoir-faire)**：観察・分析、特定、比較、言語間の転移、やり取り、学習の仕方の技能など

※Byram(1997, 2021)の異文化間コミュニケーション能力（ICC）についてはP.43参照

- また、FREPAはカリキュラムの開発者、教材作成者、教師等を対象に以下のツールを提供している。
  - 言語と文化への多元的アプローチのための参照枠： 体系化・階層化された能力とリソースのリスト
  - オンライン教材データベース: 多元的アプローチを教室で実践するための活動案
  - トレーニングキット: 教師が自律的に多元的アプローチを学ぶための研修用モジュール

（出典）Candelier M. et al. (2012) A Framework of Reference for Pluralistic Approaches to Languages and Cultures. Council of Europe. を基に作成。
※文部科学省で仮訳したものであり、原文の一部を省略している

（参考）FREPAにおける能力記述文の例 【態度】

A-2	他の言語／文化／人間の存在に対する気づき、あるいは言語的／文化的／人間の多様性に対する気づき。
A-2.1	自分の言語や文化、および他の言語や文化に対する気づき。
A-2.2	言語的／文化的差異に対する気付き。
A-2.2.1	言語や文化によって異なりうる、言語や文化のさまざまな側面に気づいている
A-2.2.1.1	言語的な世界（例えば、言語音、文字、統語組織など）や文化的な世界（例えば、テーブルマナーや交通規則など）の多様性に気づいている
A-2.2.2	同一の言語（方言なども含む）や文化の変異形（局所的な変異形、地域的な変異形、社会的な変異形、世代的な変異形）に気づいている
A-2.2.3	言語や文化の中にみられる他者性の痕跡（例えば日本語の中の借用語）に気づいている
A-2.3	言語的／文化的な類似性に対する気付き。
A-2.4	異なる言語／文化の間にある差異および類似性に敏感である
A-2.4.1	あいさつの仕方、コミュニケーションを始める方法、時間の表現方法、食事の仕方、遊び方といったことに、大きな多様性があることに気づいているまた、「それと同時に」、それらの様式が応える普遍的なニーズには類似性があることに気づいている
A-2.5	周囲の、あるいは離れた場所の複言語的／複文化的な状況に対する気付き。
A-2.5.1	社会の言語的／文化的多様性に気づいている
A-2.5.2	教室の言語的／文化的多様性に気づいている
A-2.5.2.1	教室内にみられる諸言語／諸文化の多様性に気づいている（それらの言語／文化が自分の言語的／文化的な実践／知識と併存している場合）。
A-2.6	言語的／文化的な慣習の相対性に対する気付き。

（出典）FREPA in other languages. European Centre for Modern Languages. Council of Europe.を基に作成。
（欧州現代語センターがーが公開している日本語訳であり、一部を省略している。）

（参考）異文化間コミュニケーション能力に関する研究上の知見

- Byram(1997, 2021)は、**異文化間コミュニケーション能力（Intercultural Communicative Competence（ICC）**を言語能力だけでなく、異なる文化的背景をもつ人々とコミュニケーションを行いながら、文化的な意味を解釈し、関連付け、異なる文化の間を仲介する複合的な能力として捉え、ICCの**モデルを提示**。
- 従来のコミュニケーション能力のモデルは対象言語のネイティブ・スピーカー（母語話者）を理想としていることを問題視し、**「異文化間話者（Intercultural Speaker）」を理想として掲げた**。

異文化間コミュニケーション能力

言語能力

話し言葉、書き言葉を産出し、解釈するために、その言語の標準変種のルールに関する知識を適用する能力

社会言語能力

一人の対話相手が産出した言語に対して、対話相手が当然としている意味づけ、あるいは対話相手との交渉によって明らかとなる意味を付与する能力

談話能力

対話相手の文化の慣習に従った、あるいは特定の目的のための異文化間テクストとして交渉の対象となる独和型ないし対話型テクストを産出し、解釈するための方略を使い、発見し、交渉する能力

異文化間能力

解釈／関連づけのスキル
(savoir comprendre)

他文化の文書や出来事を解釈・説明し、自国の文書や出来事にそれらを関連づける能力

知識
(savoir)

- 社会集団と、自国と対話相手の出身国における社会集団の産物と習慣に関する特定の知識
- 社会的及び個人間の相互交流の過程に関する一般的知識

クリティカルな文化意識
(savoir s'engager)

自己の文化や国、他の文化や国に見られる価値観を、クリティカルにかつ明確で体系的な推論の過程に基づいて評価する能力

好奇心/開放性を持つ態度
(savoir être)

好奇心、開放性、他の文化についての疑念と自己の文化についての信念を保留する心構えがあること

発見／相互交流のスキル
(savoir apprendre-faire)

文化的習慣についての新しい知識を習得する能力、リアルタイムでコミュニケーションと相互交流を行うという制約のもとで、知識、態度、スキルをうまく操作する能力

（出典）Byram M. (1997). Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. Multilingual Matters.
Byram M. (2021). Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence Revisited. Multilingual Matters.
バイラム・マイケル（2026）「異文化間コミュニケーション能力 ―その指導と評価―〈再考〉」（松本佳穂子監訳;山田悦子訳）.開拓社. を基に作成。
※文部科学省で仮訳したものであり、原文の一部を省略している

（参考）異文化間能力に関する研究上の知見

- Butler & Jiang (2025) は、異文化間能力（Intercultural Competence）を早期から育成することの重要性は長く認識されてきた一方で、**子供※の発達段階に即した教育の重要性を指摘**。
  ※外国語（Foreign Language）または第二（追加）言語（Additional Language）を学ぶ若年言語学習者（young language learners（YLLs））
- Read（2022）の「Three-phase model」のように従来の大人向けモデルを子供（４～12歳）向けに再構築する取り組み等も進んできているが、子供の異文化間能力を育むためには**理論的・概念的な定義の不足、教師の専門的研修の不足や言語の壁、発達段階や実態に応じた教材の不足等の課題があり、今後さらなる研究が必要であるとした**。

Three-phase model

※Byramの異文化間コミュニケーション能力（ICC）モデルを基礎としつつ、子供の年齢に応じた認知的、概念的、心理的、社会的および情緒的発達を反映するように設計。
※必ずしも外国語・第二言語の教育における異文化間教育を念頭においているものではなく、一般的なモデルである可能性に留意。

•第1段階：本物の子供の文化 (Authentic Children's Cultures)

対象: 主に幼児～小学校低学年
目的: 他の文化圏の子供たちも自分たちと同じような活動を楽しんでいることを理解することで、**肯定的な自己イメージと自信を育むことを目指す**。
内容: 遊びを中心とした活動。学習者が母語や身近な言語で既に親しんでいる、韻（ライム）、歌、絵本、物語、ゲーム等を外国語で体験。

•第2段階：文化の比較と対比 (Comparing and Contrasting Cultures)

対象: 主に小学校中学年
目的: 文化間の比較・対比を行い、クラスメートの文化を含む**多様な文化を尊重する姿勢を養う**。
内容: 自己の文化的なアイデンティティや共感能力が発達し始める時期に合わせて、絵本やプロジェクト型の活動を実施。家族、移民、友情といった社会的・文化的話題について考え、クリティカル・シンキングを養う。
※その際、文化に対する固定観念（ステレオタイプ）や過度な一般化を避けるような教材や活動が重要。

•第3段階：より広い世界の文化 (Cultures in the Wider World)

対象: 主に小学校高学年
目的: **自分自身の見方を相対化しながら、多様な視点や信念を理解し、尊重できるようになることを目指す**。
内容: 育まれたコミュニケーション能力やデジタル技術を活用し、探究学習やオンラインによる国際交流等を通して異文化の文脈でやり取りできる力を養う。

（出典）以下の文献を参考に文部科学省作成。　※文部科学省で仮訳したものであり、原文の一部を省略している
Butler Y. G. & Jiang S. (2025). Intercultural learning in preschool and primary school contexts. In C. Fäcke X. Gao & P. Garrett-Rucks (Eds.) Handbook of plurilingual and intercultural language learning (pp. 275–287). John Wiley & Sons.
Read C. (2022). Creating a model for intercultural competence in early years and primary ELT. In D. Valente & D. Xerri (Eds.) Innovative practices in early English language education (pp. 57–79). Palgrave Macmillan.

グローバル社会における人材育成について

基本的な方針

❶ グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成

（グローバル人材育成）

○ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大及び国際情勢の不安定化により、世界経済の停滞や国際的分断の進行の懸念が高まっている。こうした中で、**グローバルな立場から社会の持続的な発展を生み出す人材として、地球規模の諸課題を自らに関わる問題として捉え、世界を舞台に国際的なルール形成をリードしたり、社会経済的な課題解決に参画したりするグローバル・リーダーや、グローバルな視点を持って地域社会の活性化を担う人材の育成を推進していく必要**がある。また、**グローバル競争が激化する中、世界の中で我が国が輝き続けるためには、世界で活躍するイノベーターやリーダー人材を育成していくことが求められる**。

○ **日本や外国の言語や文化を理解し、日本への愛着や誇りを持ちつつ、グローバルな視野で活躍するための資質・能力の育成が求められており**、コロナ禍で激減した日本人学生・生徒の海外留学や、より若年段階からの国際的な交流活動の推進、外国人留学生の受入れ環境、大学等のグローバル化の基盤・ルールの整備、**外国語教育の充実**、外国人への教育の充実、国際理解教育の推進**などを図っていく必要がある**。

○ また、産学官をあげてグローバル人材を育成する取組の推進や、優れた外国人材の受入れを図る視点、外国につながる子供の持つ多様性を「長所・強み」として生かす視点、海外で学ぶ日本人の子供への教育を保障する在外教育施設の魅力を高める取組も重要である。あわせて、距離や場所、時間の制約を克服するデジタルの活用により様々な国際交流・教育プログラムの展開の可能性が生まれており、遠隔・オンラインとリアルを組み合わせた取組の推進が求められる。

○ その際、グローバル化に対応した教育システムの国際標準や平準化が今後進められることが予測される中で、日本の教育の位置付けを検討していくことが求められる。

（出典）「教育振興基本計画」（令和5年6月16日閣議決定）

目標 4 グローバル社会における人材育成

伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度、豊かな語学力、異なる文化・価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力、新しい価値を創造する能力、主体性・積極性・包摂性、異文化・多様性の理解や社会貢献、国際貢献の精神等を身に付けて様々な分野・地域で国際社会の一員として活躍できる人材を育成する。また、日本社会の多様性・包摂性を高めるとともに、日本を深く理解する外国人を養成するため、外国人学生・生徒の受入れを推進する。

▶指標 ※下記は一部抜粋

- 英語力について、中学校卒業段階で CEFR の A1レベル相当以上、高等学校卒業段階で CEFR の A2レベル相当以上を達成した中高生の割合の増加（5年後目標値：6割以上）
- 全ての都道府県・政令指定都市において、中学校卒業段階で CEFR の A1レベル相当以上、高等学校卒業段階で CEFR の A2レベル相当以上を達成した中高生の割合を5年後までに5割以上にすることを目指す
- 特にグローバルに活躍することが期待される層の拡充に向けて、高等学校卒業段階で CEFR の B1レベル相当以上を達成した高校生の割合の増加（5年後目標値：3割以上）
- 2033 年までに、日本人高校生の海外留学生数について、12 万人を目指す
- 2033 年までに、日本の高校への外国人留学生数について、2万人を目指す

（出典）「教育振興基本計画」（令和5年6月16日閣議決定）

▶基本施策

※下記は一部抜粋

○日本人学生・生徒の海外留学の推進

・グローバルに活躍する人材育成を更に推進するため、高等学校段階からの海外経験・留学支援に係る取組を促進するとともに、海外留学に関する情報発信や海外留学への関心喚起に向けた取組など、地方公共団体における留学への機運を醸成する取組を推進する。また、留学する生徒・学生の安全が確保されるよう啓発を図る。

・我が国のグローバル化や国際競争力の強化を促進するため、海外の大学等にて学位を取得する長期留学への支援を引き続き推進していくとともに、大学等におけるグローバル人材育成プログラムの一環として行われる大学間交流協定等に基づく短期留学の支援を推進する。

・若者の海外留学を官民協働で後押しする「トビタテ！留学 JAPAN」を発展的に推進し、日本の未来を創るグローバル・リーダーを輩出するための日本人生徒・学生の海外留学の経済的負担を軽減するための取組や、産業界、地方公共団体等による既存の留学支援の取組の可視化・情報発信する取組、本制度による留学経験者のコミュニティを社会とつなげ、社会にインパクトを生み出す取組を行い、留学機運の醸成を図る。

○外国人留学生の受入れの推進

・諸外国との国際交流や相互理解の促進、我が国の大学等における教育研究の活性化・水準向上や今後の社会の発展に寄与する高度外国人材の確保等の観点から、高等学校段階からの戦略的な外国人留学生の受入れの推進を図る。このため、関係府省・機関等との連携の下、日本への留学に関心を持つ外国人への日本留学の魅力の発信や、外国人留学生に対する奨学金等の経済的支援、日本国内での国際交流体験、企業等と連携した国内就職支援等の受入れ環境の整備を推進する。

○外国語教育の充実

・外国語でコミュニケーションを図る資質・能力を着実に育成するため、教材・指導資料の配布やデジタルを活用したパフォーマンステストの実施など ICT の一層の活用促進、教師の養成・採用・研修の一体的な改善、特別免許状の活用や専科教師・外国語指導助手（ALT）配置等の学校指導体制の充実など、総合的に推進する。

・各都道府県等の負担軽減など必要な改善を行いつつ、「英語教育改善プラン」の策定とそれに基づく計画的な取組を促し、英語教育実施状況調査等を通して継続したフォローアップを行うことにより、PDCA サイクルを着実に機能させ、生徒や教師の英語力や指導力の向上を図る。

・大学入学者選抜において、「読む・書く・聞く・話す」の4技能に関する総合的な英語力を適切に評価するため、各大学の個別選抜について、優れた取組を幅広く普及するなど、各大学の取組を推進していく。

（出典）「教育振興基本計画」（令和5年6月16日閣議決定）